



# 公益社団法人日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2010

地球のいのち、つないでいこう



生物多様性

---

---

# 目次

---

開催趣意	1
スケジュール	2
清里ミーティング これまでの実績	3
開会式・1日目 全体会 1	
開会式	10
全体会 1「いのちのつながりを伝える」	12
基調講演「生物多様性条約第 10 回締約国会議の結果」	13
提案「生物多様性保全に果たす ESD の役割」	16
提案「What is CEPA??」	18
取組紹介「環境省における ESD の取組について」	22
全体ディスカッション	25
2日目 3.5 時間ワークショップ	27
2日目夜 全体会 2 「環境教育関連最新情報共有」	47
オプションプログラム	
環境教育プレゼンテーション	58
早朝ワークショップ	62
当日募集ワークショップ	64
3日目 全体会 3・閉会式	
全体会 3「椅子取りゲーム式全員参加ディスカッション」	68
閉会挨拶	71

---

---

# 開催趣意

---

今年で通算 24 回目となる「公益社団法人日本環境教育フォーラム清里ミーティング 2010」を、今年も 11 月 13 日(土)～15 日(月)の 3 日間にわたり、財団法人キープ協会清泉寮を主会場に開催いたします。

ますます深刻になりつつある環境問題を解決する取り組みの一環として環境教育があります。環境問題を解決し、住みやすい社会にしていくためには、まず、諸問題を知り、気づき、関心を持ち、問題意識を共有することが大切です。

そして、自然はさまざまな分野と密接につながっていることから、それぞれの分野に携わる人と人（または団体）がつながりを持ち、共に手を携えていくことが必要です。

全国各地から研究・教育・行政・企業・NGO・NPO など環境教育の現場で働く人々同士のつながり＝ネットワークを大切に、継続的に育んでいくことが社会を動かしていく力の源になると考えております。

そのために、お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的として、このミーティングを開催いたします。

## 特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者の皆様が“主役”であることです。

どんなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体でつくり上げていくという性格を持っています。

## テーマ

このミーティングは、主に下記の 2 点を全体のテーマとしています。

1. 参加者同士のネットワークの構築
2. それぞれの環境教育活動を再確認し、理念や意識を共有する場  
～人と人、思いと思いが出会うことで、新しいことが動きはじめます～

## 今年の特徴

通算 24 回目となる今年のメインテーマは「いのちをつなぐ環境教育」

2010 年 10 月に愛知県での開催である COP10(生物多様性条約第 10 回締約国会議) ではどんなことが具体的に決まり、動いていくのでしょうか? COP10 に向けてこれまでも、日本の各地で様々な取り組みがありました。全体会「いのちのつながりを伝える～私たちの役割は」では、COP10 の報告とともに、いのちのつながりを伝える「教育とコミュニケーション」の役割について ESD、CEPA それぞれの視点での提言を行い、参加者全員で「いのちのつながり」を伝え、行動していくためにどんなことができるのか、どのように役割を果たすことができるのかを、ディスカッションタイムで具体的に考えてゆきます。

1 日目の全体会「いのちのつながりを伝える～私たちの役割は」では、基調講演「COP10 で何が決まり、何が動くのか」について環境省から、提言「いのちのつながりを伝える『教育とコミュニケーション』の役割」について当団体理事、NPO の方からそれぞれお話いただきます。その後、参加者全員でいのちのつながり(生物多様性)について話し合い、考えます。

2 日目には、生物多様性をはじめ環境教育に関する 3.5 時間ワークショップを実施するほか、早朝ワークショップ、当日募集ワークショップ等も行います。

また、「環境教育プレゼンテーション」では、たつぷりと時間をとって、皆様から活動の最新情報を発表していただきます。各地で環境教育を実施している企業や行政や自然学校の中で、今何を最も大事な環境教育のテーマとしているのか、どんな課題、新しい挑戦があるのかを発表しあい、共有します。

そして、それぞれの活動を理解し、刺激を受け合いながら、これからの環境教育活動につなげていただきたいと思います。

---

# スケジュール

---

## ■ 1日目：11月13日（土）

10:30～	受付開始
11:30～12:15	ちょっと早めに到着された方のための先取り交流企画（自由参加）
13:00～16:30	開会式 全体会1「いのちのつながりを伝える ～私たちの役割は」 基調講演「COP10で何が決まり、何が動くのか」 提案「いのちのつながりを伝える『「教育とコミュニケーション」の役割」 取組紹介「環境省におけるESDの取組について」 クロスジェネレーション・セッション
16:30～17:30	休憩・チェックイン
17:30～18:15	環境教育プレゼンテーション
18:30～20:00	夕食
20:30～22:30	環境教育プレゼンテーション 情報交換会 JEEF理事の何でも相談所

## ■ 2日目：11月14日（日）

7:00～ 8:00	早朝ワークショップ（自由参加）
7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	休憩・移動
9:00～13:00	3.5時間ワークショップ(昼食含む)
13:00～13:30	休憩・移動
13:30～17:00	3.5時間ワークショップ
17:00～17:30	移動・休憩
17:30～18:30	全体会2「環境教育関連最新情報共有」
19:00～20:30	夕食
20:30～21:00	休憩・移動
21:00～22:30	環境教育プレゼンテーション 情報交換会 JEEF理事の何でも相談所

## ■ 3日目：11月15日（月）

7:00～ 8:00	早朝ワークショップ（自由参加）
7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	チェックアウト
9:00～11:30	当日募集ワークショップ
11:45～12:30	全体会3「椅子取りゲーム式全員参加ディスカッション」 閉会式
12:45～13:45	さよならパーティ
14:00	解散

---

# 「清里ミーティング」これまでの実績

## 第1回清里フォーラム

- 日時：1987年9月28日(月)～29日(火)
- 参加人数：93人
- 主催：清里フォーラム実行委員会
- 【分科会】 ①環境教育について（考え方とその論理）
  - ②自然観察の中に今後とりこんでいきたいもの
  - ③指導者とボランティアの養成を今後どうするか
  - ④施設運営とコーディネーターの在り方について
  - ⑤自然観察の有料化について
  - ⑥清里フォーラムの将来性・方向性について
- ゲスト：加藤幸子（小池しげんの子）

## 第2回清里環境教育フォーラム

- 日時：1988年11月13日(日)～15日(火)
- 参加人数：151人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／山梨県
- 【分科会】
 

前半 ①学校と環境教育	後半 ①地域・開発と環境教育
②地域社会と環境教育	②施設と環境教育
③施設と環境教育	③人づくりと環境教育
④自然観察と環境教育	④市民・行政・企業・学校の協力
⑤企業と環境教育	⑤環境教育の目的と方法
	⑥学校と環境教育
	⑦企業と環境教育
- ゲスト：ロバート・ピナウィーズ（元ヨセミテ国立公園管理事務所長）

## 第3回清里環境教育フォーラム

- 日時：1989年11月12日(日)～14日(火)
- 参加人数：168人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】 ①小中高における環境教育カリキュラム
  - ②若い世代に楽しいプログラムとは
  - ③環境教育をうまく経営していくためには
  - ④環境教育の場でボランティアが活躍できるためには
  - ⑤環境教育で村おこしができるか
  - ⑥大学における環境教育
- ゲスト：ジェームス・サノ（元マリン・ディスカバリーズ専務理事）

## 第4回清里環境教育フォーラム

- 日時：1990年11月18日(日)～20日(火)
- 参加人数：163人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】
 

①学校教育	②事業化
③プログラム	④人づくり
⑤施設	⑥地域開発・村おこし

※この年4月より上記6つの研究部会が発足。

- ゲスト：ジョセフ・コーネル（ネイチャーゲーム考案者）

## 第5回清里環境教育フォーラム

- 日時：1991年11月17日(日)～19日(火)
- 参加人数：187人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】
 

①学校	②事業化	③プログラム
④人づくり	⑤施設	⑥地域社会
- ゲスト：スティーブン・メドレー（ヨセミテ・アソシエーション会長）

\*1992年9月 任意団体 日本環境教育フォーラム発足

\*1992年7月 「日本型環境教育の提案」発刊

## 日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '92(通算6回)

- 日時：1992年9月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：132人
- 主催：日本環境教育フォーラム設立準備会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【紹介WS】
  - ①エコツアー報告・ヨセミテ自然学校
  - ②New School of Conservation における環境教育
  - ③ペンギンリザーブ活動報告
  - ④国際理解教育・資料情報センター活動紹介
  - ⑤フィールドミュージアムごっこ
  - ⑥環境教育国際セミナーに参加して
  - ⑦成城学園における「散歩」「遊び」
- 【体験WS】
  - ①さあ、みんなでやってみよう！開発教育シミュレーション
  - ②エコロジーキャンプつまみぐいハイク
  - ③ネイチャーゲーム入門
  - ④もしフィールドでけがをしたら
  - ⑤PLTプログラムの紹介
- 【分科会】
  - ①学校での環境教育
  - ②地域に根ざした環境教育
  - ③エコツーリズムの可能性とその問題点
  - ④環境教育のプログラム教材開発
  - ⑤指導者養成について
  - ⑥エコマネジメントのしかた

## 日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '93(通算7回)

- 日時：1993年11月14日(日)～16日(火)
- 参加人数：154人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】
 

①ネイチャーゲーム	②死の準備教育の試み
③マインドクロッキー	④パートナーシップへの挑戦
⑤究極の自然観察会	⑥たずね鳥をさがせ
- 【分科会】
 

①プログラム	②施設	③学校
④人づくり	⑤企業	⑥地域・自治体
⑦エコツーリズム	⑧海外の国立公園情報	
- ゲスト：アン・ロベッタ（ストーリーテラー）

## 日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '94(通算8回)

- 日時：1994年11月27日(日)～29日(火)
- 参加人数：167人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】
 

①ネイチャーゲーム	②ファイブ・トリック
③森の宝箱をつくろう	④地球救出作戦
⑤枯れ木に花を咲かせましょう	⑥清里・冬物語
- 【分科会】
 

①企業	②エコツーリズム	③都市環境教育
④ネイチャートレイル	⑤自然学校	
⑥ネイチャーライティング	⑦フォーラム塾	
- ゲスト：ジョン・エルダー（ミドルベリー大学英語学・環境学教授）

## 日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '95(通算9回)

- 日時：1995年11月25日(土)～27日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】
 

①自然学校としての施設づくり	②行政・自然学校
③自然学校の経営を考える	④自然学校の人材育成
⑤自然学校のプログラム	
- 【WS】
  - ①写真で環境教育
  - ②あなたにとって出会いとは何ですか
  - ③環境教育を企画・プロデュースする
  - ④ソフトクリーム姉ちゃんをねえ！
  - ⑤未知なる可能性を求めて
  - ⑥キープ・フォレスターズ・スクールズのプログラム体験
  - ⑦ネイチャーゲーム、アジアと環境教育
  - ⑧独特な日本人に有効な環境教育戦略は？
  - ⑨アース・アート
  - ⑩メディアワークショップ

**日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '96(通算 10 回)**

■日時：1996年11月16日(土)～18日(月)

■参加人数：174人

■主催：日本環境教育フォーラム

■後援：環境庁／文部省／山梨県

- 【分科会】 ①自然学校の「事業化」  
 ②自然学校でのプログラム  
 ③地域振興と環境教育  
 ④環境保全活動がそのまま環境教育  
 ⑤エコツーリズムの様々な可能性  
 ⑥JEEFの法人化など今後の可能性

## 【ワークショップ】

- ①ネイチャーゲーム入門講座
- ②ネイチャーエクスポアリング
- ③清里での川の環境教育を考える
- ④「子供であそぼう」についての御紹介⑤元気がでる自然観察
- ⑥環境教育の本質を考える
- ⑦環境教育を企画・プロデュースする
- ⑧清里で「海の環境教育」を考えよう
- ⑨自然をテーマにしたスライドショー
- ⑩自分への気づきと NGO
- ⑪清里インターネット通信社へようこそ
- ⑫森だくさんの自然体験
- ⑬まちを遊ぼう
- ⑭未知なる可能性を求めて
- ⑮エコビレッジを作ろう
- ⑯アクティビティの“パクリとアレンジやローカライズ”

※1997年4月 環境庁主管の法人格を取得、

**社団法人日本環境教育フォーラム設立****(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '97(通算 11 回)**

■日時：1997年11月15日(土)～17日(月)

■参加人数：170人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／山梨県

- 【分科会】 ①環境教育の指導者養成  
 ②環境教育の新しいプログラム開発  
 ③環境教育とまちづくり  
 ④環境教育の情報の発掘と提供  
 ⑤企業や行政とどのように組むのか？  
 ⑥新しい交流集会のスタイル

## 【WS】

- ①ネイチャーゲーム入門講座
- ②自然と心・心とひとのコミュニケーション
- ③環境教育の服装計画を考える
- ④出たとこ勝負の自然観察会+人間ウォッチング
- ⑤環境教育を企画プロデュースする
- ⑥環境教育と経営と税金
- ⑦インタープリティブサインをつくらう
- ⑧ディーブエコロジー・ミニワークショップ
- ⑨フィリピン流！演劇ワークショップのすすめ
- ⑩安全管理チェックリストをつくってみよう
- ⑪ネイチャーエクスポアリングコースづくり
- ⑫水辺でさがすいろいろなつながり
- ⑬アクティビティと小道具
- ⑭キープの自然体験プログラム
- ⑮博物館をつくらう！
- ⑯野外における企業研修の実際とその可能性

**(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '98(通算 12 回)**

■日時：1998年11月14日(土)～16日(月)

■参加人数：176人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

- 【分科会】 ①公共事業における環境教育の役割  
 ②森林・里山における環境教育と地域振興  
 ③アメリカの環境教育プログラムの日本への導入  
 ④動物と関わる環境教育  
 ⑤日本型エコツーリズムについて  
 ⑥メディアと環境、その先にあるもの

## 【ワークショップ】

- ①環境教育個人商店を考える
- ②私のきもち、みんなのきもち、地球のきもち
- ③21世紀のインタープリテーションを求めて
- ④おきらく やまんばの部屋
- ⑤プロジェクトワイルド「水生生物」に学ぶ
- ⑥エコマネーのすすめ
- ⑦もし参加者が野外でケガをしたら
- ⑧ネイチャーエクスポアリング
- ⑨エコスピリチュアルワークの試み
- ⑩アクティビティ大賞実施編・体験編
- ⑪これまでの50年とこれからの50年
- ⑫川を設計してみよう
- ⑬「おもしろ」を「かたち」にはじめの一步
- ⑭自然学校でめしが喰えるか

**(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '99(通算 13 回)**

■テーマ：「学ぶ心・育つ力」

■日時：1999年11月13日(土)～15日(月)

■参加人数：185人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

- 【分科会】 ①自然学校の運営を考える  
 ②「総合的な学習の時間」で学校と地域をつなぐ  
 ③都市型の生活環境をテーマにした遊び場づくり  
 ④森から見つめる川と海  
 ⑤エコツーリズム一歩前へ  
 ⑥見つけよう地域の里山、伝えよう里山の魅力  
 ⑦チルデンを越える！  
 ⑧教育を考える

## 【早朝 WS】

- ①カラスのきもち
- ②朝のティータイム
- ③きもちとキモチをつないだら
- ④五感で感じよう清里の自然
- ⑤オカリナ・ハナリナ体験教室

**(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2000(通算 14 回)**

■テーマ：「原点を見つめよう」

■日時：2000年11月11日(土)～20日(月)

■参加人数：171人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

## 【体験 PRG】

- ①野外での救急法を覚えよう
- ②ネイチャーウォッチング in 清里
- ③清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
- ④心と体で感じよう！ネイチャーゲームが案内する清里の自然
- ⑤竹を使ったものづくり
- ⑥羊の毛から糸つむぎ教室
- ⑦自分という自然に出会う
- ⑧Frog (カエル)
- ⑨プロジェクト・アドベンチャー

- 【分科会】**
- ①自然体験活動における体験学習法
  - ②ゆったり楽しむ ノスタルジーワーク
  - ③虫を知る・入門
  - ④「センス・オブ・ワンダー」って何だ?
  - ⑤学校ビオトープの可能性
  - ⑥五感を使って楽しみながら自然探検
  - ⑦環境教育とスピリチュアリティ
  - ⑧企業・行政マン向け環境教育テキスト作り
  - ⑨自然学校のPR活動を考える
  - ⑩Out of Treasure Boxes
  - ⑪民話・ことわざから考える日本人と川の関係
  - ⑫エコツーリズムのビジネスネットワークを考える
  - ⑬表現を楽しもう! 「シアターゲーム」

- 【早朝 WS】**
- ①野遊び手遊び発見隊
  - ②センス・オブ・ワンダーの体験
  - ③地球と私の合作づくり “1枚の葉”
  - ④見て、聴いて、感じて…朝の森でネイチャーゲーム
  - ⑤早朝ジョギングワークショップ
  - ⑥キモチときもちをつないだら

■スライドプレゼンテーション

■JEEF 理事による 3分トーク

**(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2001(通算 15回)**

■日時: 2001年11月17日(土)~19日(月)

■参加人数: 192人

■主催: 社団法人日本環境教育フォーラム

■主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援: 環境省/文部科学省/農林水産省/林野庁/山梨県

- 【体験 PRG】**
- ①清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
  - ②初心者歓迎! 清里の自然をネイチャーゲームで楽しもう
  - ③秋の味覚を楽しもう!
  - ④「ほっ♪」となるたき火講座
  - ⑤身体感覚講座
  - ⑥The Bear (ひぐまの生き方、暮らし方)
  - ⑦プロジェクト・アドベンチャー
  - ⑧やまねミュージアムへ行こう

**【分科会】**

- ①総合的な学習の教材として「拾ったもの(生きものに関連するもの)を活用する」
- ②「いまどき」の子ども・「いまどき」の親 改造計画!
- ③博覧会を環境教育という視点から評価する
- ④ゆったり過ごすやまね流ネイチャーワーク
- ⑤ワークショップという新しい学び方をめぐって
- ⑥朝からイキナリ! 若者で語ろう! の会
- ⑦小さな子どものための環境教育の“技”をさぐる
- ⑧地域の昔話を中心にした環境教育
- ⑨農業と林業を語ろう! 農業者と林業者と語る環境教育
- ⑩Environmental Education in English
- ⑪北九州博、きらら博で行われた環境教育プログラムはこれだ!
- ⑫テロ・戦争に関してわからあう
- ⑬環境教育基礎講座
- ⑭GEMSの体験プログラム
- ⑮自然学校で働くこと
- ⑯センス・オブ・ワンダー
- ⑰ネイチャーエクスプロアリングライトの体験と総合的な学習の時間に活かせる活動事例
- ⑱田んぼから生まれる日本型環境教育

**【早朝 WS】** ①センス・オブ・ワンダーを楽しむ

②早朝ジョギングワークショップ

■スライドプレゼンテーション

■参加者による 3分トーク「ここが変だよ! 環境教育」

**(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2002(通算 16回)**

■テーマ: 「胎動」

■日時: 2002年11月16日(土)~18日(月)

■参加人数: 182人

■主催: 社団法人日本環境教育フォーラム

■主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

■環境教育ミニレクチャー

■ヨハネスブルグ・サミット報告

■参加者による 3分トーク「環境教育 次のキーワードはこれ!」

**【ワークショップ】**

- ①地域通貨ってなんだらう?
- ②折り紙を使った環境教育の試み(3)
- ③幼稚園、保育園に環境教育を導入しよう
- ④環境問題、エコロジカルアートからの試み
- ⑤環境教育指導者と研究者、カリキュラム開発者のつながりを作ろう
- ⑥体験主義を超えて…プロジェクト・ワイルドの世界
- ⑦「自然の中で働く男性はオバチャン度が高い??」を証明したい!!
- ⑧未来へ、世界へ、感動をどうつなぐのか
- ⑨ひよこのキモチ
- ⑩モアイは何を見たか
- ⑪Environmental Education in English
- ⑫持続可能な開発と環境教育
- ⑬森の交響サイン計画づくり
- ⑭サロンの語り場

**【早朝 WS】** ①早朝ジョギングワークショップ

②清里ミニガイドツアーA

③清里ミニガイドツアーB

④モンゴル茶で朝を迎えよう

⑤清里ミニガイドツアーC

■スライドプレゼンテーション

**(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2003(通算 17回)**

■キーワード: 持続可能な開発のための教育

■日時: 2003年11月15日(土)~17日(月)

■参加人数: 208人

■主催: 社団法人日本環境教育フォーラム

■主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

**【全体会】**

- ・科学と環境教育をつなぐミーティング (前夜祭) の報告
- ・環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律
- ・持続可能な開発のための教育 (ESD)
- ・スライド&トーク 一オロニの日々

**【WS&体験 PRG】**

- ①ワラっていいとも
- ②社会教育ゲーム体験プログラム 投資意志決定ゲーム Chemical
- ③参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/AM
- ④総合学習へのNPO 参画が期待されているけど、実現が難しいのは何故?
- ⑤エコ・ネイションゲーム
- ⑥忙しい!!! けど前向きに レベルアップシートを作ろう
- ⑦科学するココロを育てよう!
- ⑧参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試み/PM
- ⑨野生生物教育の現状と課題
- ⑩フォーラム企業部会をリセットして、今後の方向性を考えよう!
- ⑪「持続可能な人」づくり
- ⑫開府 400年! 江戸町民の循環型社会から学ぶごみ減量大作戦
- ⑬どうなる? どうする? 日本環境教育フォーラムの未来
- ⑭子育てという環境
- ⑮地方発! 食農発信!
- ⑯環境教育の中の行政の役割を考えよう!

**【早朝 WS】** ①センス・オブ・ワンダー

②清里ミニガイドツアー 富士山とせせらぎの小径コース

③清里ミニガイドツアー めしの木コース

■スライドプレゼンテーション

### (社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2004(通算 18回)

■キーワード:「持続可能な開発のための教育の10年」夜明け前

■日時:2004年11月13日(土)~15日(月)

■参加人数:187人

■主催:社団法人日本環境教育フォーラム

■主管:財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力:山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援:環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

【全体会】

- ・「持続可能な開発のための教育の10年」夜明け前
- ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」を考える

【WS&体験 PRG】

- ①エコツーリズムという生き方
- ②科学と環境教育
- ③地場産小麦でパンをつくろう!
- ④環境立国 エコ・ネイションゲーム
- ⑤「センス・オブ・ワンダー」からグリーンコンシューマーへ  
~第1回清里「エコ商品コンテスト」~
- ⑥持続可能な地域づくりにつながるネイチャーゲーム体験
- ⑦体験学習への扉をひらく(午前の部)
- ⑧自然学校の動きと人材養成
- ⑨環境教育 in 国際協力 最前線!
- ⑩環境教育基礎講座「環境教育と自然体験」
- ⑪酵母を育てて、パンを作ろう!  
~酵母が教えてくれる、命、自然とのつながり~
- ⑫石器時代に接近!モノはこうして作る ~シエラカップ~
- ⑬いのちを伝える自然体験 ~自分流健康な生きかたを学ぶ~
- ⑭ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑮体験学習への扉をひらく(午後の部)
- ⑯「1億円のプロデュース」

【特別ワークショップ】

パーム油のはなし ~開発教育入門講座~

【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ

②センス・オブ・ワンダーって、こんなに楽しく気持ちいい!

③清里ミニガイドツアー めしの木コース

■スライドプレゼンテーション・5分で伝えるメッセージスライド

■JEEF 公開理事対談

### (社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2005(通算 19回)

■キーワード:「自然を舞台にした環境教育は、持続可能な社会作りに具体的にどのように役に立ってきたのか」

■日時:2005年11月19日(土)~21日(月)

■参加人数:221人

■主催:社団法人日本環境教育フォーラム

■主管:財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力:山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援:環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会:基調講演、5分間スピーチ、パネルディスカッション

【WS&体験 PRG】

- ①環境教育基礎講座(午前の部)
- ②自然学校って何だ?
- ③学校教育と環境教育
- ④ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑤ひとりひとりの感性で自然を感じとろう  
~ネイチャーゲームでのんびりぶらぶら~
- ⑥セルフガイドシートを使用した、短時間、多人数対象プログラムの検証  
~セルフガイドシートの評価軸を作ろう~
- ⑦科学ってなんだろうと考えながら皆で遊ぼう!  
~低学年向けの GEMS プログラムを通して~
- ⑧森林療法
- ⑨プロジェクトWE T 体験会(午前の部)
- ⑩環境教育基礎講座(午後の部)
- ⑪自然学校の評価に向けた人材養成
- ⑫小さな町村での自然学校の役割と可能性を探る
- ⑬CSR と環境教育
- ⑭おいしく食べ続けていける社会づくりは、...
- ⑮里山で音楽会

⑯樹木年輪から樹の声を聴く方法! ~過去からの環境の変化を辿る~

⑰プロジェクトWE T 体験会(午後の部)

⑱科学と環境教育 見直そう!あなたのインタープリテーション  
~持続可能な社会づくりに自然科学知を活かすために

【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ

②座禅&ヨガ

③清里ミニガイドツアー

■スライドプレゼンテーション・5分で伝えるメッセージスライド

■JEEF 活動報告

### (社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2006(通算 20回)

■日時:2006年11月18日(土)~20日(月)

■参加人数:224人

■主催:社団法人日本環境教育フォーラム

■主管:財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力:山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援:環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会「日本の環境教育 この20年を振り返る」基調講演

■学長鼎談「大学と環境教育」

【WS&体験 PRG】

- ①自然学校を事業化する ~20年間に自然学校は何を獲得したのか~
- ②団体・組織におけるリスクマネジメントを考える
- ③あなたにとって食育ってなに?
- ④環境教育基礎講座
- ⑤新型の起業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
- ⑥学びとコミュニケーション ~GEMS プログラムの体験を通して~
- ⑦ESDの実践のポイントを探る ~みんなで話せばわかってくる!~
- ⑧森林環境教育のすすめ ~木が好きになるプログラム~
- ⑨50分プレゼンテーション(午前の部)
- ⑩企業とNPOとの協働を考える戦略会議
- ⑪環境教育とESD(持続可能な開発のための教育)の関係性を探る
- ⑫環境教育と地産づくり
- ⑬環境教育仕事塾
- ⑭行政との連携を考える
- ⑮大鼓で太古に退行するぞ!
- ⑯木から樹を知る方法 ~木材をIPにいかす~
- ⑰セルフガイドで使えるしかけ展示のモデルをつくろう
- ⑱50分プレゼンテーション(午後の部)
- ⑲自然への感動を生み出し、ライフスタイルの転換を促す  
科学的知識の伝え方

⑳感性?科学?どっちのインタープリテーションショー

【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ

②環境質問 ~答えのない問題~

③ロシアからやってきた冬鳥を探してみませんか

④清里ミニガイドツアー

⑤清泉寮 朝さんぽ

■環境ショート映像作品上映会

■今後の戦略会議

■スライドプレゼンテーション

### (社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2007(通算 21回)

■日時:2007年11月17日(土)~19日(月)

■参加人数:230人

■主催:社団法人日本環境教育フォーラム

■主管:財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力:山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援:環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■省庁プレゼンテーション

■全体会:「生物多様性」基調講演

・第3次生物多様性国家戦略が目指すもの

・企業が取り組む生物多様性保全

【ワークショップ】

- ①「生物多様性」の見つけ方・伝え方  
~自然体験活動を、生物多様性保護の教育活動に結びつける実際の方法~
- ②行政との協働を考える
- ③学ぶ環境としてのコミュニケーション ~GEMS とゴードンメソッド~

- ④食育コミュニティをつくろう!
- ⑤どこでもインタープリテーション! ~グッズ展開型 IP~
- ⑥関西発! これからは日本的でいいこう!!
- ⑦新型の企業研修を応用したスタッフ研修ゲーム  
スピード・ソリューション~自然学校版~
- ⑧企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑨ツリークライミング? 樹上の世界から学ぶこと
- ⑩50分プレゼンテーション
- ⑪企業と環境NPOとの協働を進める戦略会議
- ⑫ESDを広める人のための「ESD入門講座」
- ⑬環境教育基礎講座
- ⑭生物多様性と環境教育について
- ⑮科学と環境教育 自然体験からライフスタイルの転換へ  
~ヤマネのプログラム体験を通じて~
- ⑯メディアと自然学校
- ⑰環境経営戦略ゲーム体験会
- ⑱体験型展示物を評価しよう
- ⑲エコツーリスト予備軍を探せ・つかめ・そして楽しめ!
- ⑳障害者と共に楽しみ・学ぶ森林環境教育
- ㉑やってみよう!! 体感 ツリークライミング®の世界
- 【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ  
②センス・オブ・ワンダーを楽しむ散歩  
③清里ミニガイドツアー
- 今が旬の活動事例紹介
- スライドプレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

#### (社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2008(通算 22回)

- 日時: 2008年11月15日(土)~17日(月)
- 参加人数: 192人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/  
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会: 「日本型環境教育の知恵 出版記念」~日本型環境教育とは~
- 【ワークショップ】
- ①科学と環境教育 ヤマネに学ぶエコロジカルな暮らし方
- ②生き物との共生について ~どんな共生があるのか~
- ③環境教育&ESDを”広げる×深める”政策を考えよう
- ④お互いの関係を作るコミュニケーションスキル
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ!
- ⑥エコとエネをつなぐ環境教育を考える
- ⑦森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑧環境教育を評価する「環境教育を棚卸しましょう」
- ⑨企業・NPO・学校の連携による環境教育を考える
- ⑩企業のための環境NPOカタログ編集会議
- ⑪どうする!《限界集落》またの名は《上流社会》
- ⑫科学と環境教育総集編 科学と環境教育の関わりを定義する
- ⑬オオバコずもうで勝つ方法! 理学系研究室の自然体験
- ⑭川遊びのルールを広めよう
- ⑮日本型、日本的を考える ~日本の自然観という視点~
- ⑯地球環境カードゲーム マイアースを遊び尽くす
- ⑰障害者と共につむぐ環境教育の企画をつくる!
- ⑱森づくりのための戦略会議 ~行政・企業・NPOの協働~
- 【早朝 WS】 ①砂鉄から鉄を作ろう! 柏崎の製鉄遺跡と自然のかかわり  
②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー  
③清里の森で宝物発見  
④ロシアから渡ってきた鳥と出会しましょう  
⑤清里ミニガイドツアー
- 環境教育プレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

#### (社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2009(通算 23回)

- テーマ: 「生物多様性」~環境教育の役割~
- 日時: 2009年11月14日(土)~16日(月)
- 参加人数: 193人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/  
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会  
・基調講演「生物多様性」とは何か? 行政・企業・NGOから  
・事例紹介「生物多様性 私はこう伝える」  
・全体ディスカッション
- 【ワークショップ】
- ①自然体験型環境教育基礎講座
- ②多様な生物の声を聴く~全生命の集いワークショップ~
- ③科学的な視点を活かした環境教育のプログラム作り
- ④企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ! Part2
- ⑥風が吹けば罌壺が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑦パーマカルチャーと環境教育
- ⑧幼児~小2に伝える生物多様性 ~生物多様性の形を探る~
- ⑨ビジターセンターを運営側から考え創る方法
- ⑩あなたにとって、生物多様性って何?
- ⑪生物多様性に焦点を当てたプロジェクト・ワイルド体験
- ⑫人間界に多様性は確保されているか
- ⑬日本の森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑭どうプログラム化しよう? 自然学校の「エネルギー」
- ⑮風が吹けば罌壺が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑯日本的、アジアの自然観を整理し、環境教育に活かす
- ⑰エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part2
- ⑱事故防止~注意を促すだけでいいの? 実践的予防安全法
- ⑲トランジションタウンとは何か? 都留での試み
- (注) ⑦川遊びを始めよう! ~川の安全管理トレーニング~ は、  
都合により中止
- 【早朝 WS】 ①生物多様性を映像で感じよう ~いっしょに生きる道~  
②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー  
③ゼロからの火おこし術
- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

※2010年6月 公益社団法人への移行認定を取得、  
公益社団法人日本環境教育フォーラムへ。

---

# 1 日目

## 開会式・全体会 1

---

### 開会式

司 会 : (公社)日本環境教育フォーラム理事 川嶋 直  
開会挨拶 : (公社)日本環境教育フォーラム会長 岡田康彦

### 全体会 1 「いのちのつながりを伝える ～私たちの役割は」

司 会 : (公社)日本環境教育フォーラム理事 中野民夫

#### ◆そうだったのか！COP10 超入門

(公社)日本環境教育フォーラム理事/ワークショップ企画プロデューサー 中野民夫

#### <基調講演> 「COP10 で何が決まり、何が動くのか」

##### ◆生物多様性条約第 10 回締約国会議の結果

環境省自然環境局生物多様性地球戦略企画室長 鳥居敏男氏

#### <提案> 「いのちのつながりを伝える『教育とコミュニケーション』の役割」

##### ◆生物多様性保全に果たすESDの役割

(公社)日本環境教育フォーラム理事/立教大学 阿部 治

##### ◆What is CEPA??

生物多様性条約(CBD)市民ネットワーク 川廷昌弘氏

#### <取組紹介・全体ディスカッション>

##### ◆環境省におけるESDの取組について

環境省総合環境政策局環境教育推進室 増井久輝氏

# 開会挨拶

## (公社) 日本環境教育フォーラム会長 岡田康彦

この度、新しい公益法人に認定されたことを機会に、北野先生から会長をバトンタッチ致しました、岡田でございます。よろしくお願ひいたします。

日本環境教育フォーラム(JEEF)は、任意団体から始まって、社団法人になり、今年の6月1日に公益社団法人になりました。それだけ、日本環境教育フォーラムのこれまでの実績が評価をされたということだと思いますし、そのこと自体は私たちみんな仲間として集っていただいている皆さん方の活動があればこそそのことであると思っています。

そう申しますのも、少し硬い話になりますが、JEEFは社団法人の段階で、特定公益増進法人になりたいということで、手をあげて参りました。特定公益増進法人というのは、税法上の言葉で、簡単に言うと、寄付金を企業や個人からもらう場合に、出す側が別枠で損金経理できる対象になることで、それを願っておりましたが、なかなかうまくいきませんでした。この度、新公益法人に認定されたことに伴いまして、自動的にそちらは手続きさえとれば、今後は特定公益増進法人としての扱いを受けられるということになったわけでありまして。そういう意味でのご褒美も、おかげさまで頂戴しているということです。それをまず、ご報告いたします。

我々JEEFは、それぞれの社会的役割で、こういうことを自分たちでやろうじゃないかということで活動しているわけですから、ご褒美がほしくて頑張っているわけではないのですが、それでもたまにこういうご褒美をいただける時には、素直に喜んで良いのではないかと思います。

先月COP10が名古屋で開かれました。これも今から12年程前になりますが、名古屋が50数億円かけて既に土地を取得し

いた藤前干潟の埋め立てを止めて、この際保存にまわろうということを決めました。それが結果的に今回のCOP10の誘致にまで繋がって、そのCOP10の最中にも、エクスカージョンで藤前干潟に案内したり、名古屋議定書や愛知ターゲットができたという形で、名古屋市としては、それもある意味ではご褒美だったのだらうと思っています。以上でご褒美の話を終わりますが、もう一点だけ話します。

今回は、56%の方が初めて清里ミーティングにいらした方だと聞いております。それぞれの皆さん方の関心事項や、これまでの環境教育、あるいは自然体験学習に対する取り組みのキャリアや姿勢というものが、だいぶ違う可能性があります。それだけに、皆さん方でこの場を使って、よく先輩方の話も聞いていただく、あるいは経験豊かな人は初参加の方の相談にのるという形で、積極的に交流してください。会の運営が、かつてのように、仲間社会のお互いが苦勞していることの共通意識を持つたり、みんなで励まし合ったりというだけではない、もうひとつ若い人達に対するアドバイスや、勇気を持って新たな取り組みのきっかけの場にも、是非してもらいたいものだと思います。そして、初回の参加をしていただいた方々が、来年も再来年も引き続き、ご参加いただけるよう、お願ひをして挨拶とします。ありがとうございました。



# 司会

## (公社) 日本環境教育フォーラム理事 川嶋直

このミーティングは、1987年に『清里フォーラム』として始まりました。翌年から『清里環境教育フォーラム』として開催されるようになり、1992年に日本環境教育フォーラムができてから『清里ミーティング』と呼ばれるようになりました。1987年の1回目から数えて今回で通算24回目の開催となります。今回もたくさんの方をお迎えすることができました。

このミーティングは様々な方のご支援、ご協力の上に成り立っています。今年初めての試みとして、5つの企業様からご協賛を頂くことができました。今回その5つの全てのご協賛の企業様からご参加頂いております。この場を借りて、ご紹介させていただきます。

アサヒビール株式会社の高橋様、J-Power 電源開発株式会社の藤木様・南様・小林様、東京電力株式会社の大曾根様・櫻井様・緒方様・湯浅様・吉田様、株式会社日能研の高木様・武石

様・岡様・野邊様、株式会社損害保険ジャパンの福井様、ありがとうございます。以上の5社の皆様からご支援を頂いて、開会にこぎつけることができました。

それから、このミーティング開催にあたりまして、環境省、文部科学省、国土交通省、経済産業省、林野庁、山梨県、日本環境教育学会から、ご後援を頂いております。今回は環境省から6名の方にお越し頂きますが、到着されている鳥居様、番匠様、岡部様、よろしくお願ひします。鳥居様には、この後の全体会での基調講演をお願いしております。交通事情のため後ほ



ど増井様、井上様、小池様が到着されます。

紹介ばかり続きますが、日本環境教育フォーラム(JEEF)の理事・事務局(ミーティングの主催事務局でもあります)、ミーティングの開催現地事務局(キープ協会)、そしてボランティアの皆さんをご紹介しますと思います。

この名札ですが、参加者の皆さんは白い名札です。JEEFの

理事はピンク色の名札です。今年6月、公益社団法人になる時に理事の入れ替えをしまして、これまで理事を務めて頂いた元理事は水色の名札、JEEF事務局は黄色の名札、KEEPスタッフは緑色のスタッフジャンパーを着ています。今回は新旧16名の理事が参加しておりますので、簡単にご挨拶をいたします。

## JEEF 理事の紹介・挨拶

### 岡田康彦理事：

私は先ほどご挨拶をさせて頂きました、会長の岡田です。私からも、今回新しくご協賛して頂いた各社の皆さん方に、遅ればせながら御礼を申し上げます。ありがとうございました。

### 阿部 治理事：

設立時から理事をしております、立教大学の阿部です。よろしくお願いします。

### 福井光彦理事：

損保ジャパン環境財団の福井と申します。JEEFさんとは、「市民のための環境公開講座」というのを丸18年、ご一緒させて頂いております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

### 安西英明理事：

本業は日本野鳥の会でございます。今日は星空を見ながら宇宙と生物多様性を考えよう企画していて天気が心配ですが、星が見えたら、アンドロメダギャーナの230万年前の光が届く予定でございます。よろしくお願い申し上げます。

### 北野日出男理事：

公益社団法人の新理事になりました、北野と申します。1997年に、理事長を仰せつかって7年間働かせてもらい、その後6年間は会長職を務めさせてもらいました。長い間ありがとうございました。公益法人になったところで、私は前からJEEFを脱皮して、早く若い人達を中心になるようにと申し続けておりましたので、会長という声もあったのですが、この際やはり辞退申し上げて、より若い岡田会長さんに引き受けてもらうことになりました。今後とも宜しくお願いします。



### 中野民夫理事：

中野民夫と申します。普段は会社員、博報堂に勤めながら、大学で教えたり、ワークショップ、ファシリテーション、参加型の場作りにこだわって、人と人、人と自然をつないだりする仕事をしております。後ほど、進行役をさせて頂きます。よろしくお願いします。

### 佐々木豊志 元理事：

元理事のくりこま高原自然学校の佐々木です。東北から参加する方々が少なくてちょっと残念ですが、東北から参りました。東北は林業や農業がベースになるので、そういう人達の声を聞いてほしい、森林を元気にするというので、今回は、バイオマスエネルギーについてのワークショップを明日の午後やります。よろしくお願いします。

### 佐藤初雄 元理事：

元理事の国際自然大学校の佐藤と申します。今はCONE(NPO 法人自然体験活動推進協議会)の代表理事も務めております。よろしくお願いします。

### 若林千賀子 元理事：

元理事の若林と申します。若林環境教育事務所を主宰しております。JEEFでは自然学校指導者養成講座という人材養成を担当しております、今年11期生養成中です。修了生も含めて何人かここにいらしています。11期生は就職先を探していますので、是非皆さんよろしくお願いします。



# 1 日目 全体会 1

## テーマ「いのちのつながりを伝える」～私たちの役割は～

司会：(公社)日本環境教育フォーラム理事/ワークショップ企画プロデューサー 中野民夫

今回の全体会は「いのちをつなぐ環境教育」という大きいテーマが掲げられていますが、環境教育、そして地域のことに関わる我々に非常に大きな影響のある、COP10 という会議が名古屋で10月に開催されていました。そこに世界の179か国もの人が来たそうで、歴史に残る、名古屋議定書や愛知ターゲットなど、いろいろなことが決まっているようです。

今日はそのCOP10、環境教育、そしてこれからの普及啓発、そのあたりにつながる話を最初の全体会の中で4人の方にご発言頂いて、その後、参加者同士で話し合う時間を少し持とうと思っております。

流れとしましては、最初にこのCOP10に関する業務を主管してらした、環境省の鳥居さんから基調講演を、それから、提言ということで、ESDの役割について阿部理事、CEPAというこれからの

広報・普及啓発・教育に係るような話について川廷さん、そして取り組みの紹介ということで、+ESDプロジェクトについて環境省の増井さんにお話しをして頂きます。

今から環境教育の場でCOP10について話が始まりますが、実はそんなにCOP10のことを知らないという方もいるのではないかと、最初に僕は入門のスライドを考えました。これを池上彰さんに学ぼうという感じでやってみたいと思います。



## そうだったのか！COP10 超入門 ～3つの数字で、3分でわかる～

COPと言っても、コップが10個というわけではありません。これがまさか印刷されていると思わなかったもので、全然つかみとれないですよ(笑)。COPで検索するとアメリカ映画はいろいろありますね。ロボコップとかそういうわけでもありません。じゃあCOPって何なんですか？フルで言える人、どれくらいいらっしゃるでしょうか？COPって何でしょう？Conference of the Parties のことで、これは国際条約の締約国会議という意味です。

何かCOP15とかCOP16とか、COP10とかいろいろ聞かれないかと思っている方も多いと思います。15とか16というのは、気候変動枠組条約、温暖化を何とかしようという条約ですね。COP15は昨年デンマークで開催され、COP16はメキシコでもうじき始まるというのが、温暖化の方のCOPです。

これから私たちが話そうとしているCOP10は、生物多様性条約(Convention on Biological Diversity)の10回目の締約国会議です。共に、1992年の有名なリオの地球サミットで生まれてきた、という兄弟関係にあるわけです。

### —3つの数字 「3」「10」「193」—

3つの数字で語ろうという、その3つとは何でしょう？「3」と「10」と「193」でお話したいと思っています。

### —「3」—

まず「3」についてです。生物多様性って何？いろいろな説明が

中にも、「遺伝子」の多様性という同じ種類の中にもいろいろなバリエーションがあります。同じ親から生まれた人間の兄弟も、ずいぶん違いますよね。種の多様性を支えている遺伝子の多様性がある。これをまた養っているのは、「生態系」の多様性があるからだという、この3つの多様性ということが、よく言われます。

もう一つ「3」にはありまして、この生物多様性条約の目的ですね。1番目が、生物多様性の保全。生物種を生態系と共に守っていきこうというのが一つです。2番目が、生物多様性の構成要素、それを持続可能な形で利用していきこう、木材にしろ、何にしろ、持続可能な利用ですね。3番目が、遺伝資源の利用と、利益の公平な配分、ABSと言われるものです。この3つが、生物多様性条約の目的なのです。

この3番目のABS、よくわかりません。Access (to genetic resources) and Benefit Sharing ということで、遺伝資源の利用から生じる利益の公正かつ公平な配分・・・これでもよくわかりません。遺伝資源とは何でしょう。例えば、マラリアの特効薬キニーネは、かつてインカのキナという樹皮から来ているそうですし、癌の特効薬がマダガスカルの日々草から来たり、最近のインフルエンザに効くタミフル、これは中国原産の八角というものから来たりします。これは多くが途上国にあって、それを先進国が利用しているという形で、最近、途上国からは、先進国が一方的に持って行ってしまおう、これは海賊行為であるということで、この間にルールが必要だとずっと言われていたわけです。

これがなかなかできなかったのですが、やっと出来たんですね。それが名古屋議定書：Nagoya Protocol on Genetic Resource Use、これは画期的なことなのです。決まった名古屋の名前も世界に残りました。

#### — 「10」 —

今度は「10」です。10 というのは 10 回目の会議ということです。1 回目は 1994 年のバハマでした。9 回目は 1998 年にドイツのボン、だいたい 2 年おきに開催しています。この次は 2012 年にインドで開催、ということが決まったわけです。

ここでもう一つ大事なのが、第 6 回の 2002 年オランダのハーグでの開催で、2010 年目標というのが採択され、今年はその節目だったのです。その 2010 年目標というのは、「締約国は、現在の生物多様性の損失速度を 2010 年までに顕著に減少させる。」…何かわかったような、わからないような、非常に妥協の産物でもありますから、顕著に減少させるってどういうことなのかよくわからない所もあって、ほとんど全く達成されなかったのです。そして、この 2010 年を越えた、「ポスト 2010 年目標」を作るというのが、今回の COP10 の課題だったわけです。そして、これがまとまったということです。これが新戦略計画、愛知目標（愛知ターゲット）です。後ほど、鳥居さんからお話が聞けると思います。

## ＜基調講演＞

# 生物多様性条約第 10 回締約国会議の結果

環境省 自然環境局 自然環境計画課 生物多様性地球戦略企画室長 鳥居敏男氏

皆さん、こんにちは。環境省の鳥居でございます。ちょうど昨年もこの清里ミーティングにお邪魔をして、生物多様性とは何かとか、今回の COP10 の紹介もさせて頂きました。それから一年あつという間に過ぎまして、うまくまとまったということでここに立たせて頂くのは、本当に嬉しく思います。



今日は 15 分間位と限られた時間でございますが、COP10 で何が決まって、今後どうなるんだという話を簡単にさせて頂ければと思います。

皆さんお手元のフォルダの中に COP10 のピンバッジやシールなどを入れさせて頂きましたが、COP10 のロゴマークでございます。真ん中に人間の親子を配置して、その周りに地球のいろいろな生きものを配して、それを日本の伝統的な折り紙で表したということで、人と自然の共生というものを次の世代に引き継いでいくんだよということを表現しています。スローガンが、「Life in

#### — 「193」 —

さて、最後の「193」は、生物多様性条約の加盟国の数です。192 の国と一地域（EU27 カ国）、すごいですね。世界最大の条約で、国連に入っている国のほとんどが入っていますが、今回来たのは、179 カ国です。それにしてもすごいですよね。

国際会議場には僕も行きましたが、本当に別世界。後ろにはずっと同時通訳ブースがあり、アラビア語やロシア語の通訳が、全部フルで動いていました。だけど問題は、アメリカが批准していないということです。困ったちゃんですね、アメリカは。そして、来年から国連の生物多様性の 10 年がほぼ始まるということが今回の話から決まっています。

それから、現在進行中の「国連持続可能な開発のための教育（ESD）の 10 年」とのいろいろな重なりや、相乗効果も出てくるだろうという話が、我々関係者から非常に多く出てきています。後ほどお話がある、+ESD というのも絡んでくると思います。そしてまた、こういった大事な問題を広めていく時に、コミュニケーションや教育、普及啓発などをまとめて CEPA (Communication, Education, and Public Awareness) と呼び、このことがこれから非常に大事だと言われています。

これらは我々の世界だと思います。ですので、さあ、われらの出番だ！さあみんなで、いっしょに、193！

Harmony, into the Future” 「いのちの共生を、未来へ」 つないでいこうということです。

#### — 生物多様性条約第 10 回締約国会議 (CBD-COP10) —

生物多様性条約につきましては、先ほど中野さんからお話がありましたので、詳しい説明は省略します。この条約の基に、カルタヘナ議定書というのがあります。これは、遺伝子組換え生物が国境をまたいで移動する際、輸出入の際の取り決めをしているというものでございます。COP10 は 10 月 18 日～29 日まで 2 週間ありましたが、実は今回、COP10 の前に 5 日間、カルタヘナ議定書第 5 回締約国会議、これは、MOP (Meeting of Parties) と言って、その会議がございました。今日は、時間もありませんので、MOP5 の説明は省かせて頂きます。

COP10 には、179 カ国とそれから国際機関、NGO、アメリカはもちろん条約には入っていないのですが、オブザーバーとして参加をしたということで、この会場にも代表団が来ておりました。トータル参加者数が 13,000 人以上、これはどうカウントしたかという、この会場の周りにはフェンスが張られていて、セキュリティエリアがあり ID カードを取って中に入るのですが、その ID

を取得された方が 13,000 人いたということです。これには代表団以外にも、スタッフの方、報道関係の方も含めての人数でした。それから、いろいろな NGO の方々、国際機関、団体・機関が MOP も入れて 3 週間の間に、様々な公式サイドイベントを約 350 行い、これが今までの COP の中で一番多かったとされています。

関連するイベントですが、公式サイドイベントとは別に、ここ以外の会場もありまして、国会議員の会合、自治体の会合、子ども COP10 などいろいろな会合が開かれたり、この会場の周辺で、地元の支援実行委員会が主催するブース、テント、これが 180 くらい出まして、3 週間の期間中、118,000 人以上の方々がそこを訪れたということでございます。そういう一大イベントだったわけですが、今日は時間の関係もありまして、先ほど紹介のあった 2 つのポスト 2010 年目標と ABS について、そして今後どうということが起こるのかということについて、簡単にお話をしようと思えます。

### 一ポスト 2010 年目標(愛知目標)

#### / 長期目標(Vision)・短期目標(Mission) -

このポスト 2010 年目標は「愛知目標」という言い方でまともになりました。2002 年のオランダ・ハーグでの COP6 で、“2010 年までに生物多様性の損失速度を顕著に減少させる”という目標が定められたのですが、今年の 5 月に生物多様性条約事務局から発表された、生物多様性の地球規模での健康診断：GBO の第 3 版で、この目標は失敗した、達成できなかったということが明らかになりました。お手元の資料のグラフのとおり、生物多様性が損なわれていくスピードを緩和する、和らげる、という目標が達成できず、地球規模では今でも生物多様性の損失が続いていて、これをどこかで底を打たせて、むしろ回復させることが重要であるというものです。

生物多様性が減るとか、それを回復させるというのは一体どうということなのだろうかと言うと、先ほど中野さんから、生物多様性を 3 つの要素、生態系や種や遺伝子レベルの多様性と言いました。もちろん生きものというのは、種が絶滅してしまうと二度と回復できないのですが、総合的に考えて、例えば森林を回復させるとか、絶滅要因を取り除いてやるとかして、全体として生物多様性の状況を回復させていこうというのが狙いです。

長期目標(Vision)では、日本も 2010 年 1 月に提案をしたのですが、そこには人と自然の共生というフレーズが盛り込まれたところでした。

そして短期目標の 2020 年、これがいわゆる Mission と言われる部分ですが、ここは実は意見が大きく分かれました。EU(欧州連合)は、生物多様性の損失を 2020 年までに明確に止めるということ Mission に掲げるべきだという主張をしたのに対して、途上国は、まだまだ自分の国の開発が重要なので、2020 年までに止めるなどと言うのは反対である。もしそれを書くのであれば、今までの途上国支援のオーダーを 100 倍にすべきであるという主張があったということです。これがどう決着がついたかということとは後で説明するとして、途上国と先進国、実はそんなに簡単なものではないのですが、そういう対立があったということです。

先ほど少し触れました GBO 3 (Global Biodiversity Outlook 3, 地球規模生物多様性概況第 3 版)では、今後 10 年間の人類の取り組みというのが、我々の子供や孫、将来世代を決定づけていく、非常に重要な期間だということを言っています。そういうことから、NGO からの提案を受ける形で、「国連生物多様性の 10 年」というものを今回の COP10 で日本が提案をして、採択されました。これを 2010 年 12 月の国連総会で是非決定してもらおうということで、今、動いているところでございます。2011 年からの今後 10 年間で、ちょうどこの短期目標の目標年に重なりますので、国連システム全体で、つまりこの条約に入っていないアメリカも含めて、取り組んでいこうということが狙いでございます。

### 一ポスト 2010 年目標(愛知目標) / 個別目標(Target) -

先ほどの短期目標(Mission)を達成するために、20 の個別目標(Target)というものが、定められました。環境教育という点では、特に目標の 1. 人々が生物多様性の価値と行動を認識する、というあたりが関わってくるかと思いますが、目標の 1・2・3・4 あたりは、いろいろな社会への主流化、浸透、といったことがこの目標の中身でございます。目標 5 以下は、自然との関わりが一番深い第一次産業をどのようにしていくのかとか、あるいは保護のための施策をどのようにしていけばいいのかとか、そういったことがずっと続いているわけですが、例えば目標 11 の陸域の 17%、海域の 10%が保護地域等により保全される、という具体的な数値が入った目標というのは、非常に議論が分かれて、最終日までこの数値を決めるのがもつれこみました。なぜ陸域が 17%なのか、中途半端な気がします。現行の 2010 年目標では 10%だったのですが、これは 15%とか 20%とかいう意見の間をとっている、まさに妥協の産物の数字である、とそういうこともございますが、とにかくこういう形でできました。

### 一遺伝資源へのアクセスと利益配分(ABS) -

ABS についての論点でございますけれども、先ほど中野さんからご説明がありましたが、要は生物からいろいろな遺伝資源というのが利用されているわけです。例えば、医薬品、化粧品などに使われているのですが、先進国の企業が途上国から勝手に持ってきて、それを使って製品、医薬品などを開発して、莫大な利益を得ている。それを途上国の方にも還元するべきである、ということが生物多様性条約の 3 番目の目的に入っていて、1992 年にこの条約が採択されてからずっと、その配分のルール作りというのが議論されていたのですが、ようやく今回、それが決まったということです。

但し、ここに至るまでには、いろいろな大きな論点、いわゆる溝がございました。その溝の一つを紹介いたしますと、アフリカ諸国などからは、その昔先進国が持っていたものから得られている利益を植民地時代までもっと遡って還元すべきである、という批評がありました。しかし、遺伝資源を例えば医薬品に開発するまでは、いろいろな研究だとか、もちろん先進国なりの努力があります。そういうものを派生物と言っていますが、遺伝資源から抽出したタンパク質や、ある種の酵素、それをさらに合成して

得られた医薬品・製品など、そうして派生していった物から得られる利益を、どこまで利益配分の対象にするのか、あるいは、その無断で持ってきた遺伝資源を誰がどうやってチェックして、罰則をかけるのか、非常にテクニカルな部分での議論もございました。それを詳しくご説明する時間が無いのが残念です。

#### —COP10における主要課題と議論の結果—

そういう課題がある中で、今回の COP10 で何が決まったのか、というのを簡単にご紹介いたします。

##### ①新戦略計画(愛知目標)

新戦略計画(愛知目標)は、長期目標では日本が提案をした「自然と共生する社会」という大きな目標ができ、短期目標では「生物多様性の損失を止めるために効果的かつ緊急な行動を実施する」ということです。その損失を止める期限というものを、2020年と主張していた EU が鉾先を納めて、そこまでは明確には書かなかったのですが、むしろ、こういうことを2020年までにしっかりやっていこうという、20の個別目標が採択されました。個別目標の例示として、こういった保護地域の免責なども、決まったということになります。

##### ②遺伝資源の取得と利益配分(ABS)に関する名古屋議定書

2つ目の ABS ですが、これも最終的には、遡及適用というものは、認められなかったわけですが、ただ、そういう途上国への ABS の枠組みが適用されるような資金メカニズムを今後、検討していきましょうということが、議定書の条文の中に明確に入りました。

それから遵守を確保するためのチェックポイントとして、これもややこしいのですが、ある企業が遺伝資源の提供国から遺伝資源を持ってきて、例えば日本なら日本でそれを開発した際に、それが提供国の法律をきちっと守って開発したものなのかどうかをチェックする仕組みを設けなさい、ということになりました。当初は、例えば、特許の出願時に、それをチェックしましょうとか、医薬品であれば、製造開発認可の際に、それをチェックしましょうとか、いろいろな例示が書かれていたのですが、その例示は今回全て落ちました。但し、その代わり、利用国は少なくとも一か所のチェックポイントを設ける、これが義務付けられました。ただこのチェックポイントをどのように置くのか、何をどうチェックするのか、というのはそれぞれの利用国の状況に応じて決めていこうと、裁量の余地が残ったということでございます。

それから派生物の問題。先程どこまでその利益対象の配分にするのかというのを少しご紹介しましたが、これはもう遺伝資源を利用する人と、元々その権利を有している人の両方で、契約を結んで決めてください、ということで、派生物の範囲までは、この議定書の中では明確に決めなかった、ということで落ちております。この議定書は本当に紙一重で、正直良く決まったなというのが私の感想でございますが、とにかく、これを実際に運用していくということが、今後の大きな課題になるのかなと思います。

##### ③資金動員戦略

それ以外にも、今回の COP10 では資金動員戦略、これも大きな

課題でございまして、途上国にどのように資金を回していくのか、ということです。ここでの大きな論点は、目標となる金額、あるいはそれを測る物差しを決めるべきではないか、という途上国に対して、そこまでは決められないという先進国で意見が対立していたのですが、今回は具体的な目標金額までは決まりませんでした。例えば ODA の総額とか、そういったイメージなのですが、今後は、しっかりとした指標ができるなどの条件で、COP11 の際に決めようということになりました。

##### ④国連生物多様性の10年

これは先程ご紹介したもので、今回は第 65 回の国連総会でこの 12 月までに決議に向けて勧告する決定が下されました。

##### ⑤IPBES(生物多様性版 IPCC)

IPBES も非常に重要で、これは生物多様性版 IPCC(気候変動に関する政府間パネル)と言われるものです。少し名前が長いですが、生物多様性と生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム、と呼ばれるものです。どういうことかと言いますと、生物多様性に関するいろいろな研究等がありますが、それがきっちり施策の決定に活かされていない。温暖化の流れでは、スターン・レビューというものを皆さんお聞きになったことがあると思いますが、例えば二酸化炭素の濃度がこれだけ上がると、気温がこれだけ上がって、海面がこれだけ上がって、これだけ経済的損失が出る、それが今これだけ手を打っておけば、これだけの損失を防げる、そういったモデルと申しますか、そういったことを生物多様性の方でもある程度やっていかなければいけないという声が近年高まりました。そういう機関を作ろうということは UNEP(国際連合環境計画)の会議で決まったのですが、これをさらに国連総会でも促すような決議をしようということで、COP10 でも決定をしたというものでございます。

##### ⑥SATOYAMA イニシアティブ

これもどこかでお聞きになったことがあると思います。日本からの今回の提案で、森林や農地、農業、林業、場合によっては漁業などを通じて、持続可能な形で、自然と人が共存する形で、生態系サービスを持続的に受けていこうということを世界的に進めましょう、というものでございます。

##### ⑦民間参画の推進

これもどちらかと言うと、日本の場合は経済界中心に、今「生物多様性民間参画イニシアティブ」というのができまして、企業活動の中に、生物多様性をどのように入れて統合していくのか、ということを考える枠組みもできました。

##### ⑧自治体の取り組みの強化

これについては、今回、「生物多様性国際自治体会議」というのが開かれまして、日本国内からも多くの県や市の参加がありました。せっかくそういうフォーラムができましたので、今後とも続けていこうということで、自治体の役割を確認して、しっかり取

り組んでいこうというものでございます。

## —COP10 を踏まえた今後の課題と対策—

### ■課題

COP10 を踏まえた今後の課題でございます。先程、途上国と先進国の対立というような言い方をしました。あまり物事は事項ごとにそう単純ではないですが、途上国と先進国の溝というものはありまして、やはり生物多様性を地球規模で考えていくうえで、南北問題というのは決して逃れられない話です。

それから、まだまだ社会への浸透が少ないということで、いろいろな分野、もちろん教育関係もそうですが、経済活動、地方行政、そういったものへ浸透させていく、主流化させていくということが重要です。

そして先程の IPBES でもご紹介しましたが、科学というものをきちっと政策へ反映していくシステムを作っていく必要があるということです。

### ■対策

今後の対策ですが、国際的な取り組みとしては、日本はこれから2年間、次のインドでの COP11 まで議長国という役割を果たします。そういうことで途上国の支援をしっかりとしていく、その1

つとして SATOYAMA イニシアティブというものがあると思います。それから ABS に関する名古屋議定書の運営体制を、これはまだできたばかりですので、これから軌道にのるまでしっかり支えていく必要があると思います。それと IPBES の設立ですね。

国内の施策は、今回の新戦略計画が定まりましたので、これを受けて生物多様性の国家戦略、これは実は 2010 年 3 月に 1 度改訂していますが、また 2 年くらいかけて改訂作業に取り掛かっていくということでございます。併せて保護区域、国立・国定公園の見直しをしていこうとか、海域の保全の強化、希少野生動植物の保全、そして経済界・自治体・NGO などの各主体による取り組みを促進していこうというところでございます。

### 司会(中野) :

鳥居さん、ありがとうございました。ものすごくシンプルにポイントをまとめていただきました。今、皆さんのお手元にある資料はすごく貴重ですよ。COP10 は何だったのかという時、その資料を見ながら話したらもうバッチリです。

今度は JEEF の創立以来の理事で、立教大学の阿部治先生から、ESD の役割について話していただきます。

# 生物多様性保全に果たす ESD の役割

(公社)日本環境教育フォーラム理事/立教大学 阿部 治

ESD を知らないという方が少なくないようですね。私は国連 ESD の 10 年の提案者でもあるので、その後だいぶしゃかりきになって ESD を広めてきてはいるのですが、まだまだですね。

実は先ほど鳥居さんの発表の中で、この度「国連生物多様性の 10 年」というのが提案されたという話がありました。またそれを進めていくために、私の後に川廷さんからお話がありますが、CEPA(Communication, Education, and Public Awareness)、まさにこれは教育ですね。地域の生物多様性をどう継承していくか、という教育に他ならない。私はこの生物多様性を保全していくための教育、あるいはこの CEPA というのは、ESD そのものと捉えているのですが、そのことも含めて、ESD はまさに持続可能な社会づくりのための教育、学習なのです。

これからまず、私の方から ESD をご紹介し、そして ESD と生物多様性との関わり、さらにそれを踏まえて川廷さんから CEPA の話。それから今、環境省がこの ESD を広めるために非常に頑張ってきています。その一つの大きなエポックになっていくであろう+ESD プロジェクトについてご紹介していただきます。

## —ESD の背景—

まず ESD の背景についてですが、一言だけ言います。持続可能な開発・発展という言葉、これはもう皆さんご存知ですよ。持

続可能な開発とは、「将来の世代のニーズを満たしつつ、現在の世代のニーズをも満足させるような開発」なのだということですが、この“ニーズ”は日本語に訳すと“必要な物、必要物”です。私たちの欲求、欲望は無限ですが、私たちが必要とするものには限りがあります。その視点で、今の世代内、そして次の世代間のことを考えていこう、というのが持続可能な開発・発展ということです。

この持続可能な開発を具体化させようとしたのが、1992 年リオの地球サミット(環境と開発に関する国際連合会議)でした。この地球サミットで、先ほどの生物多様性条約とか、気候変動枠組条約とか、この ESD の基になったことが提案されました。また「アジェンダ 21」という、これから持続可能な社会をどう作っていくか、それを世界で進めていこう、という行動計画が出されました。この「アジェンダ 21」に基づいて、あらゆるステークホルダーが、持続可能な開発なり発展を、自分たちの活動の中心に据えようということが出されたのです。そして世界各国に、それぞれの国の



持続可能な社会の確立、あるいは持続可能な開発を進めていくための戦略を作りなさい、ということをご提案しました。

あらゆるステークホルダーのやるべきことが書かれている「アジェンダ 21」には、また課題についても書かれていました。その第 36 章が教育の項目で、環境教育は「アジェンダ 21」の全ての項目に密接に関係しているとしており、その中身は、持続可能な開発に向けた教育の再方向付けです。つまり、今、世界で行われている学校教育や社会教育、あるいは企業人教育も含めて全ての教育の中心に持続可能な開発をおく、ということが出されたのです。そしてこれを契機に、従来から行われてきた環境教育を、持続可能な開発を中心に据えたものに変えていこうということが提案されました。

このような動きの背景について少しふれておきます。それまで行われてきた地球的課題に関する教育、環境教育、開発教育、人権教育、平和教育などいろいろありますが、これらはそれぞれの課題の必要性に応じて登場した教育です。これらを総称して地球課題教育、あるいはワールドスタディーと呼ばれていますが、1980 年代になりますと、地球環境問題が顕在化してきます。地球環境問題というのは、野生生物の種の減少の問題とか、貧困の問題、ジェンダーの問題、平和の問題など、そういったものがみんな密接に絡んで生じる問題だということが理解されるようになってきました。そうすると、従来行われていた各課題に対する教育というのは、一つのアプローチだけではなく、総合的なアプローチをすることが必要ではないかということが言い出され、例えば持続可能な未来のための教育とか、いろいろな言い方をされるようになってきました。

## 一環境教育から ESD へ

そういった中で、これらの教育課題の統合化のイニシアティブを発揮してきたのが環境教育なのです。日本では 1960 年代から 2000 年代にかけて、環境教育の黎明期→導入期→定着期→発展期、そして 2000 年代に入って、広い意味での環境教育である ESD というものが登場してきました。この環境教育に絡むような、あるいは持続可能性に関わる様々な活動を、自然から社会、地域から地球規模という 2 軸上に落としますと、地域における自然に関わる活動、地域における人間生活に関わる活動、あるいは世界に関わる活動と大きく 3 つ、自然系・生活系・地球系という活動に分けることが出来ます。

かつてはこれらがバラバラに行われていました。自然に関心がある人は自然しかしない、消費者教育に関心のある人はそれしかしない、といった具合でした。それが 1990 年代後半位になりますと、自然系・生活系・地球系が互いに歩み寄っていき、そして、それらの重なり部分、総合系というものが生まれてきます。これは典型的には、学校での総合的学習の時間、企業の CSR、あるいは持続可能な地域づくり、いわゆる環境自治体などがあります。環境自治体といっても、環境だけやっているわけではなく、福祉や健康、新たな産業の創出など全部まとめてやっています。これらが総合系で、まさに ESD の取り組みなのです。

このように、日本の国内でも従来の持続可能性に関わる様々な

教育課題や学習が統合され、狭い意味での環境教育から広い意味での環境教育が出てきた、ということです。今では環境教育は、持続可能な社会の実現に主体的に参画する人材の育成、つまり人と自然、人と人、人と社会との関係の再構築を目的としています。今の関係、つながりではもう自分も他者も持続しない。どういうつながり、関係だったら持続するのだろうか、という新しい関係、ビジョンをイメージして、さらにそのイメージした関係をクリエイティブしていくための知識、技能、行動力、勇気を育てていく、それが環境教育なのだということになってきたのです。

## 一ESD とは

ESD はどういうことかということ、持続可能性に関わる多様な主題である環境や経済、社会、文化などを、人と人とのつながりや、他地域・世界とのつながりの中で総合的にとらえ、互いに学び合うプロセスです。

国連が作った実施計画とか、日本政府が作った実施計画、これは非常に良いです。私たち一人ひとりが世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革することが必要であり、そのための教育が ESD なのだと言っています。私は ESD について話すとき、エンパワーメントや市民教育の視点で話しております。

ESD が登場したことによって、それまで同じテーブルについてこなかった、例えば福祉の人、環境の人、あるいは行政、NPO/NGO、企業、事業者、そういった様々な人々が、自分たちの地域の持続可能性をどう具体化していこうか、そのための学び・教育の在り方はどうしたらよいのだろうか、そういう形で同じテーブルに着くようになりました。つまり、ESD はつなぐ装置なのです。

## 一ESD と環境教育との関係

では、ESD と環境教育との関係はどうなのでしょう。環境教育は、自然環境の保全、つまり物質の循環と生物多様性の保全をベースに、持続可能な社会の構築にアプローチしていきます。ESD は、環境・社会・文化・経済のバランスを考慮しながら、持続可能な社会の構築にアプローチしていきます。でも、自然環境の保全というのが、社会つまり生活・文化や経済のベース、すなわち生態系サービスが私たちの生活のベースなのだということを考えれば、まさに環境教育は ESD のベースでもあるということが言えます。そういう意味で、今 ESD に取り組んでいると言いながら、福祉や国際理解というよりも環境教育が多い、という理由はここにあるわけですね。

ESD は、先程から言っているように様々な課題教育である、平和教育、人権教育など、いろいろあります。それぞれの教育課題には、それぞれが絶対に落としてはいけない目標があります、例えば、生態系の保全は環境教育では落としてはいけないことです。その目標の中で、共通のことがあります。それは「価値観」「能力」「学びの方法」という 3 つの視点ではないかと考えています。これは ESD-J のホームページ(<http://www.esd-j.org/>)に出ていますので、見てください。

「国連持続可能な開発のための教育 (ESD) の 10 年」は、2002

年に日本の NGO と政府によって提案され、2005 年から始まっていますが、それ以前から、様々な活動が行われていました。但し、その当時は ESD として認識されていませんでした。また国連 ESD の 10 年を契機に、新しい活動がたくさん始まってきています。

#### —ESD×生物多様性—

ESD と生物多様性はどう関係があるのでしょうか。そもそも持続可能な開発(Sustainable Development)というものは、自然環境保全(Conservation)、つまり生物資源を持続的に利用していくということと密接に関わっています。生物多様性を意識した ESD といったときに、自然資源の持続的利用という意味で、いわゆる伝承とか、伝統的な智恵、地域の智恵、そういったものを大切にしていくこと、これが非常に重要なのだということです。あるいは、地域の再発見、再評価、地元学、エコミュージアムなどがありますが、自分達の地域がどういうところにあるのだろうか、自分達の地域にどういう生物多様性があるのだろうか、そういったことをきちんと知っていくことが非常に大事だということです。

#### —ESD と CEPA との関係—

国連生物多様性の 10 年がこれから始まっていくという中で、CEPA が始まっていきます。CEPA (Communication, Education, and Public Awareness) については後ほど川廷さんがお話ししますが、皆さんにお配りしたのは生物多様性事務局が、IUCN(国際自然保護連合)と共同で作った CEPA のツールキット、いわゆるガイドブックです。その中で詳しく解説していますが、この CEPA というのは、ここに挙げたコミュニケーション、能力開発、人材育成、普及啓発、教育等々、全部を含んでいます。つまり総合的に見て、まさに人づくりなのだということです。

ESD と CEPA の関係をみると、ESD はほぼ CEPA と同じです。ESD は地域に応じて非常に多様です。しかし、CEPA が加わることによって、生物多様性と人とのつながりの維持という切り口ができた。つまり生物多様性というのが、ESD の切り口になったということですね。これは非常に重要なことです。SATOYAMA イニシアティブは、その視点から具体例として非常に重要だと思っ

ています。

#### —DESJ と DBD との連携・協力—

DESJ の D というのは Decade のことで、10 年間という意味です。ESD の 10 年と生物多様性の 10 年との連携、これが非常に大事だと思っています。両方とも日本が提案したということで、これを協働し、連携して進めていくことが大事です。ESD は、現状では文部科学省と環境省が中心です。生物多様性は、環境省と農林水産省を中心に進めていくというような形です。他にもいろいろ関係省庁があって省庁連絡会とかもあるのですが、それらが連携しながら幅を広げていくということが大事です。つまり相乗効果を出していくということです。

#### —最後に—

皆さんのお手元のファイルに ESD-J の冊子が入っています。ESD-J(NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議)とは、ESD を進めていくためのネットワーク団体なのですが、これも JEEF(公益社団法人日本環境教育フォーラム)から始まりました。ESD-J がプロジェクトとしてやっていますが、ESD-J を通じて生物多様性を進めていく場合に、日本国内だけでなく、アジアも含めた様々な事例を見ても、地域から始めていくことが非常に大事だということが言えます。これからの進め方として、生物多様性を通じた持続可能な地域づくりが、ESD の主要なテーマとなっていくということで、私の話を終わらせていただきます。

#### 司会(中野) :

阿部さんありがとうございました。ESD とか DESJ とか CEPA とかいろいろ頭文字が出てきましたが、今日 1 日通してきつといういろいろ皆さんも理解が深まると思います。

これから CEPA について、生物多様性条約(CBD)市民ネットの川廷さんからお話を伺いたいと思います。川廷さんも会社員なのですが、ここ 1 年以上、NGO 活動にどっぷり入りまして、市民ネットから COP10 の本会議にも色々提案をして、反映させるということもやってきました。では、川廷さんお願いいたします。

## What is CEPA??

### 生物多様性条約(CBD)市民ネットワーク 川廷昌弘氏

皆さん、こんにちは。どうぞ宜しくお願いいたします。今日は、NGO として来ました。普段は広告会社に勤務しており、そもそもコミュニケーションというものを生業にしているのですが、そういった知見も NGO 活動で活かしていこうということで、CBD 市民ネットワークに 2009 年の 1 月に入りました。そこで約 2 年近く活動した成果をご報告いたします。

これは教育に携わる皆さんにとっても、本当に切実なテーマだと思っておりますが、CEPA とは、Communication, Education

and Public Awareness、この 3 つのキーワードが重なった略語になっています。CEPA って一体何ですか?というキャンペーンも国際会議場の中で行った報告をさせていただきます。



## 一生物多様性条約市民条約ネットワーク

### (略称：CBD 市民ネット)一

CBD 市民ネットは、ダブルメガホンという愛称のロゴマークを作りまして、市民に呼びかけ、政府に働きかけるという活動をしてきました。NGO の活動ですので、ほとんど予算がありません。手弁当でやってきた活動で、なかなか皆さんまで行き届いていないかと思いますが、一応これが COP10 における日本のホスト NGO ということで、世界の国々の NGO を迎え入れて活動した団体です。

ホームページ <http://www.cbdnet.jp/> がまだ動いておりますので、もしよかったら見てください。cbdnet.jp 出てきますし、cbd で検索しても多分出てくると思います。国内 100 を超える個人と団体が集まった活動でした。生物多様性、もう待ったなしだということで、先程ご説明された鳥居さんの所と一緒に、お手伝いして作らせて頂いたリーフレットをお配りしています。いわゆる Tipping Point (転換点) を迎えている、ということであります。我々のやり方一つで地球がどうなるかという、本当にもうギリギリの所にきているということ、既に実感できている方は多いと思いますが、やはりそれでもまだまだ危機意識を啓発しなければいけない。環境省さんが危機感を持ってこのパンフレットを作りたい、ということで、これは広告会社としてお手伝いしたのですが、それを借用しております。

## 一生物多様性条約第 13 条一

この根本原因に対処するには、CEPA が欠かせないということで、お手元の資料を見ていただきたいと思いますが、生物多様性条約の第 13 条にこういった条文があります。これは環境省が翻訳されたものを、僕が勝手に意識しております。『生物多様性保全の重要性や保全に必要な行動を理解するため、様々な伝達手段による普及啓発、そして教育授業に取り入れることを推進する』と訳していますが、これは、締約国の義務という形で、shall という言葉で説明されています。

もう一つの方は、『生物多様性の保全、持続可能な利用に関する教育や普及啓発事業の計画で、必要に応じて他国や国際機関と連携する』ということも書かれています。つまりグローバルに展開しようということです。これが条文ですので、これに基づいた活動を我々はしなければいけない。コミュニケーションや教育に携わる者として、これはもう基本です。改めて覚えなければいけないなと思いました。

## 一生物多様性条約における CEPA の動き一

この CEPA は、特に 2000 年の COP5 で大きな決議がありまして、そこから「グローバルイニシアティブ」という活動が始まったようです。それから 4 年前、COP8 の時に「優先行動リスト」や CEPA のツールキットというものを阿部先生も関わっていらっしゃる IUCN-CEC (国際自然保護連合の教育コミュニケーション委員会) で作りまして。それは我々コミュニケーションや教育をやる人間にとって、本当にマニュアルとなっているものです。教科書のようなものが実はあります。すごく分厚いものが今回の COP10

でも配布されましたので、嬉しくもらって帰ってきました。PDF でもダウンロードできるようになっておりますが、また詳しくは別の機会にお話できればと思います。

それから、自然保護の国際条約である、ラムサール、ワシントン、世界遺産などや、あとは温暖化の気候変動枠組の COP です。ね。砂漠化防止条約というのもあります。そこで CEPA というキーワードではないのですが、条文があつて、CEPA の重要性が認識されています。ですから、全ての国際条約の中で、普及啓発や教育が重要であるということは明らかに記載されている、ということでもあります。

## 一What is CEPA??一

先程も出ました CEPA のツールキットの中に、キーワードとなる単語が入っています。コミュニケイトする (Communicating)、つながる (Connecting)、能力開発 (Capacity building)、行動の転換 (Change in behavior)、教育 (Education)、力をつける (Empowerment)、公共 (Public)、普及啓発 (Public awareness)、市民参加 (Public participation)、政策手段 (Policy instrument)、認識・意識 (Awareness)、行動 (Action)、実地の研究 (Action research) という言葉が入っています。これが CEPA だということ、皆さんがやっていらっしゃることを全てだ、というふうにも考えられるのではないかと思います。それがキーワードである CEPA だと認識して頂ければと思います。これについては、また明日の 3.5 時間ワークショップでもやらせて頂こうと思うので、ご興味ありましたらぜひご参加ください。

## 一COP10 直前、CEPA に関する話題提供一

急遽、活動を始めたため、何とか CEPA のことを少しでもわかりやすく伝えようと思って、地元の朝日新聞の名古屋本社や環境新聞さんに取材して頂いた時の記事も、資料に張り付けております。生物多様性条約は「地球市民の生活基本法」だと、僕は勝手に解釈しております。そんな話をしたり、日本の伝統的な知恵というものを、うまく世界でも使っていけるように考えていければいいかという内容です。

## 一COP10 会場でメッセージを発信

### 市民の条約に市民の声を一

それから国際会議場の中で、このようなツールをつくってキャンペーンをしました。お手元にもリーフレットを配布させて頂きましたが、これを COP10 会場で配り、私たちの CEPA の決議文に対してよりよい決議をしてほしい、という想いをここに託して、いろいろな方に配りました。CBD 事務局の方もこれは I know well だよ、いいキャンペーンだねと言ってくれました。フォーラムをやり阿部先生にもそこでお話してもらったり、記者会見も行ったりと、CEPA のこれからの必要性というものを、一生懸命お話してきました。

余談ですが、ジョグラフ条約事務局長も僕の顔を覚えてくれてまして、会場で会うと声を掛け手を差し伸べてくれました。手持無沙汰で申し訳なかったので、このペーパーを渡して、「これは

私が作ったポジションペーパーです。CEPA のことについて私はとても懸念しています。だから是非会議で話をしたいのでよろしくをお願いします。」と下手な英語で言ったところ、まくし立てるようにすごく訛りの強い英語でアドバイスしてくれたもので、さっぱりわからなかったです。あの時、理解できていたら、もっと交渉が楽だったなあと思うのですが、そういう一面もあって、ここからスタートしました。

### —市民の声を届けるロビー活動—

COP10 の開催前は、ここにいらっしやる鳥居さんはじめ、環境省の皆さんも、CEPA は大事だと言って下さっています。私も市民ネットの代表として入っている「地球生きもの委員会」、これは国内の今年の国際生物多様性年の活動の普及啓発を推進するための委員会として、全てのセクターから人が選ばれて入っているのですが、その活動方針の中にも CEPA が重要だと入れて頂いたり、今年だけのためにあるこの委員会も、これからの 10 年に合わせて継続をしていこうと環境省の皆さんも言って下さっているのです。国の委員会としては続いていくということまでは共有できています。つまり CEPA に対して、力強い決議を求めるための日本の体制はとれている、という状況をつくって頂いています。

一方で、CBD 事務局に対しては、市民ネットを通じて直接コンタクトを取りました。会議前に出たドラフト案(素案)というものが非常に弱いので、市民ネット案ではこういうことを考えていますという話をしましたら、「その方向で良いと思う。私たち事務局ももっと強化したいと考えている。」という話を頂きました。また、EU の代表であるベルギーの方が、非常に積極的に CEPA に取り組んでいる、という情報を受けて、その方とランチミーティングなどで意見交換をしたり、いろいろな方と調整をしていきました。

### —市民の声を決議文に反映するプロセスに挑戦！—

これも、ドラフト案という素案がまず出ます。それに対して、市民意見が反映できるというアドバイスを受けていました。ドラフト案がその討議用の文書になり、最後に最終案、最終文書になる、こういうプロセスを踏んで決議というのは進んでいきます。今回の CEPA もこの手順に則って話が進むとわかっていましたので、とにかくワンチャンスにトライしようと動きました。そのために喋れない英語を練習しまして、とにかく決議文に対して意見を述べるペーパーを作ってお話をしました。

10 月 20 日、実際に締約国 20 のうち 15 か国の途上国が発言しました。発言の中身はすごく単純明快です。今年(2010 年)国際生物多様性年は、非常に CEPA を推進するのに良かった。要するに、国民に普及啓発するのに良い機会をもらった。今、日本の政府が提案している国連生物多様性の 10 年は、とてもいいと思う。ついては人的支援と資金供与を要求する、と途上国は言います。とにかく途上国は、この教育・コミュニケーションに関しても人的支援と資金供与を考えています。この途上国の意見の後、僕の発言の前に、先住民族の方が発言しました。先住民の権利をそこにきちんと書いてほしい、と決議文に対して要求しました。

### —2010 年 10 月 20 日 白鳥ホールで NGO 発言を実現—

その後、NGO の発言のチャンスをもらい、あまりにも緊張して、自分が日本の NGO であると言うのも忘れていきなり本文を読んではいきましたが、発言したポイントは次の 3 つです。1 つ目は、その国連生物多様性の 10 年の活動の基礎に CEPA を位置づけ、自然観や文化風習を概念にした行動計画を作っていく事例をつくりましょう、ということ。2 つ目は、その事例を 2 年後の COP11 にみんなで持ち寄って、世界が一体となる CEPA のコミュニケーションや教育のグローバルなコンセプトを作りましょう、ということ。3 つ目は、こういった動きを強めるために CEPA が重要な戦略であるということを引きこんで決議に盛り込んで下さい、というお願いをしました。

### —2010 年 10 月 25 日 CRP (討議用文書) の採択—

その結果、反映された文書の抜粋です。政府や関係機関は、国家、地域、世界レベルで CEPA の活動のための拠点と実行団体を設け……と書いてくれました。こんな文言はなかったのです。皆が自分たちの自然観や文化風習の概念に基づいたグッドプラクティスを持ち寄るための、これは拠点と実行団体づくりであるということです。それから、戦略計画に向けて国連生物多様性の 10 年を積極的に支持する形で、CEPA へ取り込むことを継続して支援しよう、と入りました。もう 1 つ、国際生物多様性年の結果の評価を行うこと、並びに次のインドでの COP11 でその評価を共有しよう、と入ったわけです。決議文であり、まずは枠組み作りということで堅苦しい文になりますが、私がとにかく下手な英語で発言した思いが、どう考えてもこれは反映されたな、と手応えを感じる文書でした。これが CRP 文書、先ほど説明しました討議用文書という形で出てきて、これを 2 つのワーキンググループで会議をして、議長が採決してくれて、松本環境大臣の木槌に打たれる本会議のための文書として作成されることになりました。

その本会議の前に、先住民族の方が発言され、先住民族や地域共同体の活動を支援するようにしようといった文書が 3 か所入っていたのを思い出しまして、それを読んで彼らもきっと喜んでくれるに違いないと思って先住民族の部屋を思い切って訪ねてみました。すると彼らも、お互いに提案したことが文書に入って良かったですねと喜び合い、ぜひ共同声明を出しませんかというお願いをしたら、それは素晴らしい提案だからやりましょうと言ってくれて、素案は僕の方で作成して、先住民族の方がそれを添削するという形をとりました。

先住民族の立場を大事にするということ、みんなでインドでの COP11 に向かって頑張りましょうということ、英語で盛り込みまして、最後に彼らが「戦略計画の目標達成のためには、伝承と CEPA は主要なツールであり、優先されるべき手法です。」と書いてくれました。Traditional knowledge と書いてあったので、それは直訳すれば伝統的知識ですが、私はやはりそこに技術とか様々なものが入っていると思い、伝承と訳すべきだろうと思いました。先住民族からは、伝承というのは我々にとって大事なもののなので、良ければ残して下さいという言い方をされました。我々日本人にとっても伝承はとても重要なこと、ですから友情の証としてあな

たが書いてくれた文書はそのまま残します、と言っただけで喜んでくれて、プレスカンファレンスと一緒に発表することができたということです。

#### —2010年10月30日 AM1:35 L32 文書(最終文書)の採決—

ただ、残念ながら、ABS とか、国連生物多様性の 10 年の話とか、大事なことはもっとたくさんありますから、メディアはそんなに取り上げてくれていません。でも、実はこういうことが大事だと、僕は思っています。この CEPA の決議は ABS の決議の後でした。ABS は夜中の 1:30 頃に決議されました。松本大臣が木槌を挙げて、みんな抱き合って喜んですごく感激的な、歴史的なシーンがあるのですが、次々と木槌を叩いて決議していきます。8 つの決議文の中のたった 1 つです。

締約国において ABS における条項の実行能力、つまり ABS 議定書が決まって、それを実行するための能力を強化するという時に、先住民族の権利を守るための決議文ができて、それをどう使えばいいのかわからなければ、それはただの紙切れにすぎないのです。ですから、その CEPA 活動へのさらなる支援を計画し、供給することを呼びかける。つまり ABS をみんな実行能力のあるものにするために、CEPA をしていきましょう、教育していきましょう、学びましょう、そういう計画を供給していかなければいけない、そういう責任が CEPA にあるわけです。ABS を決めても、その後に使えなくては意味がない。使うためには CEPA が欠かせないということなのです。そういうわけで、CEPA はこの文書があったがために、後で決議されるわけです。そういう意味でも、我々のこれからやらなければいけないことは大事だと思います。

#### —なぜそこまで決議文にこだわったのか？—

私が何故、市民活動に没頭してここにこだわったかという、決議文さえ決まれば、いろいろな人たちに対して話しかけられるからです。環境省の皆さんにも、国家戦略の中でぜひコミュニケーション、エデュケーションが大事だということをもっと文書の中に盛りこんで下さいとお願いをしていくとか、それに基づいて企業、経団連に対しては、企業のコミュニケーションこそ大事ではないですか、環境省で予算がなければ企業が予算を出して、コミュニケーションやって下さいという話をしに行けます。

メディアにしても、NHK は生物多様性条約の特集をしましたが、民放はどこがやりました？どこもやっていない。冗談じゃない、みんなの暮らしを守るために何故、民放が報道枠を持っていないながら報道しないのですか、という話だっただけ。それはメディアの CSR でしょう。

自治体が、各地域の個性を守るための約束事である地域戦略をつくる、市民がそのための活動をする、教育者がそのための教育をする、そこを大事にしてください、CEPA を入れて下さい、ということだっただけです。

我々市民活動、もしくは教育を生業とされている方々のそうした活動が支えとなって、最終的にはすべての人々が、生物多様性の保全や持続可能な利用を生活で実感し、行動できるように、そのためにこの CEPA を機能させる。だからこそ決議にこだわって、

その決議文をよりよいものにして、それを今度は生かさなければいけない。決議文というのは、ただ出力した PDF ファイルの束、それだけなのです。それだけを信じて世界中の人たちが動くわけです。だから決議文は、使わなければただの紙切れなのです。

#### —Road to COP11 決議文に従い始動しよう—

使わなければただの紙切れ、だけど、その採決された決議文を理解し活用し行動しましょう、我々は CEPA を活かしましょう。日本各地の自然観に育まれたコミュニケーションや教育のグッドプラクティスをインドでの COP11 に持っていきましょう。そのための国内セクターを越えた CEPA の組織作りは、環境省が推進してやってくれています。全国の市民との情報共有のプラットフォームを作ろう、これは市民ネットの後継団体としてやっていきたい。ですので、ここにいらっしゃる皆さんともつながってきたい。それから作業計画(the Program of Work)を作るというのも決議に入っていました。作業計画の策定、これは地域戦略であり国家戦略の中に CEPA というものをしっかり入れて頂きたい、というお願いをこれからしていきたいと思っています。

そして、共同声明を出した先住民族の方をはじめ、世界中に先住民族グループがいらっしゃる、そういった方々と伝統、伝承というものを共有すること。日本もアイヌや沖縄の方々がいらっしゃる。その沖縄で辺野古が壊される。でも、それはやはり守らなければ、伝承しなければいけない。上関原発の問題もそうです。そういった地域の持続可能な地域づくりのグッドプラクティスを、世界の先住民族の方とも共有してやっていきたい、と思うわけです。

#### —IUCN-CEC から Member に招待されました—

ありがたいことにそういった活動をしていましたら、阿部先生が入っていらっしゃる CEC(教育コミュニケーション委員会)に私も招待されまして、広告会社として登録することにしました。コミュニケーションのビジネスとしても、こういったことを活性化させていきたい。市民活動としてはもちろん一生涯懸命やっていくけれども、ビジネスも活性化させなければ、やはり資金がなければ活動にも限界があります。ですから、そういったことを企業にも応援してもらい、よりよい活動にしていきたい。

私はコミュニケーションの専門ですが、環境教育の皆さんとも一緒になってこういったことを進めていく、そのためにも CEPA はつながるキーワードにもなっていると思います。多くの方々に支えられた活動でした。CEPA とは、私たち人間において全てです、と思っています。今後はさらに多くの方々と、意欲というよりも、勇気を共有して活動していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。

#### 司会(中野) :

川廷さん、熱いプレゼンをありがとうございました。

お話を聞いていて、先ほどの阿部さんのお話ともつながって、だいぶわかってきたのですが、国際会議が名古屋で開かれて、世

界中の人たちが集まってくる。そういった世界のレベルと、日本国内でやらなければいけないレベル、東北地方とか関東とか大きいエリア、それからもっと自分の身近な町、コミュニティ、組織、職場、そして一人ひとりの家庭や自分の生活そのもの、本当にいろいろ取り組まなければならない層があります。川廷さんも2年前まではコミュニケーションのプロで、こういった活動は素人だったわけですが、こういうところに反映させるという可能性があるわけですね。

### 川廷氏：

CEPA というのはまさに、そういうチャンスを作ってくれたと思っています。

特にここが今回一番つながる必要がある、つながってきたと思っているのは、何か月も反対している方々、ホットスポットターの皆さんです。上関原発に反対したい、辺野古の問題に対応したい、北半島は核半島ですと言って活動している人がある。そんな多くの方々が名古屋に集まって、初めてホットスポットターズ・ミーティングという会合を行い、ただ反対しているだけではなく、どうすれば持続可能な地域づくりができるのだろうか、企業と話し合っていきたい、私たちはそう思っているだけなのです、といったお話をされていました。こういう方々にも CEPA の話をしました。あなた方がやっていることがなぜ重要なのか、なぜ伝えなければならないのかということをもっときちんとわかりやすく

していきましょう、という話をしました。

ずっと自然保護活動、環境教育、それから ESD 持続可能な地域づくりをやってらっしゃる全国の方々、それと我々市民ネットとして普及啓発をやってきた人間、ここには自然観察員の方や PR 会社の方や、メディアの方もいらっしゃる。それに僕のような広告会社の人間もいる。そういう人間が普及啓発作業部会としてやってきました。そういう人たちと今、こういったことでつながることができるのだな、ということを実感できました。

### 司会(中野)：

簡単に同じだと言ってはいけないのですが、CEPA と ESD はかなり重なっていますよね。それがこの環境教育ミーティングとも重なっています。そうして何を普及啓発していくかという、多くの方が関わっていらっしゃる、いのちのつながりを大事にする、人と人のつながりを大事にする、地域の伝統を大事にする、そういうことが世界的にも現場でも、だいぶつながってきているのかな、とお話聞きながら感じました。

それでは最後に、+ESD について環境省の増井さんからお願いしたいと思います。今みなさんがやっている活動が、きっと ESD とつながっているんじゃない？というあたりのお話かなと思っております。

## 環境省における ESD の取組について

### 環境省 総合環境政策局 環境教育推進室 増井久輝氏

環境省の環境教育推進室から参りました増井と申します。私からは、+ESD プロジェクトという、環境省が行っております登録制度につきまして、スライドを使いながらご説明させて頂きたいと思っております。

#### 一持続可能な開発のための教育(ESD)とは一

ESD につきましては、既に阿部先生からお話しされていると思いますので、簡単にお話します。環境省では、ESD とは、「持続可能な社会の実現を目指して、一人ひとりが世界の人間や将来世代、また環境との関係性の中で生きていくことを認識し、よりよい社会づくりに参画するための力を育むため、環境を始めとして」と書いていますが、環境の教育を、さらに人権、福祉、地域経済再生、つまり経済や社会、そういった視点も盛り込んで、さらに発展させていき、ESD という形に展開させていく、ということを考えております。

#### 一環境省の地域における ESD 推進の取組一

ESD の推進に関わる環境省の取り組みということで、少しご説明させて頂きたいと思っております。

ESD は、普及啓発も非常に大事ですが、実際に地域における

ESD の推進をどうしていくかということで、環境省ではモデル事業を実施いたしました。先程、ESD の 10 年という話がありました。

これにつきましては 2005 年～2014 年までの 10 年間で、ESD の 10 年ということになっておりますが、環境省におきましては、平成 18 年度～20 年度の間に、全国の 14 地域でモデル事業を開始いたしました。その際、採択された地域につきましては、平成 18 年度～19 年度においては 10 地域、平成 19 年度～20 年度においては 4 地域ということになっております。これらの地域においては、多様な人の参画により、ESD 推進の協議会というものを立ち上げてもらいまして、持続可能な地域づくりに向けた教育の内容の検討をして、実施して頂きました。そしてそういった活動を公表することで、今後、ESD をどのように進めていけばいいかのアプローチを学ぶ、ということに取り組んで頂きました。



### ―仙台広域圏の事例―

仙台広域圏 ESD、これは事務局が宮城教育大学におかれています。宮城教育大学の ESD と、宮城教育大学が連携して交流してきた 3 つの地域と、地域の NPO によって組織されているというものでございます。その中の 1 つに、気仙沼市の ESD 推進というものがあまして、気仙沼市という所は、国際水産文化都市と書いてありますように、「森は海の恋人運動」あるいはスローフード都市運動として知られている土地でございます。

この ESD については、2002 年に気仙沼市の面瀬小学校から始まりまして、そのきっかけというのは、日米教育委員会の日本フルブライド基金 (FMF) のマスターティーチャープログラム (MTP) に選抜されたことに始まります。2005 年からは、面瀬中学校や気仙沼高校、つまり、中学・高校の方もそのプログラムに選抜されることになり、小・中・高が連携して、あるいは米国ともインターネットを通じて、それぞれ学び合うという形で、国際的に環境教育が推進してきている、という状況でございます。

気仙沼市の ESD 推進の全体構想図としては、最初に始まりました気仙沼市面瀬小学校の 2002 年からの活動が、中学校・高校、それと宮城教育大学、国連大学とも連携をすることによって、非常に地球的な視野を持って、例えば ASPnet (ユネスコスクール・プロジェクト・ネットワーク) ですか、あるいは RCE (Regional Centres of Expertise on ESD : 世界の中で国連大学が認定した ESD の地域拠点) にも認定されることで、そういったネットワークのもと、持続可能な社会におけるの育成をしているという例でございます。

### ―山梨県北杜市須玉町の事例―

山梨県の例では、過疎高齢化により遊休農地が拡大している、あるいは山林の荒廃が進んでいる、という地域におきまして、「都市と農村の交流」を地域発展につなげる取り組みということで、様々な活動が行われたという事例です。

### ―西宮市の事例―

西宮市は、2003 年 12 月に全国初の環境学習都市宣言を行って、環境学習を通じた持続可能なまちづくりを目指して、様々な取り組みを進めている地域でございます。モデル事業に選ばれたのをきっかけに、ESD 推進協議会というもの、西宮市と NPO 法人子ども環境活動支援協会 (LEAF) で設立して、ESD の活動を展開して頂いたという事例です。

### ―大阪市西淀川区の事例―

最後に、西淀川の菜の花プロジェクトというものを少しご紹介したいと思います。西淀川地域は、皆様ご存知のとおり、大気汚染公害で有名な地域でございます。そこにおいて、持続可能なまちづくりを様々な立場の住民たちが、一緒になって活動されています。西淀川高校による菜の花プロジェクトというものを、地域全体として連携して行ったという事例でございます。

これらにつきましては、皆様方に「地域から学ぶ・つなぐ 39 の

ヒント」という冊子が配られております。この冊子の中に具体的な事例については書いてございます。環境省としましては、この 14 地域の取り組みから 39 のヒントを抽出し、この冊子を発行しております。

### ―環境省の地域における ESD 推進の取組―

現在は、地域における ESD の取り組みをさらに進めるということで、ESD の実施団体の登録制度の検討、そして本年度から活動登録を開始するという状況になっております。その上に、ESD 推進フォーラムを地域ブロックごとに開催していく、ということを検討している段階でございます。

まず初期としては、既存の活動を ESD として捉え直すとしていきます。その後は、いわゆる優良事例、あるいはノウハウを共有していく、という段階にきておまして、そのプラットフォームづくりとして「+ESD プロジェクト」というものがございます。

それ以外にも、ESD コーディネーターの育成のあり方の検討・研修というものがあまして、今年度は、今日こちらにも見えてらっしゃる高田先生や西村先生に大阪の方で研修をお願いして、実施をしているという段階にきております。

将来的には、ESD の推進体制を強化支援して、成熟期においては、推進拠点を日本の中でたくさん作っていくということを考えております。

### ―+ESD プロジェクト ～参加登録の仕方～

最後に「+ESD プロジェクト」について、もう少し詳しく説明させていただきます。+ESD プロジェクトとは何かということですが、皆様のように活動をしていらっしゃる方、実践者あるいは支援者に、ESD の趣旨に賛同し、自らの活動の方向性が一致すると考えられれば、「未来をつくる人づくり活動」または「ESD の支援組織、活用可能な支援事業」と位置付けて、その活動や組織の情報を登録して頂ける、というものでございます。

登録の仕方については、+ESD プロジェクトのパンフレットにもございますように、+ESD のホームページに活動登録ページがありますので、そちらから登録をお願いします。

<http://www.p-esd.go.jp/>

例えば、ご自分たちの活動が、「未来をつくる人づくり活動」であると認識して頂きましたら、誰でも、どのような形でも活動を登録して頂ける、という形になっております。活動自体は、実践者のみならず支援者も含まれます。実際に ESD 活動を支援する事業をやっただく中間支援組織、NPO、企業、大学、自治体、そういったところにも、ESD 活動を支援しているよという形で、支援組織・事業として活動を登録して頂くということにしております。

### ―+ESD プロジェクト ～参加登録のメリット～

そこにどのようなメリットがあるかということ、全国の中でそれぞれの活動が見えるということが、期待されます。現状では、活動の登録はできますが、どのようにインターネット上で見せるかということを検討しておまして、年末には本格的に活動を開始

させて頂こうと思っております。自分たちの活動を、web サイトに登録して頂く。そしてそれが地域ごと、あるいはそれぞれの活動分野ごとに、検索が可能となるという形になっております。

その他には、+ESD マークというものを作りまして、この登録団体にマークを利用していただくことによって、各活動の認知度アップを図ります。+ESD マークにつきましては、選考委員会が11月に開かれまして、川嶋先生にも選考委員会の一人として加わっていただきました。そのマークの発表と共に、本格的な始動をしていこうと思っております。取り組みの一体感ですとか、あるいはESD活動に親しめるような、そういったマークを冠して皆さんに活動して頂きたいと思っております。

参加登録をして頂いた次の段階ですが、分野を越えて地域の活動を知っていただく。つまりESD活動の分野を越えた連携・交流を促進していこう、と考えております。

それから、地域ブロックごとに学び合いフォーラムというものを開催して、実践活動の事例発表や学び合いを行うことによって、ESD活動の支援者や他の団体と出会うきっかけづくりをさせて頂きたいと思っております。

今まで申し上げてきましたように、+ESDプロジェクトというものは、未来をつくる人づくり活動として、その活動について共有して発信をして頂き、実践者同士の分野を越えた交流・連携の機会を提供する。そして地球規模の課題の解決に向けて、地域の力、あるいは活動の活性化を期待していく、というものでございます。

これにつきましては、ぜひこちらにお集まりの方々につきましては、登録をして頂きたいと思っております。詳しい登録の仕方といえますか、村上さんの方から何かお話がございませうか。

#### 司会(中野) :

ESD-Jの事務局長・村上千里さんがいらしていますので、少し補足をお願いします。

皆さんこんにちは、ESD-Jの村上と申します。去年から、環境省さんのこのプロジェクトに、どんな制度をつかったらESDが広まっていくだろうか、また、広まることによって本当に地域で行っていらっしゃる活動がもっともっと活性化するような仕組みにできるだろうか、ということを議論して、一緒につくらせて頂いています。

登録の方法なのですが、まずはホームページにアクセスしてください。http://www.p-esd.go.jp/ にアクセスして頂くと、「登録する」というボタンがありますので、そこから入って頂くということになります。

ただ、本格オープンに向けて登録を受け付けている段階で、登

録内容が見られるようになるのが12月の後半になるかもしれませんが。そうなったときに、皆さんの活動がたくさん登録されていて、初めてアクセスした人が、こんな活動が各地にあるんだと思えるような、豊かな活動が既にいっぱい動いているということが、ESDの魅力が高めることにもつながると思いますので、ぜひご協力頂ければと思います。どうぞよろしくお願い致します。

#### 司会(中野) :

質問です。たとえば僕は、立教大学大学院で屋久島での3日間の集中講義で、かなり自然体験型の授業を行っているのですが、そういうのも登録できるのですか？

#### 村上千里氏 :

1回だけのイベントですと、ホームページを見たときに関わろうと思っても、既に終了してしまっていて関われなくなってしまうので、できれば継続的に行われているプロジェクトの方がいいかなと思います。

#### 司会(中野) :

見た人が、仲間になれるような、見た活動に参加したりして、仲間が繋がっていきこうということですよ。

#### 村上千里氏 :

実践者が、助成金を出しているところとか、地域の中で社会貢献したいのだけれど、この地域でどんな活動をしているのだろうという、ローカルな企業の方との出会いの場にもしていけたらと思っております。

もう1つは、例えば、自分は自然観察をしているけれど、子育て支援の人たちとつながりながら何かできないかな、と思うような時に、「子育て支援」「自然観察」というキーワードで事業を検索して頂くことができるようになっていて、こんなやりかたもあるんだというヒントを得ていただけるような、プラットフォームに育てていきたいと思っております。

#### 司会(中野) :

ありがとうございます。+ESDのお話でした。

全体会もあと20分となってしまうかもしれませんが、これで終わりではない、これで始まりの清里ミーティングです。ただ、初参加の方が今回も半分以上を占めていますし、どんな方が参加しているのかなあと、気になるころだと思っておりますので、今から、なるべく知らない人と、20代・30代・40代・50代以上の異年齢で4人組を作ってください。クロスジェネレーション・セッションを行いたいと思っております。

4人組で話し合ってください。①自己紹介、どこの誰で何をしているか、②これまで聞いたところの感想、③生物多様性の保全という世界的な潮流を意識して、自分の活動を深めていくとしたら、どんなことをしたいか、の3つです。

## ークロスジェネレーション・セッション終了！ー

### 司会(中野) :

それではこのセッション終わりにしたいと思います。お話は尽きないと思いますが、これから3日間ありますので、この仲間を拠点に交流して頂ければと思います。この4人のお名前を確認し合ったところで、終了です。ありがとうございました。

では、海外からいらしている人がいるということですので、一言お願いします。

### 李 瑾さん :

皆さん、こんにちは。私は中国の北京から参りました、李と申します。JICA 中国事務所に勤めています。担当の分野は相互理解、つまり中国・日本両国民の相互理解を促進するためにいろいろな業務を担当しています。その中の一つは、草の根という日中両国の民間組織の NGO・NPO の協力を促進する業務です。今回は勉強のために参りました。よろしくお願いします。

### ゲレルサイハン・アリユナーさん :

私はモンゴル出身で、ゲレルサイハン・アリユナーと申します。ダイキン工業のグローバル人材グループという部署で人事の仕事をしています。会社のボランティア活動という取り組みを今年から少し始め、会社のいろいろな部門から人を集めて、大きく環境活動に皆の意識を高めてもらうための企画をつくるというのを模索中で、今回はその勉強のためにきました。もうひとり井上雅之さんという先輩も来ています。いろいろ教えて頂きたいと思います。よろしくお願いします。

### 賛田 強 エドワルドさん :

こんにちは、私は賛田 強と申します。メキシコから参りました。JICA 日系人の研修生です。キープ協会で日本の環境教育を勉強しに来ています。メキシコでは、10年くらい政府で働き国立公園関係の仕事をしました。それから政府の仕事を辞めて、ジンバイザメのエコツアーのトレーニングをやっています。メキシコのコミュニティの人がジンバイザメのエコツアーをやりたいということで、友達と環境教育を教えています。日本に来て日本の環境教育を学んで、日本では自然の中でどんな活動をしているかをメキシコに紹介して、メキシコと日本をつなぐことをやりたいです。キープ協会でニックネームはエディというので、皆さんそう呼んでください。よろしくお願いします。

### 司会(中野) :

それでは全体会これにて終了しますが、この3日間どうぞお楽しみください。一歩前に出て積極的にいろんな人と関わって、つながりをつくって、かづけしあって行けたらと思います。ありがとうございました。



---

# 2 日目

## 3.5 時間ワークショップ

---

### 【午前の部】

1. 自然体験型環境教育基礎講座 ※
2. 日本的自然観から考える環境教育
3. 農的暮らしの学校
4. 自然感を耕す：人は心を、畑は土を、森はデザイン感を
5. 生物多様性まんだらカードゲーム体験会
6. 生物多様性条約の CEPA って何だ？
7. 企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
8. エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part3

### 【午後の部】

10. 「サステナビリティ」の基本はこれだ！ ※
11. これだけは知っておきたい！生物多様性の基礎知識 ※
12. 生物多様性を普及する環境教育を目指して
13. 森を考える～木質バイオマスで 100 年先の森づくり～
14. 大学生のための食育プログラム
15. 命をいただく～ニワトリと生きる～
16. エコロジカル・シンキングゲーム
17. 「地球交響曲第 7 番」を見て、みんなで語ろう！
18. イナカとこどもと日本の未来を考える
19. 企業の行なう自然体験活動と地域のつながりを考える

※の印は、主催者企画ワークショップ

(注) 9. 海外での環境教育(保全)活動を日本でどう伝えていくかは、都合により中止となりました。

# 自然体験型環境教育基礎講座

実施者:川嶋 直(財団法人キープ協会) -



## 【概要】

1. 参加者相互&川嶋とのチューニング
2. 森の中での自然体験
3. KP(紙芝居プレゼンテーション)法での環境教育基礎講座

今回の清里ミーティングのメインイベントであるこの3時間ワークショップ、川嶋が担当するこの「自然体験型環境教育基礎講座」は参加者17名がより積極的に参加することができるよう、「相互チューニング」からスタート。

## 【参加者相互&川嶋とのチューニング】

初めに、参加者がどういったキーワードに惹かれてこの講座に申し込みをしたのかを発表した。「基礎講座」と「講師=川嶋直」が参加の動機として多かった。次に川嶋の自己紹介に続いて、最後に「デートゲーム」というアイスブレイクを行った。他の参加者と「デート」のアポイントをとって、順番に相互インタビューしながらクリップボードにメモを記していく。たとえば、「記憶の中から思い浮かんだ、ほっとする自然の情景」「なぜ、このフォーラムに参加することにしたのか」「なぜこのワークショップを選んだのか」といった質問に互いに答えあう。短い時間ながらも、こうした対話を通して、参加者たちはどんな人達とともにこの場を共有していくのかに想いをめぐらせるきっかけになった。

## 【森の中での自然体験】

チューニングの後、早速森に出かけて自然体験を行った。この日では「よく見よう・見方を変えよう」のテーマの下に、キープ協会では一般的なアクティビティを実際に体験した。

実際に行ったアクティビティは①目玉うち、②スキヤキハイク、③森の万華鏡、④一筆入魂の4つで、いずれも「良く見る・見方を変える」きっかけを与えてくれるアクティビティであった。以下それぞれ順に紹介してゆく。

### ①「目玉うち」:

木や岩、木の幹などの自然物に目玉のシールを貼り、「森の友達」をつくるものである。よく観察することで普段見ない自然の表情を感じ取ることができたようだ。作品もそれぞれ参加者の個性が出るものとなった。

### ②「スキヤキハイク」

ヒット曲「上を向いて歩こう」の英名タイトルから名付けられたアクティビティで、小さな鏡を使って様々な角度から森を歩くものである。目の下に上向きに持った鏡には、森の木々越しの青い空が切り取られて美しく見える。下を向いて歩いているのに、枯れた落ち葉や草の上に、青空も同時に映り込むという、不思議で新鮮な視界に出会うことができる。

写真

### ③「森の万華鏡」

小さな鏡を使って今度は、「森の万華鏡」づくりを体験する。このアクティビティの狙いは、ここから「視点を変えること」と同時に「表現すること」が加わっていく。参加者はペアとなって森で拾った材料を組み合わせ、鏡を2枚合わせて作品を作る。まるで万華鏡のように複雑で美しいパターンが浮かび上がる。

### ④「一筆入魂」

後に振りかえりとして行った。これまでに体験したこと、感じたことを振り返り、今の心境を漢字一文字で綴り、全員で共有する。「爽」「癒」「愁」などのほか、新しい漢字を考え出した参加者も数多く見受けられた。自分の中でこの時間を整理し、一文字で表すことで今日の自然体験全体を今後色濃く記憶に残すきっかけになると感じた。

## 【KP(紙芝居プレゼンテーション)法による講義】

全てのプログラムが終わると、KP(紙芝居プレゼンテーション)法による講義を行なった。環境教育の重要性、更には教育の本来の意味、可能性など様々なことをテンポ良く、わかりやすくレクチャーした。自然体験型の環境教育プログラムを組み立てていく際のポイントとして、以下をレクチャーし、今後の環境教育の発展を皆で取り組むもうと呼びかけた。

- 事前の下見で、どこに何があるかを把握し、アクティビティに使える素材をとにかく集めておくことが大事。だが、下見の際には、綿密にプログラムデザイン(シナリオを書く作業)はしないようにしている。
- プログラムは、120%くらい事前に準備しておいて、現場の状況などを見て少しずつ削っていく。
- キープ協会では野外で活動するアクティビティを数百持っているが、定番で使っているのはその1割くらい。それらの組み合わせでプログラムをつくっている。

# 日本の自然観から考える環境教育

実施者:菅井啓之(京都ノートルダム女子大学)  
新田章伸(日本の自然観実践研究会)

## 【オリエンテーション】5分

- ・実施者紹介
- ・ねらい、心構え

日本の自然に生きてきた先人の知恵や生き方は自然観の中に凝縮されている。その自然観はその人の行動、生き方を決定する。生活に生きる自然の見方を学び、自然・自己・生き方が一体化するあり方を考える。

## 【アイスブレイキング】25分

- ・自己紹介:紙に「名前」「今の住まい」「所属団体、私の活動」「WSへの思い」を書き、発表する。

## 【講義 / 菅井】40分

### 「日本の自然観から考える環境教育」

「人と自然の関係」を考えるには科学だけでなく、日本人の素朴な自然観も必要である。自然をモノとしてみる科学的自然観と神仏としてみる日本の自然観、この対照的な自然観が日本では共存している。それは二律背反的なものではなく、相互補完的に機能しているのである。

自然観は、自然に対する人間の行動を決めるものである。そのため、バランスのとれた自然観をもつことが大切である。日本という風土で生きる私たちが、その土地の先人たちが築き上げてきた自然の見方を学び継承しつつ、同時に科学的な見方も学ぶことで、バランスのとれた自然観をもつことができるだろう。

それでは、日本の自然観とはなにか。茶道の祖である村田珠光が提唱した、茶道の真髄を表す言葉、「和敬清寂」がそれをうまく表現する。「和」とは、多様なものが互いに受け入れあって和む姿、多様性、寛容を表す。「敬」とは、絶対的信頼のもとに畏敬の念をもって接すること。「清」とは、純真で素直に自然は清らかなものであると見ると共に、人為や作為を離れたおのずからの姿そのもの。「寂」とは、人智を超越した絶対的存在としての自然を直観すること、自然の本質を神仏と悟ること。日本人の自然に対する姿勢は「和敬清寂」で表現されているのである。これを生き方に結びつけると、「自然(おのずから)を自分(みずから)に体現する」、つまり「自然体」ということである。「おのずから」とは、作為なしに自身の内発的働きからおこってくる生命的エネルギーである。そして「自然体」とは昔から日本人が理想としてきた生き方である。複雑化した現代社会にあって、最も素朴で純粋な自然に対する認識と生き方の価値に気付かせてくれるのが日本の自然観なのである。

\*資料掲載 URL :

<http://homepage3.nifty.com/tajiman/Jinen/Jinen.html>

## 【ワーク1 / 菅井】40分

### 「周辺の自然から日本の自然観を考える」

屋外に出て、実際の自然から日本の自然観の理解を深める。

〈例〉

- ・石垣: 大きさの異なる岩を用いる。多様性。
- ・岩と植木: 必ず一緒に置いてある。その置き方は全て異なる。
- ・岩: 遠くに見える山を表現。岩が山そのもの。
- ・石垣と西洋トイレと石: 多様性。
- ・山: ただ単に「山」と呼ぶのではなく、そこにある草や木々、すべての生命体を感じて呼んだときの「山」が真の「山」である。
- ・しめ縄、鳥居: 利用してもいい自然と触れてはいけない自然。伝承の必要性。
- ・桜: 「さ」の神が下りてくる「蔵」。
- ・松: 神が下りてくるのを「待つ」。

ちょっとした考え方一つでモノの見方が変わる。それを意識して行うことによって、日本の自然観は伝承されるようになる。

## 【日本の自然観実践活動の事例紹介 / 新田】20分

- ・日本の自然観実践研究会考案の活動 「自然をみる、命をみる」 「大自然の中の小さな石」
- ・里山倶楽部「里山キッズクラブ」の活動

## 【ワーク2 / 菅井・新田】50分

### 「日本の自然観の具現化を考える」

#### ・パネルディスカッション

実施者2人に参加者2人を交え、4人でこれまでのワークショップを踏まえてのディスカッションを行う。途中参加者を入れ替え。

#### ・グループディスカッション

3~4人のグループを作り、これまでの意見交換を行う。そして具現化の道筋を探る。

## 【まとめ】

自然(おのずから)の生き方とは、

## 【ボランティアスタッフの感想】

私たちの生活に、日本の自然観は大きく根付いている。普段何気なく見ている場所、モノにもそれがよく表れている。それを意識化し、いつもとは少し異なった視点からモノを見つめ、感じる。そのようにして日本の自然観を伝承し続けていくことは非常に大切なことだと感じた。

# 農的暮らしの学校

実施者:加藤大吾(NPO 法人都留環境フォーラム)、梅崎靖志(風と土の自然学校)  
佐々木豊志(くりこま高原自然学校)、高田 研(都留文科大学教授)

## 【概要】

『農的暮らし』の学校とは何なのか。実際に行われている農的暮らしとはどのようなものか、またそれらの活動を通して何が得られるのか、成功させるために欠かせない地域の人々との付き合い方など実施者それぞれの農的暮らしをプレゼンテーション形式によって紹介。最後に農的暮らしの学校を実現、継続していく上での問題を提起し、参加者全員(20名程度)でディスカッションを行った。

## 【農的暮らし内容】

自然農法、自力で材料を調達し、家を建てるなどの共通点が多く見られたが、それぞれの実施者のコンセプト、地域での農的暮らしを実現させるうえで大切にしていることは異なっていた。それは、それぞれの環境や立場に合わせてその手法や考え方を変化させることが実現に向けて大切などということだった。

### ① 加藤大吾 <人の役に立つ>

誰かの役に立つことが大切。誰が何をやったのかという情報がすぐに飛び交うような狭い空間では、もらってばかりでは成功しない。人の役に立つ1つの例としてあげたのは地元の消防団員に参加していること。

また合鴨農法で作ったお米や農作物を売るときも「顔がわかる、知り合いの方々に食べてもらうのが本来の姿」と思い、安値で提供している。

他にも地元の大学生との交流や援農日を設けている。”かとうさんちの暮らし”(農業、建築、地域との付き合いなど)をそのまま体験できる空間を都会の方向けに提供し、地域の方々へは集いの場を提供している。(※終了後、加藤自作のおいしいお米、自家製味噌を参加者全員で頂いた。)

### ② 佐々木豊志 <自然の摂理に従う>

キャンプに参加する子供たちに健康的な食物をたべさせてあげたいというところから始まった農的暮らし。廃材を地域の業者よりいただき、筋のいいものはスタッフの家の材料となり、他は燃料として利用している。

自然農法を利用した田では昨年刈り取った稲の根は残を残し、冬でも水を張ることにより、ミミズの住処となる。そのミミズが餌となり、捕食者の鳥が飛んで来るといった一つの生態系を形成している。

また里山に馬とヤギを放すことにより、里山が整備され、子どもたちが動物と一緒に暮らす機会をも提供している。その地での特性を活かして季節ごとの活動を展開している。

### ③ 梅崎靖志 <関係性を持つ>

永続可能な農的暮らしを実践するパーマカルチャーをテーマに

した、年間講座の実践について紹介。

自分の手に暮らしを取り戻し、自然とつながる農的暮らしをするためのポイントは、自然、地域、仲間と多様な関係性を築くこと。例えば、自然とつながり、自然の営みに寄り添った自然農で作物を育てる。

そして、人とのつながりを活かして建築古材や廃棄されてしまう新品のペアガラスをもらってきて小屋を建てる。

関係性を大切にしたい生き方に、これからの時代に向けた暮らしのヒントが詰まっている。

## ④ 高田 研

大学では H.D.ソローを題材にし、建物を建てるプログラムなどを地域の団体と協力し授業の中で学生に提供している。

また全国の農的暮らしの学校を調査しインタビューをしていく中で、農的暮らしを実践している人は大きく 1960 年代北米環境運動系、タビト系、ヤマギシズム系、自然学校系、その他と時代別に分類できることがわかってきた。

少しずつ現代の暮らしが見直されているとはいえ、そういった新しい価値観を作り出そうとしている人々を孤立させないため、またこれからも農的暮らしの学校を広めていくため以下にある問題を提起した。

## 【ディスカッション】

### <論点>

#### ◎世代間再生産としての学校からの脱却

- ・次の世代の子供たちをどう育てるのか
- ・教育の自給自足の必要性

→現在の学校のシステムだけに頼る事なく、家族や地域で子供たちを育てるという意識が必要ではないか?

\*教育の自給自足とはサドベリースクール・フリースクールなど  
→教科学習はせず、子どもたちが自由にやりたいことを突き詰める学校のこと。教科学習も子どもたちの興味がわいたときに先生がする。日本では湘南や兵庫にある。

- ・フリースクールに通わせたいとは思いますが資金面で辛い。

#### ◎グローバルマナーとの付き合い方

- ・農的暮らしをしながら収入を得るのは難しい。

→加藤さんは一つの暮らし方モデルとなっている

(企業向けの研修などで収入を得る 半農半 X スタイル)

- ・お金をどうやって稼ぐか

→レストラン・国補助・寄宿などを利用すれば経済性は確保できる(農業+a)

- ・教育費・収入に応じて奨学金を出すなど、制度作りが必要なのではないか?

# 自然感を耕す：人は心を、畑は土を、森はデザイン感を

実施者：佐藤 洋

## 【自己紹介】

開始前から実施者が所属の都留市の歌手による「ムササビの歌」が流れる和やかな雰囲気の中、ワークショップを開始した。

始めに、参加者と実施者、ボランティアを含めた全員で自己紹介を行った。参加者はぐると円形に並べた椅子に座ってお互いの顔が見えるような型で話す。自己紹介をより盛り上げるために、お土産として持ってきた、まだトゲが付いている栗を一つ投げて、キャッチした人が話すという形式をとった。栗をキャッチすると人それぞれの反応が見られ、その人らしさがより表れる自己紹介となった。

## 【ワークショップの説明】

このワークショップで行うことは、自然「感」察である。ここでいう自然「感」察は、なにか珍しい自然物を見に行ったり、虫や植物や動物を分類するための観察ではない。身近にある自然と向き合って、なぜそこにあるのか、なぜそんな形をしているのか、何をしているのか等、その自然についてとことん考えてみる、自分の心に働きかける自然「感」察である。

また、この自分と向き合う自然「感」察に7つのルールを設けている。「記録一生、記憶一瞬」「人のふり見て真似してみろ」「日常からあなたの気持ちをストレート」「イーネー！」「展開を癖と化す」「フィードバックを求めろ」「感性の自覚」である。

## 【アイスブレイク】

「自然と向き合う」ためのウォーミングアップ。参加者全員がそれぞれ白い紙にペンで9つのマスを書き、そこに9つの質問を投げかけ、参加者はマスにその答えを書いていく。質問には、「どんな気持ち？」といった質問から「電車に乗っている時、何を見ている？」「癖はなに？」といった自分の行動パターンに関する質問、「あなたの部屋の入口にアシナガバチが巣をかけました。さてどうする？」「あなたの部屋にクモが入ってきました、どうする？」といった、まさに自然との向き合い方に関する質問。

質問の答えが出そろったところで、その紙をもって近くの人とペアを組み、書いた答えについて話し、お互いのものに対する感じ方をシェアしていった。会話も弾み、雰囲気もよりアットホームになったところで、いったん休憩とした。

## 【自然観察】

いよいよ自然「感」察の時間。まずは一人でスケッチブックをもって歩いて見つけたものを観察する「個人戦」を実施。参加者はそれぞれ、「イーネー！」と思ったものに足を止め、「なんでここにあるんだろう？」「なんでこんな形をしているんだろう？」と

自分の疑問問を「展開」していく。「感」察のテーマは「つながり」である。自分または自然界とが、どうつながっているのかを頭に入れながら、結びつけていく。特に図鑑に基づいた解説はいららず、感性に任せた思いを活字にしたり、言葉にしたりするものである。

こうして「感」察をして生まれた疑問や、そのものの有り様をスケッチブックに記録していくと同時に、「感」察をしている場所や観察時の天気や風の様子も記入した。ただし、この場所や天気は数値に基づいた情報ではなく、「富士山が西に見える場所」とか、「ひんやりくる寒さ」など、自分のストレートな感性に基づいた情報を記入した。

45分の個人戦の後は、2つのチームを作って自分の記録したもの、感じたものをチームの中で発表し、シェアしていくフィードバックの時間。動物の糞に注目する人もいれば、小学生が植樹したであろう木の元に倒れていたボロボロの植樹標に焦点を当てた人もいて、参加者それぞれの多様な感性に出会い、自分の感性がよりはっきりと自覚された。話していく中で、同じものを見たい、真似してみようと思ったもの、場所を一つ決める。その後、そのチーム全員で改めて「感」察しに行く。これが団体戦である。

6~7人で作るチームに1枚の模造紙を渡し、地面に置いて全員で話しながら次々に、スケッチや感じた疑問を書き足していく。誰かが感じた疑問に対して、誰かがその疑問を展開し、さらにその疑問を深めていったり、一人で「感」察していたのではきっと浮かんでこなかったと思われるほど多様な疑問や感性が現れた。

団体戦のねらいは他者からたくさんのフィードバックをもらうことなのである。自分とは違う感性と出会ったとき、さらに受け入れられたとき、人の心が動く。この感情の動きが起こった時に、感性は自覚されるのである。

## 【発表】

各チームで「感」察したものを発表し合った。一つのチームは様々な木が森の中で生きている、「木の家族」の様子を発表し、もう一方は丸太の裏にたくさんのミミズと様々な生き物が住む「ミミズのホテル」の様子を発表し、共有した。

最後に参加者一人ひとりが感想を述べた。身近なものについて浮んだ疑問を展開することで、人間本来が持つ「自然欲」を掻き立てることができ、自然を見ることにとどまらず、日常の暮らしや育児、交友関係、地域に生きることなどへのつながりや結びつきが生まれ、自らと向き合うことにより、自立を促し、自らを自覚することで、今、社会で薄れている「関わり」を構築できる人間を形成できるとし、ワークショップをまとめた。

# 生物多様性まんだらカードゲーム体験会

実施者:赤松良彦(株式会社アーバン・コミュニケーションズ)  
京極 徹(公益社団法人日本環境教育フォーラム)

## 【概要】

生物多様性まんだらカードゲームとは、キーカード9枚を含む計54枚のカードを使い、カードを複数つなぎ合わせることで、一連のストーリーや小話を作っていくものである。これにより、自然と生物、生物同士、私たちと自然や生物のつながりを見つめる。また、日常生活の中ではなかなか目を向けることのなかった自然や生物の恩恵を一つひとつ振り返ることで、改めて生物が多様であることの大切さを考えるといった、考えるきっかけ作りを提供することができる。

## 【自己紹介】

このワークショップには、さまざまな機関や団体に所属している方が集まった。そのため、アイスブレイクとして自己紹介を行い、それぞれ所属と名前、ワークショップに参加した経緯や今回のワークショップから持ち帰りたいものを1人ずつ発表した。

## 【生物多様性まんだらカードゲームとは】

実施者(赤松)から生物多様性まんだらカードゲームについての説明をした。はじめに、このカードゲームは独立行政法人環境再生保全機構環境基金の助成により作成したものである。作成した意図としては、人間が生きていく上でいかに自然や生物に支えられているかの実感を得るきっかけづくり、また生物多様性の意味を考える動機付けを私たちの生活に対して行おうと考えて企画している。

それには、私たちの生活と自然や生物との関係は切り離して考えることはできないことでありながら、実際には、それらは複雑に構成されているため見えにくい、といった現状が要因としてある。そのため、このカードゲームを通して、私たちの生活とのつながりをゲーム感覚で楽しみながら考えてもらおうと思った。

生物多様性まんだらカードゲームの進め方としては、3名〜5名程度を1つのグループとして、テーブルを囲んで座ってもらい、54枚のカードの中から実施者が指定したカードをスタートとして、残りのカードから指定された枚数分を選び出し、並び替え、グループ全体でストーリーを作っていくものである。

## 【カードゲームの体験】

今回は、1グループ3名、計2グループに分かれて行った。はじめに、ウォーミングアップとしてすぐにカードを使うのではなく、「風が吹けば桶屋が儲かる」のイラストが6枚描いてある

紙を1人1枚配布し、参加者はイラストを並び替え、それぞれが思う「風が吹けば桶屋が儲かる」のストーリーを10分で作っていった。そして、グループ内で各自作ったストーリーを発表した。

ストーリー作りの練習が終わったあとは、全54枚のカードを使った生物多様性まんだらカードゲームの始まりとなる。カードは写真で構成され、カードを組み合わせることでストーリーの想起ができるようになっている。まずは手習いから。

指定されたカード1枚に好みの2枚を足した3枚の小ストーリー作りから始まっていく。カードの大枠である文化、エネルギー、農産物などの「キーカード」と呼ばれる9枚から好きなカードを1枚選び、そこをスタートとして残りの2枚を自由に組み合わせ、ストーリーを5分程度で作成し、発表する。これを2回行う。発表されたストーリーには、例えば、キーカードとして空気があり、そこから水・太陽の2つのカードが選ばれ、植物の発芽の3条件を説明するものがあつた。

個人作業の小ストーリー作りが終わったあとは、同じお題を使用して、計7枚のカードを使用する中ストーリー作りのグループワークになる。メンバーで話し合い、カードをつなぎ、ストーリーを完成させていく。そして、各グループ毎に作ったストーリーのプレゼンテーションを行う。

同じお題であっても、必ず各グループで違うストーリーになるため、その部分が面白く、参加性を更に高める。また、余裕があれば、プレゼン方法を工夫するとユニークな発表にもなる。中ストーリー作りは、1セット10〜15分を目安に3回行った。

中ストーリー作りが終わったら、カードを全部使う大ストーリー作りを行う。やり方は今までと同じだが、全ストーリーを説明すると時間がかかるため、要点を押さえて、つながりのある部分を説明する発表になる。こちらは20〜30分を目安に1セット行った。

## 【参加者のまとめ】

ゲームが終わったあとは、ふりかえりシートを参加者それぞれに記入してもらい、グループ内で共有した。

参加者から出た感想としては、各人が作るストーリーの違いを楽しむことができた、カードを全部使い切ったストーリーができた時の達成感はずごかった、などの意見があつた一方で、どのようにしたらさらに身近なものに捉えられるのか、楽しいだけで終わってしまわないためにはどうするのか、といった改善点も話し合わせ、ワークショップは終了となった。

# 生物多様性条約の CEPA って何だ？

実施者：川廷昌弘(生物多様性条約(CBD)市民ネット)  
中野民夫(ワークショップ企画プロデューサー)

## 【目的、ねらい】

今回のワークショップでは、生物多様性における CEPA とは何かを知り、2012 年の COP11(インドで開催)に向け CEPA をどのように広めていくことができるか、日本のグッドプラクティスを持っていくためによい事例はないかを考えた。CEPA とは生物多様性条約第 13 条に関連した活動であり、Communication, Education, and Public Awareness を総称して CEPA と呼んでいる。持続可能な資源利用を次世代へ伝えるため「広報、教育、普及啓発」に関する決議する活動のことを指している。

CEPA と聞いても、それが何を示しているか実感がわからない。CEPA を広めるにあたって、自分の体験に結びつけることで CEPA を実感しやすいものになろうということでワークショップを実施した。

## 【ワーク 1】

はじめに、CEPA を C、E、PA の 3 つに分け、CEPA に関わる用語(例：ConnectingCapacity Building、Empowerment 等々)から自分の体験に直接結びつけたり、連想されることを共有し合った。

- ・「C」では、共有の体験から分かち合う喜びを感じる。世代間の交流。
- ・「E」では、多様な文化や価値観を分かち合うことが必要。共有の体験を持つこと、また共通の体験を伝えること。本物を体験する。
- ・「PA」では、気づき。以心伝心。あえて言挙げせず、Feel する。などが挙げられた。

## 【ワーク 2】

次に、グループごとに、C、E、PA のグループに分け、それぞれが今までどのように自分の体験にかかわってきたか、またどのような影響を受けてきたか(※ここでは「CEPA られた」体験と呼んだ)を、子どもの頃、学生の頃、大人になって、最近、の 4 つから自分が CEPA に関して影響を受けたことを挙げた。

その中で多かったのは、今まで生きてきた中でまわりの人の影響が大きいということが挙がっていた。子どものころは友達の影響を受け、学生のときは大学時代の議論、大人になってからは多くの人と話し合うことで経験を積み、今は若い人へと伝えているなどがあった。

また、ここで大きく分かれたのは「親の影響が大きい」というグループと「親以外の人の影響が大きい」という意見に分かれた。

前者では、親が生物やアウトドアが好きな場合、子供のころか

ら自然に触れ合う機会が多くなり、自然に興味を持ちやすくなるや親から言われた「ミートソースが好きだけでスパゲティが好きと言えるのか」と言われて見方が変わった、というユニークなものもあった。

また、後者では林間学校の体験や自然学校の先生との印象的な出来事や、友人や職場の人の影響が大きいということが挙げられた。

## 【ワーク 3】

前段階で私達が周りの人々に色々な影響を受けてきた、それは歳をとるにつれて若い世代へと伝えるようになる(※ここでは「CEPA する」体験とした)。

最後に、今後、私達が生きていくなかで、影響を与える、伝えるときにどのような点に気をつけるべきか、今までの体験から Good(よかったところ)と Bad(よくなかった、失敗したところ)の両面を挙げながら考えた。

Good では、生き物を学ぶときに「この生き物にはこのような特徴があります」と何度もやると、生き物を覚えるのは難しいと言われた。悩んでいる人の相談にのったとき、聴く姿勢を貫いて、相手を肯定することに心がけたら、相手が満足そうであった。植物を学ぶときに一枚の葉をじっくり観察しながら描いてもらったら自分の目で確かめ自分で発見してモノにできた。

Bad では、自分が正しいと思っていた意見を一方的に主張し、相手の意見を否定していたらけんかになった。などが挙げられた。

## 【まとめ】

CEPA とは何かを追及していくなかで、色々な視点でとらえることができた。そこに見えてくるのは「他者」であり、他者を理解することの必要性である。生物多様性とは新しいコンセプトではあるが、私たちはこのように様々な形で体験し会得してきたことでもあり、これをさらに次世代へと残していかなければならない。

これまで私たち日本人は「伝承」という形で本来は語りつないできていたが、便利を追及してきた都市生活の中でそのことをいかに伝えていくことができるかをみんなで考えたワークショップとなった。

# 企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える

実施者：小堀武信・林田悦弘(公益社団法人日本環境教育フォーラム)

## 【コスモ石油エコカード基金(以下、本基金)及び 学校の環境教育支援プロジェクトの紹介】

本基金は、コスモ石油の売り上げの一部やエコカード会員の寄付金によって成り立っており、「もっと地球で暮らそう。」をテーマに持続可能な社会を実現するためのプロジェクトを展開している。「学校の環境教育支援プロジェクト」はその一つであり、JEEFが事務局となり、全国7地域9校で取組んでいる企業、NPO、学校の協働事業である。

グループディスカッションの前に、各地区より本プロジェクトで取組んでいるプログラムについて、NPO担当者や学校担当者から報告をした。

## 【グループディスカッション】

報告に引き続き、グループディスカッションを行った。まず、「企業・NPO・学校が連携して環境教育に取り組む際の課題」、「他のセクターへの要望」をテーマに、企業・NPO・行政・学校関係者ごとのグループに分かれて、問題点や要望を話し合った。各グループから次のような意見が発表された。

### 【企業】

- ①環境教育の効果は評価が難しい
- ②学校で環境教育を行うことの必要性や目的を知りたい

### 【NPO】

- ③学校側の教員間に環境教育に対する温度差が見られる
- ④本基金の取り組みの認知度が低い

### 【学校】

- ⑤学校の年間プログラム策定と本基金の支援決定の間にタイムラグがある
- ⑥学校の教員側が忙しいため、内容をすり合わせる時間が取れない

### 【行政】

- ⑦それぞれのセクターのニーズや、行政に対するニーズが捉えにくい
- ⑧環境教育のねらいが詰め切らないままで、落としどころがわからない

次に各セクターの参加者が混成するようにグループ分けをし、それぞれのグループで上記のテーマから一つを選び、解決策について話し合った。

## ◆①と②について話し合ったグループ

長期的な評価が最も重要ではあるが、本基金の取組みのような短期的な活動への評価も必要ではないかという意見が出た。その

上で、本基金の活動をブログ等を活用してリアルタイムで報告することや、行政側が企業の活動を評価する仕組みを作ることにについて提案があった。

## ◆③について話し合ったグループ

校長や学校の先生にやる気を出させる、興味を出させることが何よりも重要はないかと提案があった。その一方で、活動を評価してもらうために、保護者も含めた説明会を開催し、環境教育を通して「生きる力」を養うことの重要性を認識してもらうなどの提案があった。

## ◆③について話し合ったグループ(2グループ)

介護制度のようにランクを分けて研修を受けるような仕組みを作ることの必要性、企業や団体の活動を行政が評価・認定する制度の設立、行政が企業とNPOをつなぐシステムが必要ではないかなどの提案がなされた。

## ◆⑧について話し合ったグループ

その土地にあった具体的なテーマを設定することでねらいや重要性についてイメージしやすくなるのではないかという指摘があった。また、学校側がイベントとして取り組む、教員が環境教育プログラムを体験することにより先生が主体的に参加できるようになるのではないかと、PTA会長などが地域のコーディネーターとして介在すればよいのではないかと、という提案があった。

## 【学校側が環境教育プログラムを 受け入れるためのポイント】

発表の後、石垣市立伊原間中学校の本成尚校長先生からポイントについてお話いただいた。

- ・環境教育に取り組む魅力や必要性を、学校側へきちんと伝えること。
- ・前年度の提案時に既に方向性や最終的な成功イメージを学校側へ伝えておくこと。
- ・担当者を明確にしておくこと。
- ・実施日時案、経費案を概ね決めておくこと。
- ・実施に当たっては、担任の先生に関わっていただきながら進めることを、事前に伝えておくこと。

## 【まとめ】

最後に、本基金の富手裕子氏(コスモ石油株式会社コーポレートコミュニケーション部 CSR・環境室)より、環境教育は効果が目に見えにくい活動だが、少しずつの積み重ねが社会を変えることにつながるのだから、引き続き本基金として事業に取り組んでいきたいというメッセージをまとめていただき、本WSは終了した。

# エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part3

実施者:藤木勇光・小林庸一・南栄助(J-POWER 電源開発)  
櫻井良樹・湯浅隆(東京電力自然学校)

## 【概要】

東京電力と J-POWER の協働で実施したこの WS には、男性 17 名、女性 2 名の計 19 名の方にご参加いただいた。企業の環境部門に所属している方が最も多く、次いでインタープリター、そして教育分野に携わる人々であった。

WS はスライドや実際に行っている面白実験を再現する情報提供の後、ワールドカフェ方式でテーブル毎 5 つほどのグループに分かれて進行した。対話を楽しみながら、各々気づきを持ち帰っていただけたのではないかと思います。

## 【内容】

本 WS では、実施者の自己紹介や今日の概要の説明後、参加者 1 人ひとりが全体に向け、アイスブレイキングを兼ねた自己紹介を行った。その後、パワーポイントによる東京電力の事業説明、事業と自然の関係を主に取り上げつつ、企業の社会的責任などについて情報提供(プレゼン)を行った。

話の柱は、東京電力で行われている「東京電力自然学校」の活動で、例えば尾瀬の木道補修やアヤマ平の湿原回復、植林ボランティア活動、尾瀬ぷらり館での展示や自然観察会、当間高原での「あてま森と水辺の教室ポポラ」や水辺のホールといったような活動紹介である。そして、『「親しむ」楽しみながら興味を深める⇒「知る」知識を深める⇒「行動する」体験し実践する』といった 3 つのステップの重要性について述べた。この他にも管内の発電所では、ピオトープがあり、ホテルが生息出来る環境を体験活動を通じて整備している所もある。

この「東京電力自然学校」のターゲットは一般客だけでなく、社員とその家族を含めて 2 つであり、そのことが持続可能性を求めるには必要であるとの考え方も紹介した。また、あらゆるニーズに応える自然学校として様々な形態を用いており、自然観察系の事業は一期一会のものが多く、シリーズ化することでコミュニケーションの機会を増やすなどの工夫をし、生き物と緑のつながるネットワークを作り上げる一助となるようなイベントの実施を目指している旨もお伝えした。

次いで J-Power の活動概要をスライドショーで説明した後、水と森と電気のつながりを気づかせる子供向けの実験プログラムを紹介し体験していただいた。具体的には、停電になった際に起きる様々な弊害を紹介し、実際に過去におきた事例写真を見て、身近に使っている電気の大切さを改めて考えていただいた。その後、人力で振って明かりを点けるシャカシャカライトや、白熱灯と発光ダイオードの 2 種類の電灯を用いた手回し発電体験を行った。

前者は、電磁誘導による電気を作るための基本原理に関する

体験であり、後者は、目に見えない電気をつくる力(エネルギー)の違い、節電の大切さを教えてくれる体験である。そしてメインとして、水力発電における「森と水と電気のつながり」を確かめる面白実験(の一部)を各グループ内で行った。加工したペットボトルに森の団粒状の土とただの土を模擬したものを詰め、その上から水を入れたり空気を吹きこんだりすることで、土の構造の違いによる水や空気の浸透力の違い、保水力の違いを確かめた。

休憩中も、体験で用いた器具に人だかりができ、用いなかった他の器具の実践なども行われ、みんな興味津々であった。休憩後は、「ワールドカフェ」という手法による、対話・意見交換会を 4 回のセッションに分けて各テーブルで実施した。各セッションは約 20 分に区切り、対話の中から出てきたキーワードはテーブルの画用紙に書き残していき、各回に各グループの一人を除いて席替えすることとし、テーマも変更した。

セッション 1 では、WS で紹介されたそれぞれの活動の印象、セッション 2 では、暮らしの中のエネルギーと環境のつながり、セッション 3 では、各自の考える「エコとエネのつながり」の伝え方や表現方法、セッション 4 では、暮らしの中の「エコなエネルギーの使い方」について各グループで話し合った。会には実施者も各グループに混ざり、ボランティアスタッフも参加した。話し合いはどれも白熱し、各々が知っている・行っている活動事例など、同じテーマでも色んな角度から話が進み、WS 内の皆さんには真剣に、また対話を楽しんでいただけたようであった。4 つのセッション後、最後に全体での分かち合いとして、今回の WS でどんな「気づき」や「意見」、「なるほど」と思った話やキーワードがあったか、数名の方に発表していただき今回の WS は終了としたが、WS 終了後の昼食時も話し合いを続けていただいた方も多かった。

以下、最後の分かち合いの一部を紹介する。

- ・地域でできること、都会でできることの違い
- ・現代の充分な生活において、使用しているエネルギーの量を知ることの大切さ
- ・家族とのコミュニケーションを行うことの重要性と必要性
- ・便利すぎると見えなくなってしまうものがあるという気づき

## 【最後に】

電気の大切さとその大切さが見えにくい現代生活について、参加者のほとんどに何かしら感じ取っていただいたように思われた。WS 中は誰もが楽しげに実験をし、真剣に話し合いが行われており、さまざまな分野の方々に集まっていたことで、多角的な考え方の大切さや当たり前とされることの大切さを再認識できたように思われた。

# 「サステナビリティ」の基本はこれだ！

実施者:中野民夫(ワークショップ企画プロデューサー)

川嶋 直(財団法人キープ協会)

## 【立教大学 ESD 研究センターの紹介(川嶋)】(13:30~)

持続可能な社会にするためには、企業活動が重要である。CSR はずいぶん世の中に浸透してきているのだが、ESD として企業が取り組んでいるところはあまりない。CSR には ESD が不可欠であり、今後企業をどう変えていくが課題である。そこで、企業と企業人向けのサステナビリティ教育の指針とその研修プログラムを開発している。

## 【サステナビリティ指針の解説】(13:50~)

持続可能性を目指すために、「3 つの公正」の視点を持ち、「3 つのアプローチ」をはかることで危機をチャンスにしていく。

3 つの公正とは、

### ●世代間の公正<未来>

将来の世代が、私たちと同等の環境を享受する権利があることを深く認識し、私たちの暮らしや事業が未来に与える影響を常に考え、行動に活かす。

### ●世代内の公正<他者>

私たちの暮らしや事業が、途上国を始め国内外の社会、経済的弱者とも関係していることを認識し、できるだけ負担を強くないように考え、実践に努める。

### ●ヒトとヒト以外の生物との公正<自然>

人間と自然との関係を根本的に問い直し、人や社会の基盤である生態系からの発想を心がける。

これら 3 つの公正の視点を持つことが持続可能な社会を実現するには必要だが、人間の視野はどうしても狭くて短期的である。

そこで、3 つのアプローチ

### ●「対話」による新たな価値の創造

### ●「参加体験」型の学び

### ●「地域固有の知恵」の見直し が必要になる。

企業にとって、これらを踏まえないとリスクにもなるが、持続可能な社会づくりの課題に対して積極的に取り組んでいくと、チャンスとして活かせる。このような、人も社会も世界も持続できるビジネスを創出することができる企業人を育む環境づくりが大切。「3 つの公正×3 つのアプローチ=危機をチャンスに！」

## 【私たちの暮らしが環境や未来にどう影響しているか?】

(15:00~)

1992 年のリオの環境サミットでのセヴァン・スズキの伝説のメッセージを二人組で読み合い、さらに、私たちの暮らしが環境や未来にどう影響しているのかを、小グループで話し合った。

## 【『世界がもし 100 人の村だったら』体験】(16:00~)

次に、私たちの暮らしや事業が同世代の人々とどう関わっているかを考えるために、開発教育協会の「世界がもし 100 人の村だったら」プログラムからいくつかのワークを体験。

世界には 63 億人の人がいますがもしそれを 100 人の村に縮めるとどうなるでしょう?この本は、人口割合や、エネルギーの消費、現状などを身近に感じることでき、貧しい人の現状を豊かな人が理解するのが容易になる。これを体験するために、参加者一人ひとりにカードを配り、このもし世界が 100 人だったら、という世界にあてはめて、役割を決める。

そのカードには、お年寄りなどの年代、性別、アジア人などの人種、富裕層などの経済的分別、などと書かれている。また人口比など日本と世界を比べるのに容易になっている。それを実際に、このワークショップでも、「子ども」と書かれた人はこちら、「お年寄り」はこちら、と移動することで参加者の方々も「初めて知った!」「こんなに!」など、驚きの声が上がった。

その後、参加者を実際の人口の割合で、富裕層:中間層:貧困層=1:3:1のグループに分けた。

世界の総所得の配分を、ここではビスケットとお茶で実体験してみた。世界の総所得の割合を見てみると、富裕層は全体の 82.7%。中間層は 15.9%。そして貧困層は 1.4%である。この割合で先ほどの各グループへ、ビスケットとお茶を配った。そうすると当然、富裕層は、大量のビスケットと、大量のお茶を得て、食べることができずに持て余していた。逆に貧困層は本当にわずかに量のビスケットとお茶しか得ることができなかった。

この体験での感想は、

《中間層》 少ないが両隣をみなければ何とかやっていける。貧困層に何とかしてやろうとなる、シェアできる。(位置的に) 富裕層も見える。

《貧困層》 隣をみなかったら非常に少なくともみんなに分け合いやっていける。(位置的に) 富裕層の事は全く見えない。

《富裕層》 もしビスケットをあげると施すという気持ちになってしまいイヤ。ビスケットが多すぎる。捨てるしかない。位置的に貧困層は全く見えない。

## 【ふりかえり】(16:45~)

- 知ることが重要であり、知らなければ、行動には移せない。
- 公正とは、基本的人権であり、十分に整備する必要がある。自らだけの行動では、変わらず、まずは、政治が変わらないとだめ!
- 日本はこの意識が低い、変えないといけない。

# これだけは知っておきたい！生物多様性の基礎知識

実施者:安西英明(財団法人日本野鳥の会)

## 【参加者からの希望】

参加者に、自己紹介とともに「このワークショップでやりたいこと・やって欲しいこと」を語ってもらったところ、『基礎知識を知りたい』『宇宙と生物多様性について話して欲しい』『使える小ネタを教えて欲しい』『野外に出たい』などの希望が出された。

## 【生物多様性の基礎知識】

まず、拙著「基本がわかる 野鳥 eco 図鑑(東洋館出版)」から抜粋して、

- ①『人の常識は地球の非常識』
- ②『エコライフの基礎』
- ③『私たちは何者か?』
- ④『私たちはどこからどこへ?』

などをテキストに、基礎知識について講義した。

野鳥のヒナを拾って助けようとして、親鳥と引き離してしまう人が少なくない。手を出す前に、相手のことを知るようにしたいが…。

### <基礎その1>

最初に知るべき基礎中の基礎その1は「生物とは?」「生命とは?」について、よくわかっているわけではないという大前提だ。スズメやカラスでさえ種を見分けられる人は少ないし、数や寿命や生態などわかっていないことの方が多い。ほ乳類の霊長目ヒト科に分類されるホモ・サピエンスという種についても、例えばセルロースが消化されるのは腸内細菌のお陰であるが、1人のお腹に100兆はいると言われる細菌に関して、まだ2割ほどしかわかっていない。

### <基礎その2>

私たちは明日があるものと思っている。でも、野生生物は持続可能な自然のしくみ(生産、消費、分解)の中で、日々、瞬間がサバイバル。私たちが気づくのは、目に見える命の中の、生きのびた一部でしかない。ただし、ほんの一部であっても、その背景にはたくさんの命のつながりがあるという事実を知る。

野生生物や自然へのアプローチはさまざまあるが、一つにはあるがままを楽しみながら、あるがままを知り、あるがままを損なわないようにすることをお勧めした。生物多様性の保全と持続可能な未来のために、物理的な欲望を拡大させないベクトルとしても意味を持つと思われる。

## 【野外での観察】

希望に沿って、野外に出て自然観察を行った。木々の冬芽を

例に「春の準備」や「常緑樹と落葉樹の戦略の違い」、種子を例に「散布作戦のさまざま(鳥作戦、けもの作戦、風作戦など)」、草本を例に「分類(種までわからなくても、共通した特徴から仲間を見分ける)」などを解説した。

また、コケ植物を観察しながら植物の歴史(コケ〜シダ〜種子植物)に思いを馳せてもらったり、地衣類を観察しながら、植物でも動物でもない命について考えてもらうなどした。

野鳥ではシジュウカラ、カワラヒワ、スズメ、ハクセキレイ、ハシブトガラス、コゲラなどが見られたが、カラスについては「ペアか?ファミリーか?」「鼻の穴は見えるか?」「瞬膜(ほ乳類では退化)は見えるか?」などを観察した。

## 【「地球と宇宙」「生物とヒト」クイズ】

室内に戻り、小ネタ紹介(鳥の羽からヒトという動物を考える)のあと、宇宙と生物多様性をテーマにしたクイズを行い、宇宙やヒトという生物についての基礎知識を紹介した。主な問題を記しておく。

### 「地球と宇宙」

- ・太陽の温度はどのくらい?
- ・地球から太陽までの距離はどのくらい?
- ・月はどうやってできたか?月のお陰って何?
- ・太陽系を含む銀河系の直径はどのくらい?
- ・銀河系に恒星や惑星はいくつある?
- ・宇宙に銀河はいくつある?
- ・宇宙の年齢は?先は?はしは?

### 「生物とヒト」

- ・霊長目(サル目)は何種いるの?その特徴は?
- ・ヒトの細胞の数はどのくらい? 毎分死んで再生される細胞の数は?
- ・1回の鼓動で送られる血液の量は(1日で)?
- ・毛細血管は何本ある?
- ・雄にも乳首があるのはなぜ?
- ・手足はいつ、どのようにできた?
- ・雌の嗅覚が優れているワケは?
- ・人間はなぜ雌が着飾るのか?

## 【まとめ】

最後に2グループに分かれて、「生物多様性とは何か?」「それを伝えるには? 共有するには?」などについて話し合い、発表しあって終わりとした。

# 生物多様性を普及する環境教育を目指して

実施者: 湊 秋作・岩淵真奈美(財団法人キープ協会)  
日鷹一雅(愛媛大学 環境 ESD)

## 【導入】

「生物多様性は、遺伝子・種・生態系の3つからなっている」そう言われても、なかなかわかりにくいものです。生物多様性を五感で理解するポイントとは何かを感じるべく、麓の「八ヶ岳田んぼの学校」にバスで出かけた。

車内でまずは自己紹介。好きな生きものは虫・鳥・哺乳動物・植物など…皆さん興味は様々。その他、樹上動物のための歩道橋「アニマルパスウェイ」を見ながら生物多様性保全の事例紹介をしたり、地域の地質や植生の話をしたりと、車内は熱いトークで盛り上がった。

## 【田んぼでのプログラム：冬越ししている生きもの探し】

自己紹介を踏まえ、ヒトの「多様性」が表れるグループとなるよう全体を3つに分け、生きもの探しを行いました。『テーマは「冬越し」。田んぼで見つけた生きもの越冬の様子を、周りの環境状況も含めて考察しよう』と呼びかけると、皆の行動にも多様性がみられた。網で池の水をすくう人、スコップで地面を掘る人、田んぼに敷かれた脱穀後の稲束をひっくり返す人など、まるで子どもに戻ったかのように夢中になって探していた。

茂みの根元の落ち葉をどけ、地面を少し掘ってみると、ガガンボの幼虫に似た虫が多数隠れているのを発見。おしくらまんじゅうのように身を寄せ合っているのは、寒さに耐えるためなのか？ いやいや、それとも…？ここでは各自が多様な解釈を出し合い、多様な仮説を提案していくことが重要。他にも木の板の下から飛び出すネズミの仲間や、藁の下で平たく寝ているコオイムシ。池の中には多数のゲンゴロウやヤゴたち。池の水面で瀕死の赤トンボや茶色がかかったイナゴたちも何とか寒さをしのいでいる様子。虫や哺乳動物を観察するときは、形態にも注目してみる。体全体の形とか、足に毛がはえている、口がどんな形をしている、と皆さん楽しそうに観察していた。

同時に、発見した生きものはどこで生まれてどこから来たのか、越冬した後はどこへ行くのか、地図と空中写真を広げて考えた。田んぼの周辺では、水路・畔・本田・ため池・周囲の森林と畑など様々な環境がパッチ状に構成されており、生きものは季節や各々の生活史に応じてこれらの環境を使い分けながら生活している。実は、日本の絶滅危惧種の多くはこれらの環境に暮らす生きものたちである。また、もう寒くてトノサマガエルは声は聞けなかったが、鳴きまねのインタープリテーションも交えた意外な冬越しの多様性の紹介もあり、まさに、冬越しのセンス・オブ・ワンダーであった。最後に当日の朝捕まった、田んぼに暮らす小さなカヤネズミを紹介し、春の七草探しで冬越し観察は終了。

## 【神楽団のお話】

生きもの探しの後は田んぼで車座になり、天照大神の神話を神楽に代えて舞をつくった地元、五町田神楽団の方のお話を聞いた。昭和16年に始まった出雲系神楽は一度廃れてしまったのだが、伝統を守ろうと25年前に復活させ、毎年大晦日の深夜から1月1日まで舞いを奉納する「2年舞」を行っているとのことであった。神楽団のみなさんの真摯な想いが参加者に伝わっていった。

## 【発表】

帰りの車中では班ごとに、見つけたものから「冬越し」の仮説を発表した。仮説をたくさん考えることが生物多様性をより理解する第一歩。生きものたちの暮らしを、人それぞれの自由な発想で想像し披露しあうことが大切である。今回は、草の根元に集団でいた幼虫は成虫になって町へ行き、産卵場所を探して田んぼへ戻ってくるのでは？など、いくつかの仮説が出たが、多くの方は生きもの探しに夢中で、考える時間の確保を忘れてしまったようであった。

## 【COP10 報告】

続いて清泉寮にて、COP10での体験・学びを報告した。

日本の動き、分断された生息地の森を橋でつなぎ、ヤマメなど樹上動物たちの移動経路を確保する取り組み「アニマルパスウェイ」の開発と成果の紹介、企業とのパートナーシップの重要性、そして田んぼ国際環境会議の提案などについての報告を行った。特に企業の動きでは経団連を中心とした大きな流れがあり、社員への環境教育が事業革新と同時に一人ひとりの意識変革、ひいては環境教育の社会化につながることを伝えた。

## 【まとめ】

このWSでは、種の多様性を“「場」利用”の視点から迫った。ひとつの生きものが様々な場所を使って生活していることが分かり、それぞれの生き方を理解し、その理由を考えることで生態系のつながりを感じる。生物多様性ではこのような生態系のつながりと、そこにいる生きものたちを取り巻く総合的な環境がポイントとなっている。

今回は、田んぼで生きものたちが「場」によってつながっている様子を見ることができた。生物のつながりを、食う・食われるの関係だけではなく、「どうして、ここでは、今、こんな事をしているのかな？」といろいろ見ながら、じっくり考えてみることも重要である。

# 森を考える ～木質バイオマスで 100 年先の森づくり～

実施者:佐々木豊志(くりこま高原自然学校)

大場隆博(栗駒木材株式会社)

古川正司(株式会社さいかい産業)

## 【活動紹介① / 古川正司】

「森林エネルギーの地産地消によるスマートビレッジの実現に向けて」

間伐材や端材を再利用して地球に優しいペレット燃料とペレットストーブを開発し、木質ペレット推進協議会(WPPC)の理事長としても活動している。

まず日本国内のエネルギー利用についての話をした。エネルギー利用から見た新しい地域経済を、海外から石油を買うという「外産地消」から海外へ排出権を売るという「地産外消」にすることで、支出よりも収入が増え雇用も増えるという仕組みがあること、また3リットルの石油を消費する間に発見される石油はわずか1リットルのみであることなど、エネルギー事情に関わる内容であった。

続いてペレットストーブの話。ペレットストーブは、燃料に木くずを利用しているため、二酸化炭素の排出量も少なく地球環境にも良いものである。また価格も安い。しかし石油とのコストの差は大きく、燃料が入りにくいという欠点から消費がなかなか増えていかないのが現状である。

## 【活動紹介② / 大場隆博】

「森を考える 木質バイオマスで 100 年先の森づくり」

栗駒木材株式会社で「木材をとおした循環型の社会を構築する」をテーマに活動している。造った家をせめて100年間は維持させ、次の世代につなげていきたいという思いから、燻煙(くんえん)乾燥を取り入れている。

現在、流通のスピード化により完成後の乾燥で木材に形状変化が起り、住宅にさまざまな弊害を発生させているという現状がある。それを防ぐためにも昔ながらの燻煙乾燥を用いることで、ひずみの均一化や強度の強化になり、結果として家が長持ちするのである。乾燥させていく過程において木材の収縮(ひずみ)しかし「くんえん乾燥」にした木材は100%前後の水分を約30%まで乾燥させることができ、さらにその後3ヶ月程度天然乾燥させることで、木材の繊維を破壊することなく乾燥でき天然乾燥の期間も3ヶ月に短縮できる。

今後の展開と目標としては、

- ①木材を通して循環型の社会の構築
- ②山づくりから家づくりまでの暮らしの構築
- ③エネルギーの新たな開発(バイオマスエネルギー)
- ④一般市民を巻き込んだ産業の構築

(日本の森バイオマスネットワーク)

⑤異業種間交流・連携

⑥地域の雇用の確保(地域産業) などを考えている。

## 【ギザギザ山のおはなし】

活動紹介②の最後に紹介した、田中優さんの「エコラの森のものがたり」という短いお話の内容である。これは大場ら栗駒木材の社員の実話をストーリー化し、誰も管理しなくなった国内の山を守りコモンズの森(共有の森)にしようという動きと田中氏が理事をされている天然住宅バンクの想いを描いたものである。

## 【感想・情報共有】

### ●参加者の感想

- ・地産外消から地産地生ってというのは本当にそうだと思う。
- ・経済で世の中は動くのではない。自分たちの利益だけではなく、目先を見据えた利益を考えなければならない。
- ・自然学校が持つノウハウで林業を営むことができれば、また教えられると良いのだが。

### ●実施者の感想

- ・一人で動いているのではなく、やるなかで出来上がってくるつながりがある。
- ・ものすごく実効性があり、具体的だなと思った。
- ・植林するときは100年間で考える。戦前に戻るべき。
- ・荒地にちょっと手を加えてあげれば、荒地は勝手に森になる。
- ・人間と森は相性が良いのに、人間が勝手に相性を悪くしている。
- ・過疎地域なんてなくしてみんな都会に住めばいいのでは、という考えの人はいっぱいいるが、それは間違っていると思う。
- ・地球上に暮らしている以上、「共生」は避けては通れない。

### ●ボランティアスタッフ感想

日常生活においてあまり深く考えることのない「エネルギー」「木材」「住宅」について興味深く考えるきっかけとなったWSだったように思う。参加者にとっても新鮮な知識・考え方が多く得られたようで、非常に興味を持って話を聞いたり意見を言ったりしていた。また、本題以外の話もたくさん含まれており、古川さんが原子力発電所で勤務されていた経験談等にも花が咲いていた。木材という日常生活においては非常に身近でありながらあまり深く考えることのないものにフォーカスを当て、その利用法や保全について考えられたことで、とても有意義な時間を過ごすことができ良かった。

# 大学生のための食育プログラム

実施者:佐藤敬一・上尾歩未(東京農工大学農学部)

## 【はじめに】

各自で木の名札を作り、自己紹介をした。参加者は大学生・環境保全活動センターの職員・食品会社勤務の方・JEEF など、大学生には限らず食育に興味のある方々が参加した。ワークショップ全体の進行は上尾(東京農工大学農学部4年)が行った。

## 【アイスブレイク】

屋外でアイスブレイクとして簡単なゲームを全員で行った。言葉の指示とは逆の体の動きをするという、頭と体を使うゲームを行った。頭と体を使い、皆で一つの行動をしたことで、参加者同士の仲はすぐに打ち解けることができた。

室内に戻ってからは、五大栄養素とその働きについて説明した。参加者それぞれに五大栄養素の各要素を振り当て、それぞれの働きを表すスライドが出たら手をあげるというゲームを行った。

## 【食育基本法】

食育基本法や食育の理念・分野についてスライドを見ながら説明した。食育基本法は平成17年6月、健全な食生活を推進・実践するために制定されたものだが、あまり知られていない。

食育の理念は食に関わる人間形成・豊かな人間形成・心身の健康の増進の3つであり、さらにそれらを8つの項目から成る3分野(食に関する基礎の習得・食に関する基礎の理解・食に関する知識と選択力の習得・健全な食生活の実践)にまとめている。

## 【ワークショップ】

はじめに①食を通じたコミュニケーション ②食に関する基本所作 ③自然の恩恵等への感謝、環境との調和 ④食文化 ⑤食料事情ほか ⑥食品の安全性 ⑦食生活・栄養のバランス ⑧食生活リズム の8つの政府が定めた食育の重点項目を、重要だと思ふ順に1番から8番まで各自で順位を決めた。そして、議長を決めること・多数決で決めることは禁止とし、最終的に皆が納得できるよう参加者全員の議論で順位を決めるというワークショップを行った。

職業や生活状況の違いから、全員の食に対する価値観は全く異なり、30分以上もの議論をしても順位は決まらなかった。

日本人の食に対する過度の安全志向についても議論をした。このワークショップでは、順位を決めることに意義があるものではなく、それぞれの立場や意見を知ることや食を考えることを目的としている。そのことから、「結論が出ないのは当たり前である」という佐藤の言葉でワークショップは終了した。

## 【演習 昨日の食事バランスは?】

厚生労働省と農林水産省によって、コマで表わす食事バランスガイドが策定されている。コマはバランスが悪くなるとすぐに倒れてしまうもの。食事バランスを保ち、コマを回し続けることが毎日の健康維持につながるということになる。それぞれの食事バランスを考察するため、ワークシートを使い演習を行った。まず、朝・昼・夜と一日にとった食事を全て書き出し、主食・副菜・主菜・乳製品・果物がいくつ(何SV)含まれているのかを数える。

そして、食事バランスガイドを参照しながら目安を記入し、合計と比較し、評価・改善策の考察を行った。食事をきちんと見直すことが少ないため、自らの結果に驚いている参加者もあり、今回のワークで食事を見直すきっかけになったようだった。

## 【3群点数法】

大学生協で実施している3群点数法という制度を説明した。購入した食のレシートに、赤・緑・黄に分類した栄養素を載せ、点数化しているものである。購入者は、自分がとる食事の栄養素を点数で知ることができ、食生活を考えるきっかけとなっている。

## 【レシートクイズ】

どのメニューのレシートがどの3群点数法のものかを当てるレシートクイズを行った。エネルギー・塩分・点数を比較した上で、どのメニューに当てはまるものなのかを考えることは難しくなったようで、正解率は高くはなかった。

## 【ふりかえり(感想記入)】

3.5時間ワークショップを行ってみて、各自が思ったこと・発見したことについて話し合いをした。食品メーカー勤務の方でも発見が多くあり、有意義な時間であったとお話していた。また、社員教育で行ってみたいとの意見も出た。

「食べることは生きること」。現在している食事が将来の体や寿命に大きく関係しているということを実感し、からだづくりである食の大切さを多く学んだワークショップである、大学生に限らず、大人にとっても重要なワークショップであると感じてもらえたようだ。

## 【バードコールづくり】

参加者の記念として、佐藤研究室オリジナルのバードコール作成の時間が最後に設けた。

# 命をいただく ～ニワトリと生きる～

実施者:遠藤 隼(ホールアース自然学校)

## 【はじめに】

つい50年近く前までは里山と呼ばれる場所の軒下には「ニワトリ」が飼われており、生活の一部となっていた。食事の残飯を食べてもらったり、卵を産んでもらったり、特別なときには屠畜をし、そのお肉もいただいていた。

私にとって屠畜とは「家で食事の調理をする」その延長であってほしい。そういった視点から365日×3食経験している「食事」。自分が生きるために切っても切り離せないこの行為に参加者の皆さんがそれぞれ、素直な反応で、率直な意見で、自分なりの考えを持って帰って欲しいと考えている。

今回WSの参加者は、専門学校の先生から幼稚園の先生・環境省の方など、あらゆる分野の方々がいらしていた。皆さんWSの経験を通し、自分がどのような反応をするか確かめてみたい、という方が多かったのが印象的である。

## 【ニワトリの解体】

基本的に参加者の方と共にニワトリを解体していくために、まず参加者の中でニワトリを吊るして頸動脈を切る方を一人決めた。この屠畜一番の難しいポイントに関わらず、女性が自ら名乗りをあげてくれた。

ニワトリの首元にナイフを刺し、頸動脈を切り、血をすべて抜き去ることが、一番静かに、そして、おいしくお肉をいただける方法である。

5分ほど血を落とすし続けるのであるが、途中、血を触った人はそれぞれに「暖かい」と口にしていった。

その後、手羽や足を取っていくのですが、ナイフでは骨は切れないため、関節部分に刃を入れ、関節と腱を分断することにより解体を進めていった。

特に皆さんに変化があったのは、ニワトリの皮を剥ぐ瞬間。スーパーなどでみられる売り物の鳥肉の姿が見えてきた瞬間である。

そのときから、WSの雰囲気が変わり始めることとなる。WSの始まりは、皆さん緊張した面持ちであったのが、肉が見えた瞬間から、口数が増え、次第に笑顔も見え始めた。

これは、私たちにとって生き物から食べ物へと変わった瞬間だったのだろう。

まだまだ、解体するにつれ見慣れない部位が出てくる。特に内臓系は売られている物とは多少形が違って、皆さん興味津々の様子。

特に砂肝の中身には、皆さん名前の由来どおりで「納得！」だった。

そういった内臓(砂肝・レバー)・ササミなどはとても新鮮で、刺身にして食べると口々に「美味しい」「臭みが無い」など驚きの声。やはり鮮度抜群な証だ。

また、ササミ・むね肉・砂肝・ハツ・セセリなど普段聞きなれている部位は、実際にどこにあるのかを見た。

## 【ふりかえり】

ひとまず、解体は終了し30分、休憩を取るとともに、ソロタイムの時間とした。自由に感じたことを一人でじっくり考え、ふりかえりシートに落としてもらい、書き終わった方は、順々に焚火のもとに集まってきて、WSについて意見を共有したりしていた。

最後には全員で意見を話し合った。

「血に触ったことで、命の温度を体感した。」

「生き物から食べ物に見える瞬間が早かったのはなぜなのか。」

「子供の前で行うとき、子供はどのような反応をするのだろうか。」という意見が出た。

また、「このようなWSを体験すると、『鶏が食べられなくなるのではないかと』と周りの人に言われていましたが、実際には食べることができました。」という意見もあった。

一方で、「まだ心の整理ができておらず、動揺しています。」という参加者もいた。

## 【まとめ】

毎回、WS後の意見がばらばらになる。しかし、「食」という行為に一つの決まった答えはない。WS直後にはそのときの答えがあり、寝る前にまた答えが変わるかもしれない。しかし、これをきっかけに食べ物って何だろう。食べるってなんだろう。と考えて欲しい。

また本来、里山生活では家畜動物からお肉をいただいていた。そんな生活の中では現代のように、毎日毎日お肉をいただく事はできなかった。肉が気軽に手に入る現代の食文化についても疑問を感じてくれたらと思う。

ホールアース自然学校のある静岡県の小学校では、食後には「ごちそうさま」のかわりに様々な「命」をいただいた気持ちをこめて「いただきました」と言う。

それでは皆さん「いただきました!!」

# エコロジカル・シンキングゲーム

実施者: 奥宮健太 (BEANS BEE)



## 【「エコロジカル・シンキングゲーム」とは】

現役の生物調査員が開発した“生物シミュレーション型ボードゲーム”。

動植物の役割になって、駒を動かすことで、「共生」「すみわけ」「循環」「捕食と被食」など、自然のしくみが理解できる。環境学習プログラムとして活用できる。

## 【ゲームの内容】

河川的环境をモデルにしたボードゲーム上に、河川に生息する動植物のコマを増やしていくゲーム。参加者は、それぞれ5種の動植物（モズ、コバネイナゴ、ヤマトシジミ、シロツメクサ、オギ）にわかれて、自分が担当する動植物のコマを、動植物の生態にそって動かし、増やしていく。

## 【ゲームのねらい】

自然環境を知ろうとすると、どうしても、本や図鑑の専門用語や動植物の種名といった知識に偏重しがちだ。ゲームで、自然を学ぶと、頭だけでなく、体験として感覚的に自然を理解することができる。感覚的に自然が身近になると、親しい人に接するように自然に接するなど、自然に対するかかわり方に変化が起こることが期待できる。

## 【スタッフがみたゲームの様子】

- ・自分の担当の生き物になりきっていた。
- ・生息地域や食べ物、動ける範囲の工夫次第で食う・食われるというサバイバルになり、盛り上がっていた。
- ・食べられないように逃げたり、いかに増やすか考えたりと、苦戦しているようだった。

## 【ふりかえり】

### ＜参加者の気づき・学び・発見＞

- ・植物が強かった（特にオギが優先）。
- ・思い通りにはならない。
- ・植物は移動できない分、場所だけが広がった。
- ・モズが増えた時は、ゾッとした。
- ・今日の結果は良い状況の生態系ピラミッドができていた。

- ・植物は生息環境が特定されている→周りの環境が開発・汚染されたら…
- ・島（狭い地域）は環境の変化が激しい。
- ・相手のことを考えると、自分も生きられる！＝共生！
- ・増え続けることはない。
- ・生態系ピラミットの上にいるモズは生き延びにくい。
- ・食物連鎖がよくわかる。
- ・自然や生き物を全て搾取してはいけない→生態系ピラミットを崩してはいけない。
- ・環境は絶妙なバランスでできている。

## ＜ゲームについての意見＞

- ・担当する動植物の役を替えて、新たな人とゲームをすると発見がありそう。
- ・自分の住んでいる地域の動植物をベースにやってみたい。
- ・いきなりブルドーザーで一面なくなるなど、ゲームに人間の行動を入れてみたい。
- ・ゲームのフィールドを「川」だけでなく、「森」を入れてみたい。
- ・外来種のコマを入れて、外来種による影響がわかるようにしてみたい。
- ・勝ち負けがはっきりせず、自分の意図が反映できない面が多いゲームなのに面白い。
- ・学ぶものがあり、不快感が残らないゲーム。

## 【感想】

### ◆実施者

談笑しながら、楽しんでゲームをして頂け、よかったです。ふりかえりでは、ゲームの体験を、実際のフィールドや生態学の知識と結びつけて発言された方が、ご自身で納得している様子が印象的でした。実施者としても、勉強になりました。いい機会をつくって頂きありがとうございました。

### ◆スタッフ

生き物の視点で生態系を考えることができるゲームでした。最初にボードを10秒間見た時は人間の視点でしたが、ゲーム後に見ると生き物の視点で見ることができました。生き物との共生・生き物同士の共生を考えるときには、その視点に立つことが大事だと学びました。

## 【参加者アンケート】（満足度平均：86.1%）

- ・非常におもしろかったです。シロツメクサとチョウのように「共生している」ということがゲームをしながら、よく理解できた。
- ・モズやイナゴの増減、ヤマトシジミが減ったら増えにくい状況等、それぞれの生態的特徴がでていたので、「食物連鎖」や“生物多様性”を伝えるきっかけになる。真剣に遊んでいても、気づけるものがある、というのがとても良い発見になりました。

# 「地球交響曲第7番」を見て、みんなで語ろう！

実施者：高木幹夫・武石 泉・岡 亜希子 (NPO 法人体験学習研究会)

## 【ワークショップ構成】

- 第1部 地球交響曲「第7番」の鑑賞  
第2部 感想の共有

### 【第1部 地球交響曲「第7番」の鑑賞】

地球交響曲(ガイアシンフォニー)とは、「地球はそれ自体がひとつの生命体である」というガイア理論に基づき、龍村仁監督によって制作されたドキュメンタリー映画シリーズである。地球交響曲第7番は、「全ての生命が深く健やかに生き続けるために」をテーマとして、以下の3人が「自然のもつ治癒力」について語る。

- ①高野孝子さん(環境教育活動家、NPO 法人エコプラス主宰)  
②グレッグ・レモンさん  
(元「ツール・ド・フランス」チャンピオン)  
③アンドルー・ワイルさん(アリゾナ大学医学部教授、医学博士)

#### <①高野孝子さん>

人工衛星を使って世界中の子どもたちに旅の様子を伝えるために、犬ノリとカヌーだけによる北極海横断を4ヶ月かけて成し遂げた。この間、何度か命の危機に遭遇した経験をした。過酷な自然のなかで出会った先住民の方に、「人として大切なことを学ぶには自然のなかにいけば全てわかる」と教えられたという。

現在、ふるさとで、ご主人と大地に根ざした様々な環境プロジェクトに取り組んでいる。伝統農法による米作りをしていると、これが私達を今の21世紀に繋げてくれているものだと実感するという。幾世代も伝えられてきた知恵(叡智)が田んぼにあり、自分の知らない祖先たちとのつながっていること。

土着の科学である「ネイティブサイエンス」とは、その人たちの世界観と文化の中で意味をなすもの。風土や気候に合い、その場所で手に入れられるものや方法しか使わない。合理的で科学的といえるこの「ネイティブサイエンス」は、未来に向かう道を示している。

#### <②グレッグ・レモンさん>

3週間に渡ってフランス全土を一周する自転車レース「ツール・ド・フランス」で、1986年、ヨーロッパ出身ではない選手として、史上初めてのチャンピオンとなった。その翌年、散弾銃を浴び瀕死の重傷を負うが、1989年、全身に銃弾を残したまま復帰。再びチャンピオンとなる。

初来日以来、日本の文化や神道に惹かれている。伝統技術は、同時にハイテクでもある。「機械を使わずに目で計測し具合を決

めることで、命を与え1つひとつの個性を生み出す」ことは、グレッグの自転車を調節するやり方と共通している。

神道のすべての自然現象の中に神がいるという考え方は、古いようで最新の科学の考え方に似ているともいう。

意識的に自然とのつながりを取り戻す努力が必要であり、自転車で自然の中を走るとは瞑想の1つであると捉えている。自転車に乗っていると、不思議なくらいにものが見えるようになる。音やにおいに敏感になり、心が開き、脳が活性化し、直観力が冴えわたる。

私達人類の営みは、必ず地球の未来に大きな影響を及ぼす。伝統を受け継ぐと同時に、変化を受け入れる心の柔らかさをもつこと。

#### <③アンドルー・ワイルさん>

世界各地の伝統医療と西洋近代医学を統合する「統合医療」の第一人者。生命の「自然のもつ治癒力」という考え方は、彼の実践と研究によって世界的に広まった。

西洋近代医学の限界を痛感し、こころとからだの関係を追究する道を切り開くことに決め、世界各地の伝統医療の叡智を見つけ出し、「統合医療」を導いた。

今の私達は「自然のもつ治癒力」について、あまりにも無知である。自然治癒力に気づき、活かす道を選べば、はるかに健康的に暮らすことが出来る。薬はあくまでも自然治癒力の助けである。

私達の日々の営みが、地球環境に大きな影響を与えている。私たち一人ひとりが自分の場で、自分のやり方で、一步踏み出すことによって、地球規模の変革が現われるだろう。

### 【第2部 感想の共有】

- ・世界中を周ったが、自分たちの足元を見直したら、そこにあったというのが印象的であった。
- ・世界規模でも、足元規模でも活動している高野さんの生きざまに感銘した。
- ・日本の先人が全身全霊で直感的に捉えた、ものの価値は間違いないものなのだと感じた。
- ・神道について改めて勉強してみようと思う。
- ・この映画を見て感動したで終わらずに、「今後どう動くか、どう応用するか」が大切であると思う。  
(当日午前中に実施された「日本の自然観」のワークショップ参加者が多く、関連した気づきや感想が多くみられた。それぞれに刺激を受けた時間となったようであった。)

# イナカと子どもと日本の未来を考える

実施者: 高森彦輝 (京都市立洛西中学校)



## 【スケジュール】

- 13:30~14:00 自己紹介・ワークショップの説明
- 14:00~14:35 第1回 話し合い
- 14:40~15:15 第2回 話し合い
- 15:20~15:55 第3回 話し合い
- 16:00~16:30 まとめ

## 【自己紹介とワークショップの趣旨の説明】

実施者は、京都の中学校で理科の先生をしている。学校で生徒たちと接するなかで、最近の子供たちを感じたことは、「さみしさ」と「大人への不信感」である。

また、地元である愛知県設楽町に帰り、自然の中で暮らしたいという思いもあり、「地元に戻って、自分で自然学校を作ろう」と思い立った。

「子どもたちと中山間地域と日本の明るい未来」のための自然学校、そのためには、何が必要か、どうすればいいのか、どのようなテーマを持った自然学校がいいのかなど、参加者それぞれが考え、知恵を出し合い、一緒に企画を作っていくというワークショップとした。

## 【ディスカッション】

ここから、1グループ3~4人で3グループに分かれ、話し合いをした。それぞれのグループで、出た案や意見を模造紙に書いていった。

そして、30分ごとに、休憩を挟みつつ、グループのメンバーを入れ替えて、また違うメンバー同士で話し合いを行った。

毎回、違うメンバーと話すことで、また新たな意見が生まれていた。また、ゴザを敷いて少人数で車座になって話し合うと、とても密度の濃い話が行われていたように思った。

出てきた主な意見としては、以下のようなものがあった。

- 農村交流
  - 田舎に住む人がその土地に自信を持ち、また都会に住む子どもたちが、都会ではできないような体験をし、成長できるような交流。
- コーディネーター (田舎と都会をつなぐ)
- 農家レストラン
  - 古い民家を改装して、無理しない程度で続けていく。
- 地元に古くから伝わる祭りの復活
  - 人間性が育つ、人生の先輩が側にいる、青年とお年寄りが交流する機会。
- 地域の伝承・昔話
- 地域との連携
  - (例): 近くの宿をお願いして、子供たちが泊まる場所を提供してもらったり、郷土料理を出してもらおう。
- 無理しない程度で長く続けていけるような地域に根ざすプログラム・仕組みを考える。
- 商店街
  - 子どもの育つ場所

## 【最後に】

各自が、日本の地域や子どもたちに対して、不安や疑問をもち、それを解決するためにはどうすればいいのか、熱く議論し合う参加者主体のワークショップとなった。

学生・保育士・自然学校の職員・地域活性化コーディネーターなど、いろいろな立場の人が集まり、話し合うことで、より深ささまざまな視点から解決策を考え出すことができるのだと思った。

# 企業の行なう自然体験活動と地域のつながりを考える

実施者: 大曾根健久・櫻井良樹・湯浅 隆 (東京電力自然学校)  
藤木勇光・小林庸一・南 栄助 (J-POWER 電源開発)

## 【概要】

東京電力自然学校は今日まで、他の団体が取り組む活動を大いに参考にし、積極的に事業を展開してきた。しかしながら、「自分たちはどこを目指しているのか」「企業の環境活動はどこへ向かえばよいのか」といった問題意識を近年持つようになった。このことについて川嶋直氏(財団法人キープ協会)と会話を持ったときに得た「いろいろな人と話し、自分たちに何が求められているのかを聞いて、そのニーズに応じていけば良いのではないか」というお話をうけてワークショップを開くことにした。

当日はスタッフを含めて企業、環境教育施設、学校など多様な立場に属する37人が参加し、5グループに分かれてのグループワークと全体共有によって進化した。

専門性の高低を縦軸に、活動の性格が社会貢献・CSR寄りか、本業サポート寄りか、を横軸にとった四象限図を印刷した模造紙を各テーブルに配り、そこに直接書き込んだり付箋を貼ったりしながら対話を進める手法をとった。

## 【実施内容】

- ◆主催者の自己紹介・導入・グループ内での自己紹介 13:30～
  - ・アイスブレイキング
  - ・本ワークショップの背景と目的の説明
- ◆グループワーク STEP1 : 13:45～
  - 「体験活動の内容を模造紙に書き込み話し合う」
  - ・自社もしくは自分が知っている企業の取り組みについて、現状の位置と目指す方向へのベクトルを書き込む。
  - ・それをもとにそれぞれの考えを話し合う。
- ◆STEP1 の全体共有 14:15～
- ◆グループワーク STEP2 : 14:30～
  - 「事例を付箋に書いて貼り、紹介し合う」
  - ＝取り組みが持つ課題の把握・STEP1 の具体化
  - ・現状が良い事例を挙げて紹介し合う。
  - ・(完全にダメな事例というのではないはずなので) 良いところもあるが悪いところもある事例を挙げた場合は、どうすればより良くなるのかを話し合う。
- 休憩 15:50～
- ◆グループワーク STEP2 続き : 16:00～
  - 「今後企業の環境活動の方向性はどうか」
  - ・事例を貼りつけた模造紙をもとに今後の方向性について話し合う。
- ◆STEP2 の全体共有 16:35～

## ◆まとめ

17:05～

- 今後の企業の環境活動がどういった方向性を持つべきかについて、時間が短かったこともあり、かくあるべしという結論は現時点では出さなくてお出し、出すべきではないだろう。
  - 全体共有の中で参加者から出された多くの意見、特に、
    - ・活動にはきちんとストーリーが存在した方がよいのではないか。
    - ・活動を行う際に企業が持つ強みはマネジメント力なのではないか。
    - ・活動を通じた社員育成を図る場合、その内容と企業理念が合致しているかが大切なのではないか。
    - ・活動を行う上でどうやって資金を調達・捻出していかをより深く考えた方がよいのではないか。
- といった意見をヒントとし、今後の活動に取り組みたい。

## 【全体共有時に出た意見（一部）】

### (1) STEP1

- ・社会貢献がミッションである企業は活動の質を向上させるべきだ。
- ・現在 CSR 寄りに位置しているので本業サポートの方にシフトしたい。
- ・清里ミーティング参加者は CSR 寄りだと考えているかもしれないが、経営者はまた違った視点でいるのではないか。
- ・そもそも CSR は企業基盤全部を含むため、CSR と本業サポートは対立しない。

### (2) STEP2

- ・企業が持っている資金力で、専門性の向上を図れるのではないか。
- ・企業としてどう特徴を出し特化していくのかを決め、差異化を図ることが必要。
- ・本業サポートと CSR が同じベクトルを向き、win-win の関係になるのが望ましい。
- ・企業はマネジメント力に優れるのに対し NPO は専門性に優れるように思われるので、一緒に活動するのがよいのではないか。
- ・ねらい、目標、評価軸をまず決定することで上層部の人事が変わったとしても揺らがない活動を行うことができる。
- ・その土地などを所有している会社が直接活動を行った方が理解を得やすい。
- ・定量的評価と定性的評価を併用し、結果とプロセス両面から評価するのが良い。

---

# 2 日目夜 全体会 2

---

## 全体会 2 「環境教育関連最新情報共有」

司 会：

(公社) 日本環境教育フォーラム理事 川嶋直

1. 日本環境教育フォーラム公益社団法人化について 理事長 岡島成行
2. 日本環境教育学会から 会長 阿部治
3. NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議から  
事務局長 村上千里氏
4. NPO 法人日本エコツーリズムセンターから 代表理事 広瀬敏通氏
5. 公益社団法人日本環境教育フォーラム国際事業紹介 事務局職員 塚原一恵
6. 中国の環境教育に関する取り組み

JICA 中国事務所 環境分野/NGO 連携担当 坂元芳匡氏

# 2 日目 全体会 2

司会：(公社)日本環境教育フォーラム理事 川嶋直

初日の全体会 1 に続いて、全体会 2 ということで、今から環境教育関連の最新情報を共有しようという時間を設けたいと思います。6 名の方にお話をさせていただきます。

公益社団法人日本環境教育フォーラム(JEEF: Japan Environmental Education Forum)は、元々は 1987 年のここ清里から生まれ、1992 年 9 月に任意団体を設立し、1997 年 4 月に社団法人となり、2010 年 6 月に公益社団法人になりました。そしてこの JEEF から環境教育関連の団体が以下のよう

- ・1990 年 日本環境教育学会
- ・2000 年 NPO 法人自然体験活動推進協議会(CONE) ⇒ お話は今日はなしです。
- ・2003 年 NPO 法人持続可能な開発のための教育の 10 年推進会議(ESD-J)
- ・2008 年 NPO 法人日本エコツーリズムセンター

そして最後に、JICA 中国の北京事務所からお越しいただきました坂元さんより、中国の環境教育の現状や JICA の活動についてお話しさせていただきます。中国の環境問題は本当に僕たちにとってのみならず、世界の環境問題の今一番大事な点だと思っております。



## 日本環境教育フォーラム(JEEF) 公益社団法人化について

(公社)日本環境教育フォーラム理事長 岡島成行

こんばんは。JEEF の理事長をしております岡島です。

簡単に近況を報告したいと思います。今日お集まりの方々は、どなたも環境教育に非常にご関心がある方々だと思います。21~22 世紀にかけて、おそらく環境問題は、人類にとってのかなり重大な課題になるだろう、と考えております。ど



うしてもこの環境問題を改善していかないといけない。その改善する方法は、技術の革新だとか、経済・法律・社会のシステムの変革とか、様々なものがあるかと思いますが、そのうちの一つに環境教育というものがあると位置付けております。これから先、我々人類、またその他の生きものにとっても最大の課題に取り組むということは、男性も女性も人生を賭けるに値する仕事であると、そのように考えております。そういう気持ちでもって JEEF はこの 24 年間歩んでまいりました。

近況で最も大事なことは、今年 2010 年 6 月 1 日に公益社団法人に移行したことでございます。公益社団法人の特徴は、より確かな公益性・責任・透明性が求められること、公益目的事業は非課税となること、さらに寄付の優遇措置があるということです。昔、特定公益増進法人というものがありました。それに匹敵する資格を得ることができました。それからまた、公益社団法人になりますと、より公益性が世間にアピールできますし、ご協力頂くことも可能になってきます。事実上、やはり企業さんからもいろいろ応援するには、公益社団法人の方がはるかにやりやすいという

声もお聞きしております。そういうこともあって、いろいろと苦労しましたが、比較的早めに公益社団法人に移行することができました。公益がつきまして、いろいろな意味で透明性を求められており、誰が見ても公益性がきちんとしている、ということを証明しながら作業していかなければいけなくなりました。それは逆に我々にとってもいいことですので、やっていきたいと思っております。スタッフは現在 15 人、会員が大体 1,000 人・団体くらいで非常に会員が少なく、環境教育をやるといっただけでは、何をやっているのかわからないですね。例えばパンダを守る、途上国の子どもに教育の機会を与える、といったことであればはっきりわかるのですが、漠然と環境教育ということで、会員集めがなかなか難しい状況にあります。

JEEF のミッションには、一つに「自然学校の普及」があります。これは自然体験の普及と考えていただいてもよろしいかと思えます。自然学校を日本中にたくさん作ろう、という趣旨で JEEF はスタートしておりますので、自然体験を基礎とした環境教育をやっというというのが、大きな柱の一つであります。一昔前は自然学校などやる人はおかし、できるわけがないだろうという時代でした。それがこの 20 数年間で今は、2010 年自然学校全国調査によりますと、ご夫婦でなさっている小さい学校なども入れると、全国に 3,000 以上の自然学校といったものがあるということでございます。そういう意味ではこの 20 年間で全く考えられないくらい、自然学校というものが普及したと言えると思えます。

JEEF のミッションのもう一つは、環境教育の推進です。環境教育の推進というのは、全てに渡って我々がやることなのですが、ここに書いてある環境教育というのは、どちらかというと都市型の環境教育という意味です。例えば、損保ジャパンさんと一緒に

環境講座を始めてもう 19 年になりますが、そのような都市型の環境教育です。

それからもう一つが、途上国の環境教育支援。これは後ほど、事務局の塚原から説明がありますので割愛させていただきますが、JEEF はこのような 3 つの大きな柱を基に活動しております。

全部を一言で言うと、やはり「環境教育の推進」ということになります。途上国も先進国も我が国も含めて、なんとか環境教育を普及させていきたい、というのが JEEF 最大のミッションでございます。具体的な JEEF の活動については、お手元の資料をお読みいただければと思います。

そして、JEEF の特色は、名前に「フォーラム」がついていて、みんなが集まって作っている、ということです。ですから、理事も、皆それぞれの団体の代表の方が入って下さっています。それから先ほど川嶋さんが説明してくれたように、JEEF は比較的早めに立ち上げたものですから、JEEF の主要メンバーがそれぞれ自分の特質に合わせて、CONE(NPO 法人自然体験活動推進協議会)を作ったり、日本環境教育学会を立ち上げたり、いろいろ活躍してくれました。公益社団法人に移行する時も、いろいろな団体の方がそれぞれに力を寄せてきて、この JEEF を作り上げているという状況は、それなりの形で評価いただきました。

JEEF は、所帯は小さいのですが、よく考えると日本を代表するような環境教育の様々な分野の方がみんな入っていて、なんとかみんなで力を合わせて環境教育の普及をしたいと思っております。最近気がついたことでは、環境教育だけの NGO というのは、案外ないですね。世界中探してもほとんどないです。IUCN(国際自然保護連合)など、大きな団体の中に環境教育部といった部署があるのですが、IUCN でも 2~3 人というようなスタッフで予算もほとんどない。JEEF は 2~3 億くらい予算で 15 人が働いているという、外国人は皆びっくりしますね。ここにいらしている

立教大学のドノヴァンさんがアメリカの教育学会に出かけた際に、JEEF の説明をして下さったところ、NAAEE(北米環境教育学会)は、会員が 5 万人くらいいるのですが、5~6 人のスタッフで運営しているということで、NAAEE で発表した時には、おそらく世界でも最も大きい環境教育の NGO ではないかと言われたそうです。私の経験でも、ヨーロッパでもアメリカでもいろいろな国の方々とディスカッションする機会も多いのですが、大きな団体の中の一部に環境教育をやる部門があるということがほとんどで、環境教育だけで成り立っている NGO は非常に少ないです。この間もアメリカから来客があつていろいろ話していて、やはり JEEF としては、世界の環境教育の輪を作らなければいけないのではないか、ということも考えております。これはお金もかかるかもしれませんが、そう簡単にはできないかもしれませんが、いずれ日本の環境教育を中心に活動している NGO が、世界に呼び掛けて環境教育の NGO の緩やかなリングのようなものを作ったらよいのではないかと考えております。

わずか 25 年くらいの間に JEEF はいろいろな方のご支援でここまで成長してまいりました。そしてこれからは、どんどん若い人たちに力を出していただいて、どんどんリニューアルしていきたいと思います。皆さんの中にも、環境教育について一緒にやりたいという方がいましたら是非ご連絡ください。事務局スタッフも欠員が生じていますので、私も世界に向けてやってみよう、自然学校をやってみよう、そういった気持ちのある方がいましたら、是非私もしくは JEEF の理事にお話をいただければと思います。また後ほど機会がありましたらご質問等にもお答えしたいと思います。どうもありがとうございました。

**JEEF** <http://www.jeef.or.jp>

## 日本環境教育学会から

こんばんは。全体会 1 でも皆さんの前でお話しましたが、この場は日本環境教育学会の会長として皆さんに紹介をしたいと思います。

日本環境教育学会は 1990 年に作りました。それで今、会員が 1,700 人ほどおります。だいたいこれでこの 10 年くらい維持しています。いわゆる学会というものには、いろいろな学会があります。たとえば教育関係の学会では、「〇〇教育」という団体がいろいろありますが、そういった中では、この 1,700 人という数は非常に多い方です。そして、この学会の 1,700 人にはどのような人たちがいるかということ、研究者の方々が半分くらい、あとの半分くらいは小・中・高の先生方、公務員、企業、あるいは NGO の方々です。

日本環境教育学会の特徴としては、研究者だけではないということですね。環境教育に取り組んでいる方がいらっしゃる。私が

会長になって以降、この学会の特徴を強みにしていこうではないかということで、研究者と実践者を学会がつかないで、実際に日頃やっておられる活動をうまく論文など文章の形で出していくということ。研究者の方は、研究はしているけれど実践してないため、どういうふうにしていいかわからない。そこ

で、研究者と実践者をジョイントさせるような個々のつなぎ役を、これからやっていきたいと考えております。ですので、是非、皆さん方にはこの機会に学会に入ってくださいと思います。

日本環境教育学会では、普通の学会と同じように研究誌を出し



会長 阿部 治

ておりますが、そこにはいわゆる研究論文と同時に、実践報告というものが掲載されます。再来年以降は、この実践をしっかりと出せるような印刷物を新たに出していきたいと思っております。

それから、今お手元にある資料のような研究大会を毎年開催しております。この研究大会では、いろいろな研究発表と同時に、環境教育メッセという形で、その地域ごとにおける実践者の方々（企業、行政、NGO等）の展示、交流、さらにはエクスカージョンも用意しています。2011年の青森大会では、白神山地を含め様々なエクスカージョンを用意しています。そして毎回、研究大会では基調講演があり、この部分は一般向けにもなるのですが、2011年は例の「はやぶさ」ですね。元気のない日本が「はやぶさ」が帰ってきたことによってわっと盛り上がった、その「はやぶさ」を開発された川口淳一郎先生にご講演いただくとともに、無農薬の「奇跡のりんご」を作られた木村秋則さんも含め、対談をさせていただくことになっております。青森まで新幹線もできますので是非いらしていただきたい。

また、学会では、国際交流というのを今やっております、昨年に韓国の学会、今年は台湾の学会、それから今、計画しているのは来年に北米環境教育学会と協定を結んできたい、様々な研究者や会員の交流を果たしていきたい、と考えております。

こういういわゆる学会としての日常的な活動以外に、来年には学会として本を出し、再来年は環境教育の辞典も出します。それと同時に環境教育を国内にどう広めていくのか、そういった政策提言も行っております。その政策提言に関連しては、特に2点あるのですが、一つは環境教育の教科化、さらにもう一点は、教師になる際に、教員養成系の大学で必ず学ばなければいけないものがあります。憲法や哲学といった教科ですが、それと同じレベル

で環境というものをちゃんと入れ込むこと。これを学会として強く要望していくということで、これは日本環境教育学会だけではなく、他の学会にも呼び掛けて、協働で行っていくということを今やっています。それで今年から、一例として、こども環境学会と共催でシンポジウムを持つということを4学会で行っておりますが、来年はこれを続けていながら、日本社会教育学会等との共同プロジェクトを行っていく、このようなことも今、進めております。

また、学会自体が環境教育をしっかりと研究面から支え、それから学校の中に入れていくと同時に、大学に環境教育を位置付けていこうということで、環境教育を担当する教員をしっかりと置くようなことも働きかけ、ようやくここ数年、担当科目「環境教育」で教員募集が行われる、ということが始まりました。そのほかにも、大学等において環境教育センターというものをしっかりと設置していく、ということも日本学術会議等を通じて働きかけておまして、最近はこちらに呼応して設置する大学も徐々に出てきております。

皆さん、学会というのは研究者だけの集まりではありません。実践があつて研究も始まっていくということで、研究者と実践者が協働で進めていく、これが日本環境教育学会です。そして、日本環境教育学会があることによって、環境教育の社会的地位を高めていく。そういうことが可能になっていくということで、是非この機会にお入りいただきたいと思っております。ホームページ等に申込書がありますので、是非お願いいたします。

**日本環境教育学会** <http://www.jsoee.jp/>

## NPO 法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議から

**事務局長 村上千里氏**

こんばんは。「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)という団体の事務局をしております、村上千里です。

「ESD」という言葉を、今回この会場に来て初めて知った方が結構いらしたと聞いています。「ESDとは」という話については、一日目全体会で阿部治さんから話されたということなので、私からは、そのESDの運動が今どんなふうになっていて、どんなことを実現しようとしているのか、ということをご紹介したいと思います。

進め方は、紙芝居方式(川嶋直さんが今、全国的に普及されている方法)を使いましてご紹介したいと思います。

### —ESDの10年(2005~2014)—

まず、ESDの10年、昨日のお話で既に聞いていらっしゃると思うのですが、何年からか覚えていらっしゃるでしょうか。2005年~2014年までの10年間で国連がESDの10年として進めてい

ます。今年2010年は何年目かということ、6年目になりますので、ちょうど半分折り返しで後半に入った、というところになります。

### —最終会合は日本で—

2014年の最終年に国際会議を日本でやりましょう、ということが国際的に決定されまし

た。日本が提案して始まったESDの10年の最終年が、また日本で行われるということで、政府としても、提案した私たち民間としても、このESDの10年で何か成果を是非作っていききたいなと思っています。その中で、何を実現したいのか、ということをご紹介したいと思います。



### —ESDを進める×ESDで進める—

このESDの10年が始まってから、ESDを進めるというときに、「ESDってなんだ?」「環境教育とどう違うのか?」ということがやはり議論になって、なかなかそれを前に進めるのが難しかったです。未だに「ESDって難しいね」という話もたくさんあります。そこで、少し見方を変えて「ESDを進める」というよりは「ESDで今までやってきた、持続可能な社会づくりにつながる様々な教育活動がどんどん広がっていく」、ということを目指すという話ではないか、という話をいろいろな方々としています。

### —ESD的な活動が広がる—

ESDで何を進めるのか、というと、ESD的な活動や教育が広がることではないかと思います。

### —社会のあり方を変革する—

「ESD的な」というのは何かというと、ESDは社会を変革するための教育であり、つまり、持続不可能な今の社会から、持続可能な社会に変えていくということです。

### —社会に参画する力を育む—

社会を変革するためには、社会に参画する力を育てていくというのが重要です。そのために大切なのが「ESD的アプローチ」、知るだけではなく行動につながっていく、そういうものをどう生み出せるか、ということかと考えています。

### —参加体験型、問題解決型、パートナーシップ型—

そのためには、環境教育で既にあちこちで実践されている、参加体験型の学び、問題解決型の学び、それから、地域の中にある様々な主体や実践者とパートナーシップで学びの場を作っていく、そういうことが大切だと環境教育の中でも言われていると思いますが、それがもっともっとメインストリームになっていくというアプローチをしていきたい、と思っています。

### —ESD的アプローチを広める—

ESD的アプローチを広めるということでは、例えばESD-Jでは、この12月に、ESD的アプローチ実践講座を行います。そういう場を使ったり、「ESD×生物多様性」のプロジェクトでは、生物多様性を保全している地域づくりの中で、どんな教育活動が展開されているのかという、人づくりの面からそれらを分析したパンフレットやハンドブックなどを発行しようとしています。この「×ESD」のプロジェクトでは、CEPAとの連携なども生まれてくると思うのですが、こういうことを通して、ESD的な学びや学びの方法が、もっともっと広がっていくというのを、ここに集まっている皆さまと一緒に進めていけたらと思っています。

### —そのための仕組みをつくる—

もう一つESDで進めるということで実現したいのは、特にこちらがESD-Jの役割かと感じているのですが、ESD的なアプローチが広がっていくための仕組みをつくる、ということが大切だと

考えています。

### —SDにつながる活動・教育の実践者に広める—

その仕組みについては、まず最初に、持続可能な社会づくり(=SD)につながっている教育や活動の実践者に、ESDを広めていく、知ってもらう、そして、ESD的なアプローチを広めていくための仲間になってもらう、ということを目指していて、その仕組みづくりを、環境省の「+ESDプロジェクト」を使って、どんどん進めていきたいと思っています。

### —学校教育でESD—

教育の現場ということでは、学校というのが一つの大きなターゲットになります。文部科学省では、ESDをどんどん学校に広めていこうという施策が動いていて、ユネスコ・スクールを通して実現しようとしています。この動きを通してESD的な学びを学校教育の中に浸透させていく、という仕組みができないか。例えば、教員養成の中や、教員研修の中に、参加体験型の学びや問題解決型の学び、もしくは地域と一緒に進めるということをどう織り込んでいくか、それを学校の先生たちと一緒に考えられるような場を作っていけるということが一つあるのではないかと考えています。

### —つなぐ仕組みを社会化する—

最後に、学校教育だけではなくて、地域の中で、様々な人が持続可能な地域づくりやそのための学びの場を作っていくために、つながっていく必要があるのですが、なかなか難しい。例えば学校でESD的な環境教育をやろうとしても、地域にどんな資源があって、どんなことを一緒にやっていけるのか、自分で探して企画するというのはとても大変なので、それをつないでいけるようなコーディネーターという役割の人が社会の中にもっともっとたくさんいる必要があると考えています。そのコーディネーターが、社会の中で大きな役割を果たせるような体制をどう作っていけるのか、というようなことも、今、環境省の研究事業として一緒にさせていただいて、JEEFの仲間の力も借りながら実践づくりをしているのですが、それをどう社会化していけるのかということ、これからもっといろいろな方と議論して、形にしていきたいと思っています。

以上のように、直接ESD-Jは何か実践をしているというよりは、このESDというのを追い風にして、皆さんがさされている教育活動がもっともっとメインストリームになって広がっていけるような、仕組みをつくりたいと思っています。是非一緒にこの動きを作っていっていただければと思います。どうもありがとうございました。

## NPO 法人日本エコツーリズムセンターから

代表理事 広瀬敏通氏

今まで JEEF、日本環境教育学会、ESD-J、それからこの場に今いませんが CONE、いろいろなネットワークを私たちは作ってきました。誰かが何かを作ったのではなくて、みんなで作ってきたのです。そして、最後に生まれたネットワークが NPO 法人日本エコツーリズムセンターで、2007 年に生まれました。



これらはバラバラに生まれたものではなくて、実は全部連なってきたのです。私たちは 1992 年に、この JEEF の中で「エコツーリズム研究会」を作りました。JEEF の仲間であるいろいろな人たちと一緒に、地道に活動してきました。その研究会に集まった人たちが、現在の日本のエコツーリズムの様々な分野を切り拓いたわけです。

そのエコツーリズムについて、我々は長いこと「観光」、つまり「旅行分野」という考えから、なかなか抜けられませんでした。体験的な旅行をなんとかして魅力的に持続可能なものに作りた、そんなことを思いながらやってきました。

日本の社会の中でこのエコツーリズムがどういう発展をしてきたのでしょうか。元々の観光が、観光業だけが栄えていき地域は寂れる、という状況をいっぱい作ってきました。例えば、いろいろな地域に行くと、観光施設がどんどん廃墟化しているという状況を見ることができます。観光業が栄えれば、その結果、観光業自体も成り立たなくなっていく。そんなアイロニーに嵌まっていく中で、やはり地域が元気になるなければ観光どころではないのだ、というところに行きつき、「地域を元気にする」というアクションにどんどんつながっていきました。

そうすると、私たちが JEEF でずっと取り組んできた自然学校の活動や、地域を元気にする活動というのは、まさにエコツーリズムの活動ではないか。考えてみると、JEEF の岡島理事長はじめいろいろな人が皆、エコツーリズムという言葉はずっと昔から口にしながらやってくるわけですね。

その中で私たちは、永田町や霞が関でエコツーリズムを言うのではなくて、地域の現場で、まさに必要としているところでエコツーリズムを作っていこうということで、北海道から沖縄・西表島までの 110 人の世話人たちのネットワークによって、エコツーリズムセンターは生まれたわけです。

私たちはここで、様々なアクションを繰り広げているのですが、地域を元気にするための最初のステップとしては、やはり「場」が必要です。場はどういう形なのかというと、役所が準備する場ではなくて、普通のおじちゃんおばちゃんたちが集まれる

ような気軽な場。それを「カフェ」と呼んで、現在全国に 18 か所程のカフェを運営しています。

様々な「エコツーリズム」というキーワードで集まって来る人たちの中には、「俺たちは観光なんか嫌なんだよ、観光やる気じゃないんだ」とおっしゃる人たちもたくさんいます。だから、観光という言葉ではなくてエコツーリズム、そんな言葉さえ使わなくてもいい、とにかく地域を元気にしたい、それでやりましょう、としていくうちに、農協や商工会、観光協会、青年団にとって代わるような、地域を元気にする担い手としてエコツーリズムを口にする人たちがたくさん出てきました。具体的には、それが自然学校と呼ばれる所の人たちなのです。

自然学校は現在、日本に約 3,000 校あるわけですが、自然学校全国調査を 4 年に一度やっていて、今年はその調査年です。私は今それに取り掛かっていて、ちょうど今年の調査票の発送が明日行われる予定になっています。第一期の発送の後、少し遅れて第二期、第三期と徐々に発送する予定ですので、お手元にメールでアンケートが届く方がだいぶいると思います。是非、真摯に答えていただければ、自然学校や自然学校の具体的な活動であるエコツーリズムが、どんなふうに日本社会に広がっているのかということ私たちは見ることができます。それを立法を行う各政党、各省庁、それから企業など、様々なところにこの研究成果を公表しながら、いい形で新しい日本の地域社会を作っていくようなツールにしていきたいと考えています。具体的には 2011 年 3 月 2 日に立教大学をお借りして、自然学校全国調査の発表を行いたいと思っていますし、2~3 日後には日本環境教育フォーラムのホームページで、このアンケート調査の全文を皆さんご覧になれますので、協力していただければと思います。

このように、エコツーリズムセンターはいろいろな形で動いています。今年から、生物多様性の国家戦略に合わせ、野生動物に焦点を合わせての活動をしてきました。野生動物エコツアーというのを全国 5 か所で行い、野生動物をインタープリテーションしようという人材の研修を全国 2 か所で行います。野生動物カフェも、全国のいろいろな所でやっていこうと、今、仕掛けています。

また、2011 年 1 月 18 日には東京・西日暮里で行う予定なのですが、野生動物とエコツーリズムをテーマにした全国シンポジウムを行います。それから 8 月には、野生動物を考えるための「獣害シンポジウム」を山口県で行う予定です。都会の人は野生動物を、可愛い、かわいそうというキーワードで考えて、そこから先の思考回路が止まっているのですが、地方に行くと一転して被害者として、野生動物をとんでもない連中、なんとか駆除しなければ、という話になるのです。これは、獣害という言葉で表されず。この獣害、本当に野生動物はそんなにひどい存在なのでしょうか。確かに現象的にはひどい存在ですが、もっと野生動物を自

然そのものと考えて、適切な形で人間が野生動物や自然といひ折り合いをつけるためにはどうすればいいのか、ということを考えるための「獣害シンポジウム」です。

皆さんに是非、こうしたことにも関心を持っていただき、生物多様性をいい形で、やはり私たちの力で考えていこうという場を持っていきたい、そんなことも日本エコツーリズムセンターで進めていきたいと思っています。

もう1つ追加でお知らせがあります。環境教育関東ミーティングという地域ミーティングの事務局を少しお手伝いしております、今年の12月11日～12日に栃木県で行われますので、これにも是非ご参加ください。

日本エコツーリズムセンターの事務局は西日暮里の駅から徒歩2分の所にあります。そこでも様々なプロジェクトを立ち上げておりまして、圧倒的にマンパワーが足りません。是非こういう活動に参加したいという方には、お手伝いいただければと思っています。一応有給を考えております。

皆さんと一緒に、エコツーリズム、自然学校、そして環境教育というキーワードで、こういう活動をどんどん手を組みながら、ESD-J、JEEF、日本環境教育学会など、様々な人たちがいろいろな立場で取り組んでいければ、日本の社会を変えることができるのではないかと考えておりますので、一緒にやりましょう。よろしくお祈りします。

## 公益社団法人日本環境教育フォーラム国際事業紹介

### 事務局職員 塚原一恵

日本環境教育フォーラムの塚原と申します、こんばんは。

まず、なぜ国際事業のご紹介をさせていただくかと申しますと、国際事業は非常に大事なことだと思っておりますので、最初にお伝えしたかったのですが、こちらにいらっしゃる皆様にとって非常に大きなチャンスになっていくのが一つ国際化、という切り口だと考えております。

まず、現場を見まわしてみますと、国際的に活躍できる環境リーダーという人が、今、日本では非常に不足しております。JEEFでも学生向けのたくさんのプログラムを用意しておりますので、今日お集まりの大学生の皆さまには、是非ご参加いただければ、というのが一点目でございます。

二点目が、企業の皆さまがいらっしゃると思うのですが、私共たくさんの研修をやらせていただく中で、日本型のCSRというのが非常に注目を集めております。実際にCSR活動に従業員の方が関わられているというのは世界でも珍しいということで、こういった日本型の知恵というものをどんどん開発途上国の皆様に伝えていくことが、環境の国際協力の上でとても大切なことだと言えるかと思っております。

三点目ですが、自然学校の皆さまにとっては、非常に大きなビジネスチャンスでもございます。と申しますのは、様々な海外の方から「自然学校、それ何だろう？」と、非常に注目を集めております。それが一つと、様々なプログラムの要請がきておりますので、是非JEEFと自然学校の皆さまで、いろいろな新しいプログラムを開発できればと考えております。



#### —日本の知見・技術の移転—

まず、一つが日本の知見、技術の移転ということで、いくつかこのようなプログラムをやっております。二つ目の軸が今度は支援だけではなくて、一緒に協働していこうというアプローチをとっております。具体的には、私共が発行しております「地球の子ども」という会報誌があるのですが、一番後ろのページに「インドネシア通信」というのがあるのを皆さんご存知でしょうか？実は、私共にはインドネシアに約10年滞在している矢田誠というスタッフがおりまして、地元への地域支援ということをしております。

そのほか、こちらにお見えの自然学校様などの協力もいただきまして、海外からの研修員の方に対するこういった様々な教育というのもさせていただいております。

続きまして青少年育成、これは海外そして日本の学生を日本に集めて行うトレーニングです。

それから環境教育に関する調査というお仕事もいろいろいただいております、実際にタイやベトナムなどのフィールドに赴いて、青少年の環境教育に関する調査等もしております。

#### —支援から協働へ—

支援から協働へと申しましたが、「途上国がかわいそう」「貧しい」「だから支援してあげよう」、ということからは、最近状況が変わりつつあると思うのです。アジアの方々と働くと、非常に素晴らしいリーダーの方々がたくさんいらっしゃいます。私共のホームページを見ていただきますと、「アジア環境教育データベース」というコンテンツがございます、既に環境教育に特化している団体が、364団体登録して下さっています。

さらに今年からは、リーダーを育成してネットワークしていこうという「アジア環境リーダーネットワーク」というプロジェクトが開始しました。短期的な研修ではなくて、NGOに勤めていたり、実際に環境ビジネスを行っているベンチャーに勤めているようなアジアの学生といった方々と、どうやって環境教育を広げていっ

たらいいか、ネットワークを築いていったらいいか、というのを今、話し合える機会が持たれています。近い将来、先ほど岡島理事長からも話がありましたが、世界規模での清里ミーティングというの、早々にみなさんのお力添えで実現できるのではないかと考えております。

#### ー最近のニュースー

最近のニュースということで、補足です。今日の午前中に JEEF 事務局の京極がワークショップを行いました。「生物多様性まんだらカードゲーム」というものがございます。実際にこのカードゲームを海外で行って見たところ、大変評判が良かったので、思い切って国際バージョンを作成してしまいました。英語版のマニュアルも作りまし、現在はベトナムに大変パートナーが多

いため、ベトナム語版も作っております。来年ベトナムに出張で行きますので、そこでもワークショップを 20 団体くらいの NGO に対して実施しようかと考えております。

こちらにお見えの皆さんでも、海外拠点がある企業の皆さま、あるいは海外の研修員を指導されている自然学校の皆さまもいらっしやると思っていますので、是非こういったゲームも活用していただければと思います。お使いになりたい方は京極まで一声かけていただければと思います。

冒頭に申しましたように、私共はいろいろなプログラムの可能性を探っておりますので、是非お気軽にご一報いただいて、いろいろな取り組みと一緒にさせていただければと思います。僭越ながら以上でございます。どうもありがとうございました。

## 中国の環境教育に関する取り組み

### JICA 中国事務所 環境分野/NGO 連携担当 坂元芳匡氏

国際協力機構中国事務所の坂元でございます。錚々たる皆様の発表の後、甚だ僭越ですが、私からは中国における環境教育の状況について簡単に説明させていただきます。



#### ー中国における JICA 事業ー

まず JICA について、簡単にご説明させていただきます。

我々、開発途上国に対する政府開発援助 (ODA) のうち、二国間の資金協力、技術協力を実施する独立行政法人でございます。

技術協力というのは何かといいますと、基本的には専門家を派遣したり、研修員を途上国から日本へ受け入れて技術移転をしたり、そういった人を通じた協力を行っております。ここにお集まりの方々の中にも、いろいろお世話になっている方がいると思うのですが、私も一つひとつ把握できず、ご挨拶できていなくて申し訳なく思っております。この場を借りて御礼申し上げます。

中国ではどのような活動をしているかといいますと、次の 3 つです。

- ①環境問題などの地球規模の問題
- ②改革・開放支援

それから、これが特徴的なのですが、

- ③相互理解の増進

ということで、日中両国民の相互理解を進める、という活動をしております。

#### ー中国における環境教育ー

中国における環境教育については、政府の環境部門では、最近

ですと、環境保護法や循環型経済推進法といった法律が整備されておりまして、その中で関連の教育も是非進めなさいということが奨励されております。それから環境教育基地、環境教育の拠点となるようなところの整備を推進していて、自然生態型、環境保全施設型、ミュージアム型といったような施設が整備されております。例えば、汚水処理場の中にも展示施設があり、日本人学校等も見学に行って勉強するというような時間もあります。環境教育基地ではないですが、科学技術部門が作っている科学技術館のようなものもあり、この中にもやはり環境面の展示などがされております。

それだけではなくて、学校や NGO の活動も最近では活発化しております。幼稚園児に対するゴミの分別の指導が行われていたり、NGO は中国内だけではなく日本の NGO など入って、植林などのエコツーリズムといった活動をしたりしております。

#### ーJICA の環境教育関連事業ー

JICA の宣伝になってしまいますが、我々がどういったことをやっているかということをご説明させていただきます。「循環型経済推進プロジェクト」と言いまして、中国の環境省にあたる環境保護部の下にある日中友好環境保全センターと実施しているプロジェクトでございます。その中で日中環境技術情報プラザの整備ですとか、人材育成なども支援しております。この中には川嶋さんにも専門家として来ていただいて、ご協力頂いております。

最近始まったばかりのプロジェクトでは、トキの関連のプロジェクトがございます。トキが生息できるような社会づくりや情報整備、そういったものを含めて環境教育の部分も入っております。

それからこれは天津のプロジェクトですが、天津の企業や政府、NGO など、いろいろなアクターがそれぞれ関係を深めるようなプロジェクトで、環境教育セミナーを実施したり、幼稚園・小学校

等での交流なども行っております。

### —JICAのNGO支援事業—

草の根技術協力事業というものを我々は持っております、日本のNGOや大学、地方自治体の皆さまの企画する活動を支援するプロジェクトでございます。これは普通の政府間の協力と一緒に、専門家の派遣や本邦研修といった、人を通じた協力を行っております。例としては、山西省で行っている植林のプロジェクトや、植林を内モンゴル自治区で行っているプロジェクトなどがございます。こういった活動の中にもエコツーリズムの内容などが入っております、環境教育とも密接な関係があるプロジェクトでございます。

### —JICAの連絡窓口—

JICAの連絡窓口ということで、これも宣伝ですが、日本国内の拠点としては、全国14の国内機関があり、草の根技術協力の窓口となっております。各都道府県にも専門のスタッフを配置しておりますので、連絡していただければ各種ご相談にのることが出来ます。

また、中国事務所の方にも、NGO・JICA ジャパンデスクというものを設置しております、各種情報交換などをさせていただいております。私と一緒に清里ミーティングに来た李瑾さんもい

ますので、日本語でもいろいろな相談に応じることが出来ると思います。プロフィール集に連絡先が書いてあると思いますので、なんでもご連絡いただければと思っております。

### —中国における環境教育の課題—

最後に、まとめという形で中国における環境教育の課題についてお話しします。施設を作るのはかなり早いのですが、それに人材の育成が追い付いていないということがございます。それから施設では、上海の科技馆のように、こういう巨大な施設はできるのですが、やはり中身の部分が非常に分かりにくい内容になっていたり、まだそういう部分が追い付いていません。ということで、こういった部分にも我々JICA、それと草の根技術協力なども使いながら協力しているところでございます。

また地方による質や、都市と農村の差などもかなり激しい、ということがございます。ある農村では、ゴミの分別以前にゴミの収集をどうするかという問題すらできていなくて、一角がただのゴミ捨て場になってしまっている、といった状況もございます。

いろいろな機関が様々な活動をしているのですが、なかなか情報共有や連携が取れていないという状況があります。こういったいろいろな分野について、我々JICAとしても協力を進めていきたいというふうに考えております。どうもありがとうございました。



---

# オプションプログラム

---

## ◆環境教育プレゼンテーション

1日目:11月13日(土)夕方/新館ホール、本館ホール、ハンターホール、アンデレホール

1日目:11月13日(土)夜/本館ホール、アンデレホール、ハンターホール、新館ラウンジ

2日目:11月14日(日)夜/本館ホール、アンデレホール、ハンターホール、新館ラウンジ

## ◆早朝ワークショップ

2日目:11月14日(日)早朝

- ◆ハードコールハイク
- ◆多様性を感じる観察会
- ◆ゼロからの火起こし術
- ◆朝飯前の手仕事
- ◆朝日をあびつつ、ミルクティー飲んでごあいさつ
- ◆生き方を学ぶ自然観察
- ◆ノルディックウォークで早朝散歩

3日目:11月15日(月)早朝

- ◆映画「西の魔女が死んだ」おばあちゃんのお家ツアー
- ◆みみをすませば～みんなでつくるいのちのものがたり～

## ◆当日募集ワークショップ

3日目:11月15日(月)午前

- ◆イナカとこどもと日本の未来を考える2
- ◆環境教育+国際理解教育「ESD ボードゲーム」
- ◆Project WET を体験しませんか？
- ◆森とエネルギーの本当の話をしましょう！！
- ◆清里の森を2.5時間ぶっとおして歩きまわるWS
- ◆夢の田舎暮らしは本当にできるのか？
- ◆みんなで写真を撮りながらお散歩
- ◆エコロジカル・シンキングゲーム リターンズ！！
- ◆かごしま茶×マイボトルの推進
- ◆日本とメキシコをつなぎましょう！
- ◆森で気づいたことを日々のくらしにつなぐ
- ◆生物多様性まんだらカードゲーム体験会

---

# 環境教育プレゼンテーション

---

1日目：11月13日(土)夕方 会場：新館ホール

---

## ◆視覚障害者とともに気づき驚き学ぶ森林ESD

実施者：小林 修（愛媛大学森林教育）

内容：偶然な出会いからはじまった視覚障害者に向けた森林環境教育。10年の時を経て、晴眼者から障害者へ向けた学びから、視覚障害者から晴眼者へ向けた学びへと方向を転換し、教材と企画を開発してきました。そして、昨年からは、山形大学、森林総合研究所多摩森林科学園、東京大学愛知演習林、愛媛大学、鹿児島大学の森林環境教育専門化をプロジェクトチームとしてこれまでの活動を全国に展開するための準備をはじめました。みなさんが楽しく学び、持続可能な社会の構築につながる意識を醸成する森林ESDについて、これまでの取り組みを中心に報告しました。

## ◆子ども農山漁村交流PJ・新GT事業・ESD・自然観

実施者：新田章伸（NPO法人里山倶楽部）

内容：篠山チルドレンミュージアムで実施の子ども農山漁村交流プロジェクト<新グリーン・ツーリズム事業>や教員研修センター主催の環境教育指導者研修におけるESD、自然的自然観実践研究会の活動をダイジェストで紹介しました。

## ◆イナカとこどもと日本の未来を考える

実施者：高森彦輝（京都市立洛西中学校）

内容：こどもは世界の宝だ！と思います。彼らが次の世界をにうのです。イナカは日本の宝だ。と思います。そこには命があふれているのです。しかし両者を取り巻く環境は非常に厳しい。んが、それではいかん！という思いをプレゼンしました。

---

1日目：11月13日(土)夕方 会場：本館ホール

---

## ◆ネットワーク型自然学校の取り組み

実施者：白井 健（NPO法人千葉自然学校）

内容：千葉県内で体験活動を実施している個人・団体のネットワークを活かしながら、ニーズに合わせたコーディネートを行っています。千葉自然学校の取り組みとその事例をご紹介します。

## ◆パーマカルチャーでつなぐ暮らしと環境教育

実施者：梅崎靖志（風と土の自然学校）

内容：安曇野パーマカルチャー塾では、日常生活の中での実践に焦点をあててプログラムを実施しています。行動変容を促すためのポイントを交えながら、具体的な取り組みをご紹介します。

## ◆「那須平成の森」開園に向けて

実施者：番匠克二（環境省日光自然環境事務所）

内容：自然とのふれあいの場として環境省が整備をしている日光国立公園「那須平成の森」が来年(平成23年)5月に開園します。意見交換をしたいと思い、「那須平成の森」でどのような活動をしようと考えているか紹介しました。

## ◆ねおすのエコツアー これまでとこれから

実施者：中山健士（NPO法人ねおす）

内容：NPO法人ねおすは北海道を拠点に様々なエコツアーを行ってきました。これまでの事例と現在の状況について、元旅行会社勤務のねおすエコツアー担当者がご紹介しました。

---

---

1日目：11月13日(土)夕方 会場：ハンターホール

---

◆感じよう自然 in 妙高 1泊2日親子キャンプ

実施者：枝廣教道（国際自然環境アウトドア専門学校）

内容：妙高青少年自然の家での1泊2日のキャンプ。子どもゆめ基金助成活動として行いました。キャンプの内容はクラフト、野外炊飯、星座観察、ネイチャーゲーム等を行いました。そんなキャンプの様子等を発表しました。

◆富士山麓でホールアースのキャンプをしよう

実施者：遠藤 隼（ホールアース自然学校）

内容：この夏、富士山麓で思いっきり大自然を味わい、動物たちと過ごしたホールアース自然学校のキャンプ！！子どもから親子！2泊から14泊！個性あふれる様々なキャンプを紹介しました。

◆動物園×企業×NPO 協働：自然体験アフタースクール

実施者：木村恵巳（NPO 法人ねおす）

内容：札幌市中央区に位置する動物園と天然記念物・円山原始林を拠点に活動するアフタースクールをご紹介します。札幌市立動物園、楽しい子育てを目指すお母さんの合同会社、人と自然・人と人・自然と社会をつなげる NPO の協働のかたちです。

◆～「一本の樹」からひとつの地球～いのちをつなぐこと

実施者：鈴木智子（きょういく事務所 グリーンふろぐ）

内容：「一本の樹」のスライドプログラムはご存知ですか？今年のテーマ「いのちをつなぐ環境教育」にぴったりなものです。短い時間ですが、みなさんの心にのこるしずかな時間になったと思います。

---

---

1日目：11月13日(土)夕方 会場：アンデレホール

---

◆くらしへ繋ぐ環境教育～町中施設のエコセンより～

実施者：佐崎由佳（京エコロジーセンター）

内容：京（みやこ）エコロジーセンターは、京都市の町中に建つ施設です。「気づき」から「行動」へ、と言われる環境活動ですが、では、どうすれば人々のくらしの中の活動に繋がるのか？アジアからも注目のエコセンの今の現場をお伝えしました。

◆ワンダーシップ★バーチャルツアー

実施者：峯元佐知子・白井佳奈子・木村健人（東京ガス(株)環境エネルギー館）

内容：横浜市にある環境学習施設『環境エネルギー館（ワンダーシップ）』。都市型ならではのあんなコーナー、こんな展示・・・みどころをたっぷりご紹介しました。

◆電車の回生ブレーキを手で体感しよう！

実施者：齊藤 透（東武鉄道(株)）

内容：東武鉄道がイベントや小学校への出張授業などで行なっているプログラムです。おもちゃ用のモーターを用いた簡単な実験キットで、電車の電気ブレーキを実際に手で体感してもらいながら回生電力をご説明しました。

◆エコ印刷…印刷の環境配慮をゴク簡単にお話します

実施者：齊藤 透（東武鉄道(株)）

内容：2年連続でエコ印刷大賞を受賞しました。エコ印刷に費用はかかりません。でも、印刷業界にさえ、エコ印刷をきちんと知っている人はほとんどいません。それは発注者がコストと納期しか問わないからです。発注者がエコを問えば、業界が変わります。

---

---

1日目：11月13日(土)夜 会場：本館ホール

---

◆アサヒビールの高校生環境教育 若武者育成塾

実施者：高橋 透（アサヒビール(株)社会環境推進部）

内容：「若武者育成塾」では、次代を担う高校生に、環境問題を肌で感じ、その問題解決法を自ら考え、実践することで、社会の課題と向き合って解決する力を身につけた、志の高い、たくましい「若武者」を育成しようとするものです。

---

---

#### ◆J-POWER エコ×エネ体験プロジェクトのご紹介

実施者：藤木勇光（J-POWER 電源開発）

内容：「エコ×エネ体験プロジェクト」は、J-POWER グループが「エネルギーと環境の共生」をめざして取り組んでいる社会貢献活動です。環境教育の専門家と協働して「エコ×エネ体験ツアー」と「エコ×エネ・カフェ」を開催しています。

---

1日目：11月13日(土)夜 会場：アンデレホール

---

#### ◆里山の歩き方（柏崎・夢の森公園）

実施者：久松信介（柏崎・夢の森公園）

内容：柏崎・夢の森公園は「里山」をフィールドに“持続可能な暮らし方”を伝えています。その手法は体験プログラムやハンズオン展示などです。だけど、もっとうまく「里山」を使いたい！もっともっとうろんなことができる！と考えています。

#### ◆地球に暮らそう～生態系の中で生きるという選択肢～

実施者：加藤大吾（NPO 法人都留環境フォーラム）

内容：自力で廃材を使った建築、農家になって合鴨農法、イノシシを捌いて食べる。地域に根付く10の切り口。生態系に根差した家族の暮らしぶり。暮らしの中の自然体験、などをスライドでご紹介しました。

---

1日目：11月13日(土)夜 会場：ハンターホール

---

#### ◆環境に携わる方の基礎知識『旧暦』…の超入門講座

実施者：齊藤 透（東武鉄道(株)）

内容：旧暦の科学レベルは西暦と同等…いえ、自然のサイクルを表すという点では西暦を凌駕しています。その証拠に、海・島・川・農業・林業で暮らす方々は今でも旧暦を使っています。知ってしまえばとても簡単に楽チン、身体のサイクルにもしっくり馴染み、自然を身近に感じられる素敵なツールです。昼と夜の二倍楽しめるのもお得。

#### ◆星空を眺めて、宇宙と生物多様性を考える ★定員 15名

実施者：安西英明（財団法人日本野鳥の会）

内容：夜の清里で、星空を楽しまないのはもったいないと思いませんか？ 晴れていれば、230万年前のアンドロメダ銀河の光も届くはず。命の源は恒星のエネルギーとも言えますので、宇宙を感じながら命について考えてみましょう。

---

1日目：11月13日(土)夜 会場：新館ラウンジ

---

#### ◆石垣島の外来生物を学ぶ授業

実施者：大堀健司（エコツアーふくみみ）

内容：石垣島の中学生が外来生物についての学習を行いました。外来生物の捕獲や解剖、話し合いなどを行い、外来生物問題を通して生き物の命について考えました。

#### ◆絵本で伝える環境教育～自然物を使った絵本作り～

実施者：横尾佳織（国際自然環境アウトドア専門学校）

内容：私たちは地元の小学生を対象に朝の絵本読み活動を行っています。絵本を通してもっと自然と触れ合ってほしいと考え、環境や自然関連の絵本を読むだけでなく、草花や木の実など自然物を使った絵本作り教室を開催しました。

---

2日目：11月14日(日)夜 会場：本館ホール

---

#### ◆野外活動で“生きる力”は身につくのか

実施者：古川美菜見（国際自然環境アウトドア専門学校）

内容：学校の授業で、企画・運営した小学生対象のキャンプにてIKR測定(生きる力測定)を行いました。結果とともに、“生きる力”が身につく野外活動とは何なのかを発表しました。

---

### ◆あの「森林文化アカデミー」が生まれ変わるッテ!?

実施者：萩原ナハ裕作（岐阜県立森林文化アカデミー）

内容：林業、製材、木造建築、木工、里山管理、環境教育と、森や木に関する全ての現場に人材を輩出し、「森と人とのつながり」を創出し続けてきた学校、岐阜県立森林文化アカデミーの新たな挑戦についてご紹介しました。

---

2日目：11月14日(日)夜 会場：アンデレホール

---

### ◆教育現場の外来種問題—在来種蜂蜜を味わい考える—

実施者：飯沼慶一（成城学園初等学校）

内容：小学校では身近な生物を教材として扱う。しかし生活科では、文科省の検定合格教科書が外来種であるアメリカザリガニを教材としているため、多くの学校が外来種を育て増やして自然に放してしまっている。こんなことでよいのか？ 私が教材化を目指すニホンミツバチの蜂蜜を味わいながら考えました。

### ◆特定外来植物(オオキンケイギク)の防除への取組み

実施者：国安俊夫（小田急電鉄株式会社）

内容：小田急電鉄では生物多様性保全活動の一環として、特定外来生物に指定されているオオキンケイギクの防除作業に、2年間の事前調査を経て今年から取り組みはじめたので、その経緯について簡単に紹介しました。

---

2日目：11月14日(日)夜 会場：ハンターホール

---

### ◆公害地域の今を伝えるスタディツアー

実施者：西村仁志（環境共育事務所カラーズ）

内容：かつて公害に苦しんだ地域が、現在はどのようになっているか知っていますか？ このスタディツアーは現地の見学やヒアリングを通じ、再生はどこまで進んでいるのか、残された課題は何か、現地で確かめる試みです。

### ◆環境を学ぶエコキャンプ～ぼくらがつくるエコプラン～

実施者：堀川郁江（高尾の森わくわくビレッジ）

内容：キャンプ生活の中で、小学生と会社員ボランティアと一緒に環境について学び、発見し、身近にできるエコを考えてみました。高尾の森で行われた1泊2日のキャンプの様子をご紹介しました。

---

2日目：11月14日(日)夜 会場：新館ラウンジ

---

### ◆食・農・地域とつながる「カフェかたつむり」の取組み

実施者：長谷美奈（都留市地域おこし協力隊）

内容：山梨県の里地で、地産地消を实践・体験する場として開いたオーガニックカフェ。小規模ながら、地元・市外周辺地域・都内から老若男女が訪れる場となっています。ここでのつながりづくりの紹介をさせていただきました。

### ◆飛驒さるぼぼ発！森づくりネットワーク

実施者：山田美穂（トヨタ白川郷自然学校）

内容：私たちは、飛驒の企業・行政・森づくりに関わっている団体とネットワークを作って、その活動の輪を飛驒の人たちに広げようとしています。フリーマガジン「さるぼぼ倶楽部」と連携し、市民向けの「森を知るツアー」などを企画しています！

---

# 早朝ワークショップ

---

2日目：11月14日(日)7:00~8:00

---

## ◆バードコールメイク

実施者：佐藤敬一・上尾歩未（東京農工大学）

まず、桜の木の枝とネジを使って特製バードコールを作り、それを持って森を散策した。

森ではバードコールを鳴らしてみたほか、鳥に見つからずに近づくための方法として、鳥の5感を考えてみたり、音をたてない工夫としてフォックスウォークを実践した。

バードコールで鳥が来るということはなかったものの、各々が作ったバードコールで音が鳴った時のとてもうれしそうなお様子、また森で鳥を見ることができたことの喜びのお様子がうかがえた。



---

## ◆多様性を感じる観察会

実施者：安西英明（財団法人日本野鳥の会）

朝の清里で、自然観察をしないのはもったいない！

冬に備える虫や植物、ロシアから渡ってきた鳥たちなどを観察しながら、命のさまざまなつながりを感じ、自分はどんな生きものかを考えてみました。



---

## ◆ゼロからの火起こし術

実施者：遠藤 隼（ホールアース自然学校）

マッチやライターは一切使わずに木材と人の動力による火起こしが行われた。参加者は14名で4チームに別れ、一人は軸となる棒を抑え、もう一人は必死で紐を左右交互に引っ張り、軸棒の摩擦で火種をつくる。早朝の寒さも忘れ、火が起ころう頃には体が温まっていた様子。

最後に焼きマッシュマロを味わい朝の貴重な時間を満喫した。



---

## ◆朝飯前の手仕事

実施者：多田由希子（国際自然環境アウトドア専門学校）

乾燥させたススキの茎を毛糸で結び、ランチョンマットを作るプログラム。1人あたり約50本のススキを横に並べ、一本一本に毛糸を交差させながら通していく。1時間という短い時間だったが、参加者のほとんどが作品を完成させていた。都会ではなかなか目にしないススキを使い、私生活に身近なランチョンマットを自分の手で作ることで、植物の存在を改めて感じる事ができたWSであったように思う。

---

## ◆朝日をあびつつ、ミルクティー飲んでごあいさつ

実施者：高森彦輝（京都市立洛西中学校）

ジャージーハット横のベンチにて、コンロとポットでお湯を沸かし、ティーパックとジャージーミルクを入れてミルクティーを作る。三角砂糖と実施者持参の世田谷ハニーを各自で入れ、皆で乾杯。残念ながら曇っていた為、朝日を拝むことはできなかったが、参加者同士、現状や夢を語り合い、朝の充実した時を過ごした。



### ◆生き方を学ぶ自然観察

講師：菅井啓之（京都ノートルダム女子大学）

実施者：新田章伸（NPO 法人里山倶楽部）

本館から新館までの道のりにある自然（山・石・葉・木・実など）と、先人の言葉に触れつつ自然観察の仕方を学んだ。眼前にある原初的な世界を、集中と落ち着きをもって直感を働かせ丁寧に洞察することによって、向こうから語ってくるもの（営み）の理解を深めるべし。すると、私という存在とのつながりや生命の関係性を見出せる。



### ◆ノルディックウォーキングで早朝散歩

実施者：久松信介（柏崎・夢の森公園）

ノルディックウォーキングとは、専用のポールを使ったウォーキングで、年齢問わず、普通のウォーキングよりもより効果的なエクササイズができる。

最初に練習をして、20分間のウォーキング、最後には手作りドクダミ茶でお茶会。参加者は早朝の良い運動ができたようだった。



3日目：11月15日(月)7:00~8:00

### ◆映画「西の魔女が死んだ」おばあちゃんのお家ツアー

実施者：新田章伸（NPO 法人里山倶楽部）、キープ協会

映画化のためにキープ協会内の森に建てられたオープンセットを訪れ、その物語のところに触れ、ゆったりした時間を過ごします。映画、本を見ていない方も大歓迎、自然と調和したおばあちゃんの暮らしを体感しましょう。

### ◆みみをすませば～みんなでつくるいのちのものがたり～

実施者：鈴木智子（きょういく事務所 グリーンふろっぐ）

まだ霧がかかっている外へ出て耳をすませていると、鳥の鳴き声や風によって葉のこすれる音などが聞こえてきました。五感を使って、葉っぱや木など声なきもの話を聞いてみます。今回は、大きなモミの木「ジョン」の話を聞いてみました。

過去・現在・未来の3チームにわかれ、それぞれ質問した内容とジョンの答えを発表しました。「気になる子はいますか」と尋ねると、「3つ隣のシラカバが色白で可愛い」と返事があったそうです。

言葉はなくても、私たちも声なきものたちも同じ地球の一部であると感じることができました。



# 当日募集ワークショップ

## ◆イナカとこどもと日本の未来を考える2

実施者：高森彦輝(京都市立洛西中学校)

前日のワークショップに引き続き、実施者の地元で自然学校を開くための、より具体的な方法を参加者どうして話し合った。

### ●まず、ゴールを明確にする

議論の方向性を間違わないために、ゴールを明確にすることから始まった。自然学校を作るといっても、環境教育をしたいのか、あるいは地元の地域おこしをしたいのか。結果、「地域おこし」がゴールになった。コンセプトは、さみしきや悩みを抱えている人たちが、そこに来て、設楽町の人や森・川・文化に触れて、元気になるような場所にする。

### ●「設楽」だから、あるものを考える・作る

設楽町は、交通の便が悪く、また、地域おこしは、近年日本各地で行われており、その土地ならではの体験ができることや場・現象をアピールしないと、人は集まってこない。どうしても、設楽でないといけないプログラムを組む必要がある。そのためにも、プログラム参加者の対象を具体的に絞り込むこと、また他地域の事例研究と差別化が必要だという意見が出た。



## ◆環境教育+国際理解教育「ESD ボードゲーム」

実施者：小林修(愛媛大学)

このワークショップでは実施者の小林さんが考案した、「ESD ボードゲーム」をボランティアを含め4人で実際にプレイしながら、このゲームの特徴や、活用法などを話し合った。

「ESD ボードゲーム」は参加者それぞれが先進国か発展途上国のどちらかの役となり、国際レベルから地域レベルまで様々な、課題に直面していきながら経済、生物資源、化石燃料、幸福度などの変化やマネジメントを体験できるゲームである。ゲームをプレイしていきながら、プレイする際のファシリテーター役の必要性などが議論された。



## ◆Project WET を体験しませんか？

実施者：佐藤敬一(東京農工大学)

Project WET のうち、傷ついたカゲロウたち、青い惑星、大海の一滴、水さしを回そう、驚異の旅の五つの題材を、屋内でできる形に一部改変したものを体験した。受講者をワクワクさせる工夫がたくさんされており、みなさんとても楽しんでいました。



## ◆森とエネルギーの本当の話をしましょう！！

実施者：久松信介(柏崎・夢の森公園)

前日の3.5時間ワークショップで好評だったため、再びワークショップを開催した。まずさいかい産業の古川より、自身が行っている木質ペレットストーブの事業について語り、ストーブやバイオオイルの精製といった森林の活用によってエネルギーの地産地消が可能であることを説明した。その後、都留環境フォーラムの加藤・都留市職員の佐藤さんが、木質ペレットを普及するためのアイデアを発表した。



### ◆清里の森を2.5時間ぶっとおしで歩きまわるWS

実施者：古川正司（株式会社さいかい産業）、  
佐々木豊志（くりこま高原自然学校）  
加藤大吾（NPO 法人都留環境フォーラム）

「森を歩きまわろう」ということで、川俣渓谷への小径を歩いた。急斜面を下り、川で人休憩した。清里の水はとても冷たく、澄んでいてとてもきれいだった。川のそばで、落ち葉ベッドをした。他にも、動物の形跡や不思議な木があるたび、皆で立ち止まり、自然に触れることを皆で楽しみ、心も身体もリフレッシュすることができた。



### ◆夢の田舎暮らしは本当にできるのか？

実施者：高見滋・河野格（NPO 法人都留環境フォーラム）

田舎暮らしにおいてそれぞれが取り組んでみたいことを自己紹介と共に発言。合鴨農法・地域の場づくり・陶芸作業場設置などの様々な意見を付箋に全て記し、黒板に貼っていった。今年中に実現させることを宣言し、WSは終了した。



### ◆みんなで写真を撮りながらお散歩

実施者：吉田峰規（鳥取大学）、渡邊智之（帝京科学大学）

ゆっくりと散歩をしながら、各人のカメラで写真撮影。自然観察エリアをゆっくりと1時間半ほど歩いた。その後、静かな林の中でそれぞれの視点で捕らえた写真をスライドにより共有した。参加人数は多くはなかったが、ひとつとして同じものではなく視点の違い、多様な自然の魅力を楽しんだ。



### ◆エコロジカル・シンキングゲーム リターンズ！！

実施者：奥宮健太（BEANS BEE）

2日目のWS「エコロジカル・シンキングゲーム」を再度実施した、リターンズ版。参加者4名にスタッフ1名を加えた5名でゲームを行った。少人数にまとも、アットホームな雰囲気の中、「このシロツメクサを採ってしまったら、ヤマトシジミは生きていけなくなってしまうから…」など、参加者が考えを巡らしながら、いつのまにか動植物の視点になってプレイをしていた。ゲーム終了後、コマを積み上げてつくった生態系のピラミッドに参加者が感服していた。

### ◆かごしま茶×マイボトルの推進

実施者：萩原豪（鹿児島大学）

主催者の担当するゼミではタンブラー普及活動を取り入れている。しかしタンブラーの価格や重さ、給茶方法など様々な問題点がある。これらの解決策としては、価格とこぼれやすさを二段階でカバーすること、またWSなどを行いタンブラーのブランド化を図ることが挙げられた。部屋だけでなく、足湯に浸かりアイスクリームを食べながら案を出しあい、主催者・参加者の両者にとって、楽しく有意義な時間が過ごせたようである。



## ◆日本とメキシコをつなぎましょう！

**実施者：賛田 強エドワルド**

はじめに自己紹介をした後、メキシコのイメージはどのようなか参加者が意見を出した。その後で、メキシコの自然環境やエコツーリズムのDVDを見て、日本とメキシコの環境教育の似ている点や異なる点を質問したり、意見を出し合うなどして、今まで知らなかったメキシコの環境教育・エコツーリズムについて考えた。



## ◆森で気づいたことを日々の暮らしにつなぐ

**実施者：鈴木崇則・農本真由子・佐崎由佳(京エコロジーセンター)**

森で出会った「気づき」をその場だけで終わらせるのではなく、普段の暮らしでの行動に結びつけることができないだろうか。まず森で気づいたことについて意見を出し合った。その後、森の木、鳥、芋虫から、都会のカラスまでを結びつけるワークを行った。



## ◆生物多様性まんだらカードゲーム体験会

**実施者：京極 徹(公益社団法人日本環境教育フォーラム)**

**赤松良彦(アーバン・コミュニケーションズ)**

2日目に実施した3.5時間ワークショップに参加できなかった！という方の熱いリクエストにお応えして、再度、実施することになった。やりたい！というだけのことではあって、参加者の皆さんが主体的に楽しんで様々なまんだらの形をつくっていて、実施者の方が感心させられるワークだった。



---

# 3 日目

## 全体会 3・閉会式

---

司 会 : (公社)日本環境教育フォーラム理事 西村仁志

全体会 3

椅子取りゲーム式全員参加ディスカッション

閉会式

総括 : (公社)日本環境教育フォーラム理事 福井光彦

# 3 日目 全体会 3

司会：(公社)日本環境教育フォーラム理事 西村仁志

これから全体会、それに続いて閉会式を行います。

全体会では、今回のミーティングのまとめの時間として「椅子取りゲーム式 全員参加ディスカッション」をします。まず、世代、所属団体など、豊かな多様性の5人組を作ってください。グループ内で今から簡単な自己紹介をしてください。

その後、皆さんに質問を3つ提示します。質問に関して各グループで話し合っていていただいて、これは皆さんに発表すべき意見だというのが出ましたら、椅子取りゲーム式(先着順)で前に出てきて発表してください。椅子は5つです。椅子に用具が置いてありますので、自分のキーワードになるものをそれに書いていただいて、それを皆さんに見せながら発表していただきます。



## 椅子取りゲーム式全員参加ディスカッション

### 第1問

#### 今回「いのちのつながり」について考えたことはどんな事？

##### 「クジャク」

発表者：大堀健司さん

今回のミーティングでは外来生物の発表をしたのですが、他にもいくつか外来生物のプレゼンがありましたね。石垣島ではものすごくクジャクが増えていまして、頭が良すぎて手に負えない状況です。駆除もしているのですが、実際に駆除しているのは鳥好きの人が担当で、その環境省の人が、心の中で泣きながらやっております。外来生物も生きものとして一つの命ですから、不幸な命をこれ以上増やさないように外来生物をもう少し考えていただきたいなと思います。

##### 「生態系の中で生きているという実感」

発表者：加藤大吾さん

この間イノシシをさばいて食べたのですが、食べる食べられるといった「いのちを感じる」という話をしていました。生態系の中で生きているということを我々は実感しなければいけない、というよりは、実感したらいいということかなと思います。例えば、枯葉がバクテリアで分解されることに対して「ああ、ありがたいな」とか「そうなんだな」という実感があつたらいいよね、という話をしました。

##### 「いただきます」

発表者：小林 修さん

はじめは息子とのつながりを言おうと思ったのですが、それをきっかけに子どもとどうつながっていくか、というところで、自分のグループでは食農関係の方が多くて、「食べること」でのいろいろなつながりを意識する、ということが大切なのではないかと思います。今回のCOP10でもこの「いただきます」という言葉がキーワードになったということで、今後国際的に共有される1つの価値観なのかなと思います。

##### 「山で遊んで学ぶ！」

発表者：小田健統さん

自分が自然観察指導員というものに興味を持ったものの、何をすればいいのかわからなくて、面白そうなものがあると思って参加したのがこの清里ミーティングでした。今回ワークショップで「ネイチャーゲーム」に参加し、山で遊んだことが本当に楽しくて、これを子どもたちにもしていただけたら、豊かな心になって環境に興味を持ってもらえると思いました。テレビゲームが流行っている中で、森で遊ぶということは、自分で考えて、自分で行動して、さらに考えられる。無限の遊び場が森だと思います。生態系が人をつくっていて、森が人をつくっているということに、もう一度気づき直して、森の素晴らしさを知って、森で遊ばせることによって、子どもたちに「次世代の環境」を考えさせることができるのではないかと思います。

## 「ありがとうございます」

**発表者：高森彦輝さん**

今回、「自分で自然学校をやりたい」ということだけ考えてきて、どうしようかなと思っている所を助けてもらおうと思って来たのですが、本当に皆さんに助けて頂きました。いろいろなアイデアもエネルギーも頂いて、本も頂いて、いっぱいもらって帰れるので、僕はとてもラッキーだと思います。今回、知り合いは一人し

かいなかったのですが、いろいろな人に出会えてよかった。メールや本で知っている人もいましたが、会って話をすると伝わってくるものが違いますね。会って、想いをぶつけ合えて、それがすごくいいなと思いました。こうやってみんなが集まる場というのは、すごくパワーにあふれているから、本当に今日は来てよかったなと思って、ありがとうございます。

## 第2問

### 私が「いのちのつながり」を伝える方法は？

#### 「冬越し」

**発表者：日鷹一雅さん**

今回初めて野外で湊さんとインプリをやらせていただきました。その時のテーマが「冬越し」。

なぜ「冬越し」をやったかという、田んぼや池に行ってみるとたくさん赤とんぼが死んでいる、または死にかけています。最期の命を振り絞って何をしているかという、彼らは命をつなごうとして卵を残しています。その卵は、田んぼの土の中や池の中に沢山あります。死んでいるのばかり見ると可哀想だと思うけれど、よく観察すると、いっぱい命をつないでいる。木であれば木の芽だったり、いろいろなことがある。だから冬越しをみると、生と死のつながり、いのちのつながりが見える、ということです。

#### 「体験のあとのふりかえり(場の設定も含め)」

**発表者：河野 格さん**

オードソックスかもしれませんが、「体験のあとのふりかえり」ということでグループ内の意見がまとまりました。「体験をする」ということが大前提にあるが、それを効果的に意味を持たせるには「ふりかえり」であり、「ふりかえり」なくして体験は意味を持たないのではないかということをお話しました。その時の非日常の中で、少し興奮している状態から戻すという場の設定も含めて、「ふりかえり」をすることで初めて「いのちをつなぐ」体験をした後に意味を持つということになるのではないかと思います。

#### 「日々の日常で疑問をつぶやく」

**発表者：加藤まどかさん**

3.5時間のワークショップや、大きなキャンプだけが伝えられるものではないなと思います。例えば、毎日の食事で「この割り箸は、何の木だろう？」という、自分の心の中にわき起こった疑問をふとつぶやくことで、そのとき一緒にいる人と一緒に考えて、共有することができたら、伝えていくことができるのではないかなと思いました。

#### 「ミツバチ」

**発表者：岡本明久さん**

僕は今、ミツバチを使って環境教育プログラムを行って楽しんでいます。子どもたちと一緒に蜜をとって、その場でパンに塗って食べる等のことをしています。その際に、働き蜂が一生をかけて作ることのできるハチミツの量はティースプーン1杯分であるという事実を伝えると、今までパンにハチミツをたくさん塗っていた親子が、「一体、何匹分のミツバチを食べてしまったのだろう」と考えるようになり、食べ物からいのちのつながりが見えてきたりするみたいで、そんなことを実践しています。

#### 「食、体験」

**発表者：長谷川俊一さん**

キーワードとして一番伝わりやすいものでは「食」が出てきました。やはり濃密に関わっているというのがあります。例えば、魚を釣って、その魚を食すことが、川や海の環境、ひいては山の環境にもつながっているので、そういったことを絡めていくのが伝わりやすいのではないかと。それに加えて、自然の体験をして、自然界のエネルギーを体で感じていただくと、なおいのちではないかという話になりました。

## 第 3 問

来年は清里ミーティング 25 周年です。

25 周年にふさわしい提案について各グループで考えてください。

### 発表者：白井考賢さん

これまでの 25 年間のミーティングの中で、どういう成果が挙げられたのかを来年この場で再確認して、今後 25 年間で自分たちはどういうミーティング、環境教育、ESD のあり方を築き上げていければいいのかということを考えて、最終日の全体会の場で「25 年後には自分はこういうふうになる」というのを壇上に出て一人ひとり約束していただく、ということを思いついたので、是非検討をお願いします。

### 発表者：山田俊行さん

これからの 25 周年を考えるという意味で、さらにもう一步考えました。25 歳の人、50 歳の人、75 歳の人を呼んで、それぞれこの先の 25 年を考えよう、というものです。さらに、25 歳・50 歳・75 歳の人を 3 人を連れて来た人は参加費がタダ、というものを考えました。

### 発表者：佐藤 洋さん

グループ内の古川さんのアイデアです。参加者全員で、清里のキープ協会の森を森林整備し、それをエネルギーに換えるということをやれば面白いと思う。さらに、1 万円参加費を安くする代わりに、働くということをする。それから、実践がすごく大事だと思うので、これは極論だと思いますが、ここまで自分のエネルギーだけで来る。できる、できないは関係なく、ここまで何とかして来る、ということをごここでみんなで語らう。



---

# 閉会式

## 総括

## (公社)日本環境教育フォーラム理事 福井光彦

皆さん、こんにちは。3日間お疲れ様でした。

総括ということはとても私にはできませんし、先程からの議論でほとんど総括され尽くされたと思いますので、この3日間参画いたしまして、私が率直に感じたことをお話ししたいと思います。

私は昨年まで35年間、民間企業で仕事をしていました。最後の頃、自分の仲間と共に「いい組織にしたい」と常々考えていました。その時に「革新」「連携」「明るく楽しく」という3つのキーワードを職場の仲間にも伝えて、それを具体的に実践するよう一所懸命やってきました。

「革新」は、新しい仕事をやろう、新しいことにチャレンジしよう、新しい仕事の仕方をしよう、ということをいつも言っていました。

「連携」は、仲間と一緒にやろう、一人のプレーはするな、社内外のネットワークを作ろう、仲間をたくさん作って仕事をしよう。

「明るく楽しく」は、つまらない仕事はやめよう、自分の仕事は常に明るくしていこう、ということをキーワードにしてやってきました。

3日間このミーティングを見て、「自分の言ってきたことが、

ほとんど体现されているのではないかな、このミーティングは。」と思いました。新しい仕事のアイデアがたくさん出ていますし、皆さん方のネットワークづくりがどんどん進んでいますし、明るく楽しく過ごしていた。特に夜、皆さん方が楽しくやっているのが非常に良かったと思います。だからこそ、25年間続いてきたのだろうと思っています。

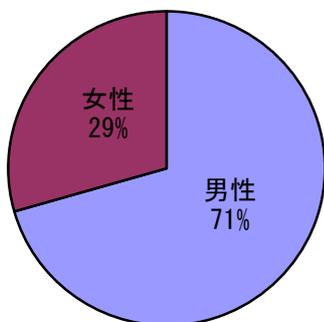
次の25年という話が出ています。これからいろいろなアイデアを出して、また皆と一緒に考えてやっていきたいと思っていますが、とりあえず大事なことは、来年です。来年は次の25年のはじめの一歩ですので、少なくとも私は当然参加をしようと思うし、皆さんも継続して是非参加して頂きたいなと思っています。できれば、このメンバーは次の25年間続けて参加するということを誓い合って、私の最後のご挨拶としたいと思います。ありがとうございました。



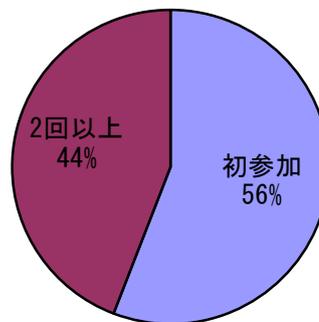
# 参加者データ

## ～データに見る清里ミーティング 2010～

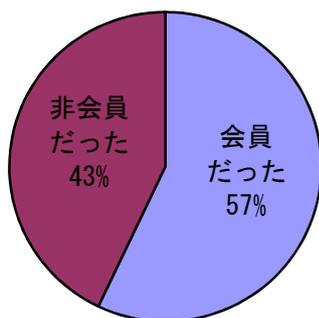
性別



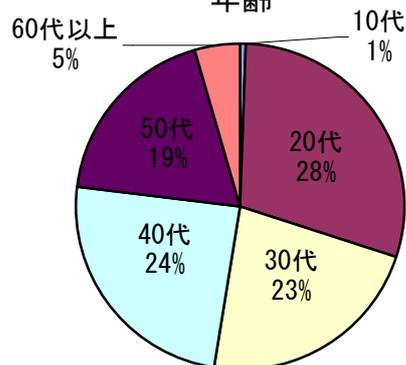
参加回数



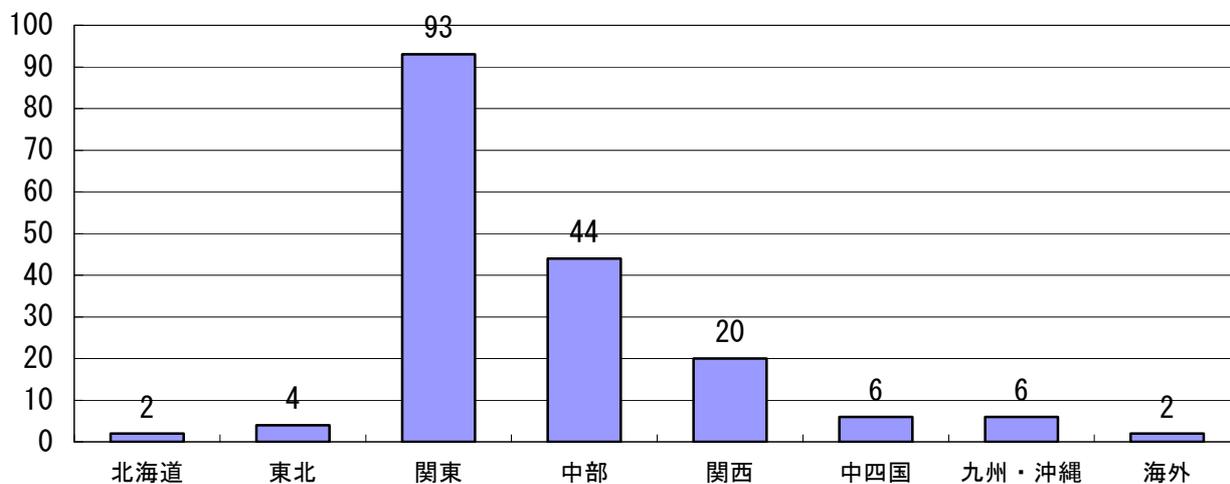
JEEF会員割合



年齢



地域



## スタッフ名簿

都道府県	氏名	活動団体	都道府県	氏名	活動団体
茨城県	久下 真希子	立教大学	山梨県	饗場 葉留果	(財)キープ協会環境教育事業部
埼玉県	林 元洋	神田外語大学		家倉 舞	(財)キープ協会環境教育事業部
東京都	有田 真里香	立教大学		石川 昌稔	(財)キープ協会環境教育事業部
	加藤 超大	立教大学		市川 雅美	(財)キープ協会環境教育事業部
	金久保 優子	(公社)日本環境教育フォーラム		岩渕 真奈美	(財)キープ協会研修交流事業部
	金子 直裕	立教大学		小野 明子	(財)キープ協会環境教育事業部
	京極 徹	(公社)日本環境教育フォーラム		小野 千春	(財)キープ協会環境教育事業部
	小堀 武信	(公社)日本環境教育フォーラム		加藤 アミ	(財)キープ協会環境教育事業部
	佐藤 秀樹	(公社)日本環境教育フォーラム		関根 健吾	(財)キープ協会環境教育事業部
	清水 雅紀	立教大学		高木 恭子	(財)キープ協会環境教育事業部
	垂水 恵美子	大妻女子大学大学院		竹越 のり子	(財)キープ協会環境教育事業部
	塚原 一恵	(公社)日本環境教育フォーラム		田開 寛太郎	(財)キープ協会環境教育事業部
	坪松 美紗	立教大学		徳永 悠樹	都留文科大学
	長谷川 賢司	早稲田大学大学院		鳥屋尾 健	(財)キープ協会環境教育事業部
	畑井 亜衣	東京外国語大学		中山 孝志	(財)キープ協会環境教育事業部
	林田 悦弘	(公社)日本環境教育フォーラム		畑中 健志	都留文科大学
松井 佳織	立教大学	増田 直広		(財)キープ協会環境教育事業部	
横田 雅彦	立教大学	本杉 美記野		(財)キープ協会環境教育事業部	
神奈川県	市村 しの	立教大学		若林 正浩	(財)キープ協会環境教育事業部
	折戸 美咲	立教大学		小笠原 一恵	大阪教育大学
	太刀川 みなみ	立教大学			



清里ミーティング2010を支えてくれたスタッフたち  
みんな、ありがとう！！



清里ミーティング2010の仕掛け人  
(公社)日本環境教育フォーラム理事 川嶋 直

